

私の英国留学記

〈グローバルゼーションと国家の内在論理〉

山田 暁生

Akio YAMADA

《INDEX》

- Prologue / 序
 The Objective / 滞在の目的
 Reification / 物象化
 Trinity College Dormitory / トリニティー・コレッジ・ドミトリー
 Thomas Haller / トムス・ハラー
 Traditional Afternoon Tea / アフタヌーン・ティー
 Research / 研究調査
 Go Around / 調査開始
 Hedgehogs / ハリネズミ
 Beer Festival / ビア・フェスティバル
 Muslim Usama Ali / ビンラディンの弟とイスラム世界
 Real Intelligence Recherd / 知の妖怪との出会い
 Vandalism / 暴動
 Intelligence Lesson / インテリジェンス・レッスン
 A French Doctor / チェルノブイリのフランス人医師
 Religion / 宗教
 Cambridge / ケンブリッジ
 The Cheese and Wine Festival / チーズ&ワイン・フェスティバル
 Bath / バース
 London / ロンドン
 Essence of Education / 教育の核心

序

二〇一一年八月、私はオックスフォードの中心部にほど近い、キングストンロード沿いある「ヴィクトリア」というパブで話し込んでいた。相手は現地で親交を深めたオックスフォード大学の学者、リチャード・スウェル・ラター博士である。私はこの夏、研究助成を受け、オックスフォードで調査を進めていた。博士は私の研究に関心を示し、いつか私たちは哲学や宗教、文化・価値といった諸概念をめくりながら教育や倫理、国家、民族などについて、パブで会っては幾度も意見交換を続けていた。

リチャードは机に両肘をつき、正面から私を見据えて言った。

「アキオ、リサーチのデータをざっとみれば、君の狙いどおり出身国によって考え方に違いがあることは、とりあえず示すことができたとはいいいんじゃないかと思う。問題はこうした国家間の違いをどう見るかだな。共同体によって考え方や常識に違いがある、その違いを哲学的にどう捉えればいいのか、アキオが知りたいのは要するにそういうことだろ？ つまり「文化」とか「価値」とは何かということ、突き詰めて分析しようとしているのだな？」

「うん、そういうことだ。リチャード、僕が今回の研究を通してはつきりさせたいのは、それぞれの共同体のがもつ「思想」の妥当性なんだ。たとえば『人間は倫理に従うべきか』、という命題がある。倫理に従うことが正しいのであれば、従うべきはその人間が帰属する共同体の倫理だ。しかし哲学的に問題になるのは、倫理の中身が

共同体によってそれぞれ異なるために、この命題が「論理的に真」ではないことなんだよ。この研究の核心は倫理の妥当性がどう保証されるかなんだ。僕は自分を含めて教育に携わる者が、倫理を語るために必要な条件を明確にしたいんだ」

リチャードは何度か頷きながら、黄金色のビールの入った1パイントグラスをゆつくりと傾けてから言った。

「それは哲学史が明らかにできなかった問題そのものだ。哲学者はそこで皆立ちつくしてきた。しかしアキオ、君の研究には正直ちよつと気になることがある。気を悪くしないでくれ。君の言うとおり、人間は倫理に従うべきだということ、そして共同体によって公理系が異なる以上、生まれ育った共同体の倫理に従うべきだという考え方は私も正しいと思う。でも君の論法には、何か危うさを感じるんだ」

「どういうことだ？」

「哲学的な構成に問題があるわけじゃない。よく勉強していると思うよ。でもやり方がちよつと荒っぽい感じがする。これはアカデミズムにどう接するかという問題だ。私は倫理や教育についても、人が盲信することは避けるべきだと思う。問題は倫理とか教育といったカテゴリーにあるのではなく「行為」にある。宗教に例えてみれば分かりやすい。「正しい信仰」とは何かだ。例えば原理主義を考えてみればいい。原理主義は単なる盲信とは違う。あれは神へのアプローチの仕方を間違えることで生じるんだ。僕はクリスチャンだ。だから信仰するということがどういうことなのか、よく分かつ

ているつもりだ。アキオには理解できないかもしれないけれど、クリスチャンであるということは、生半可なことではないんだよ。毎日真摯に神に向き合い、人々に向き合い、己の在り方を見つめては懺悔し、人々のためになることを考える。同時に聖書の読み込みも重要だ。僕たちは聖書と格闘する。クリスチャンであるということとは、アカデミズムと深い信仰の両方を追求し、「実践」しなくてはならない。それは本当に苦難の道なんだ。だが、それを地道に実践していれば原理主義の入り込む余地はなくなるんだ」

「つまり原理主義は信仰の怠慢ということか」

「そういうことだ」

「それはわかるよ。ちなみにアメリカのファンダメンタリストについてリチャードはどう思う？」

「いい指摘だ。まさにあれが信仰の最も墮落した姿だ。原理主義のテロリストの場合、アカデミズムは不足しているが少なくとも真剣さはある。視野がとても狭いけれど、突き詰めている。商売でやっている連中を除けばね。だがアメリカのファンダメンタリストは、アカデミズムも信仰の姿勢も両方とも欠けている。一番おめでたい姿だ。信仰を装った思考停止だよ。たしかに人々が既存の何らかの概念を信じることは社会の安定にとって不可欠だろうさ。物語のない国は存続できない。組織も同様だ。だが盲信してはいけない。原理主義とは違うものでなければいけない」

「つまりリチャードが僕の研究について言いたいことは、教育活動は本質的に神の信仰同様で、アカデミズムと実践を追求する姿勢

が欠けてはいけないということか」

「その通りだ」

「たしかに学校という既存の教育制度、あるいは教育活動そのものを疑う市民は少ないと思う。左派にはそれを疑う人もいるけれど、彼らは国家による統制としての教育が嫌なだけだ。しかしリチャード、僕は人間はそもそも思考停止する生き物だと思う。最初は意味のあるシグナルも、やがてはそれを見て反射的に動く行動パターンが人間にはできる。それはそれでいいと思うし、仕方のないことだ。人間社会は常にそうやって回っているじゃないか。だから原理や思想が必要になるんだ。問題なのはその妥当性が決着しないまま宙に浮いていることだよ」

「アキオ、原理主義の人間はまだいい。彼らにも一定の役割がある。しかしアメリカン・ファンダメンタリスト型は害を及ぼす。あらゆる思想、つまり民主主義、法治主義、平等主義、共産主義といったイデオロギーから民族やナショナリズムまで、本当に全ての思想に原理主義は巢食うんだ。学校も例外ではない。問題はすべてどういう姿勢で向き合うかだ。その意味でその国の歴史や文化、価値観を丁寧に見詰めたおしながら、超越論的な概念を基盤に教育は行われるべきだという君の考え方は全くもつともだし、私は賛同するよ。しかし倫理に対する者はすべからずそれと向き合って問い直すことに意味があると思う」

「リチャード、それを全ての人にさせることなんて、本当にできると思っているのか？」

「できるできないの話ではない。君は哲学者として生きようとしているのか？ それなら今のスタンスでいいさ。でも君は教育現場で倫理を生かそうと思っているんだろ？ だとしたらそもそも倫理というのとは唯一そのような形でのみ機能するんじゃないのか？ 上から倫理をいくら分析したって、倫理は何の真価も発揮しないよ。君のやろうとしていることは、学者が牧師たちに「バイブルは正しい」と宣言することで、牧師が安心して思考停止していい状況にしたいというのと同じだ」

「そうじゃない。僕が言いたいののは、聖書を疑うことに意味はない、聖書に真剣に向き合い続けていいのと言いたいだけだ」

「いや、聖書を疑うことは信仰者自身が乗り越えなくてはいい壁なんだよ。クリスチャンは誰もが最初、聖書に疑いを持って悩む。水をワインに変えるような荒唐無稽な話にどう向き合えばいいんだと戸惑うんだ。しかし悩み続け、考えつづけた末、信仰の本質とはとにかく信じることなのだ気づくんだ。そのプロセスが大切なんだよ。倫理だって、各個人が疑いを持って、悩んで、そして乗り越えていく過程で体得するものではないのか？ 最初に答えを与えたって何の意味もないんだよ」

「面白い、君は本物の信仰者だ。その君から倫理や信仰とはどういうことなのかを聞いたことは幸運だったよ」

「それならよかった。まあ、この話はこれぐらいにして、話を最初に戻そう。アキオはどんな方法論なら倫理の妥当性を保障しようと考えているんだ？」

リチャードとの議論はいつも真剣勝負だ。こんな話をしていると、イギリスの夜は知らぬ間にふけてしまう。

オックスフォードのブロードストリート沿いにBackwellという古い書店がある。店構えは変わり映えないごく普通の本屋であるが、左右二つある入り口の左の方から入るとすぐに地下へ降りてゆく階段があり、下ると木製の扉があつて、その扉の向こうに巨大なホール状の地下空間が広がっている。その大きさは外観からはまず想像がつかない。知らずに入ると誰もが驚きの声をあげる。ホールの壁は学術書に埋め尽くされ、中心に向かって同心円状に徐々に低くなり、哲学書がおいてある中央部がいわばすり鉢の底である。この地下空間の素晴らしさはその大きさだけではない。全体がシックなビクトリア調のインテリアで統一されていて、ホール全体が見渡せる入口の扉あたりから見れば、ここが世界で最も美しい書店と称されるのもうなずける。

冷戦当時、西側諸国で共産圏の出版物を手に入れることは極めて難しかった。一般の本屋にそのような「禁書」が置いてあるはずもなく、また出版国から外への持ち出しが禁じられていた本も多かったため、西側の人間にはほとんど手に入れる手段がなかった。だが、このBackwellで注文すると、不思議なことに数週間で手に入ったという。Backwellは共産圏との間に正規とは異なる裏のバイプをもっていたのだ。これはオックスフォードという地の性格を象徴するエピソードである。オックスフォードの水面下には何が広が

っているか知れたものではない。この隠れた巨大地下ホールのように。

リチャードと議論した翌日、私はすり鉢の底でワイトゲンシユタイン関係の本を長時間物色していたが、結局前から手に入れたかった論考の英語版を手にはレジへ向かった。店を出ると、コレッジの間を縫うように走る小路を歩いた。大学は四百年近い歴史を刻んでいるので、建材であるライムストーンはもはや飴色に色褪せていて、それが実に美しい味わいを醸している。高い石壁に挟まれて複雑に入り組んだ路地は、まるで中世の城郭か迷路を歩いているかのよう。に誰もが錯覚するだろう。私はその「古城の迷路」を出ると、広大なクライストチャーチの庭へ入り、森の中を流れる小川沿いの道を足早に歩いた。そのままクリークにそっていくと、運河の脇に立つ一軒の古いパブの裏へ出る。私はその古いパブに入り、カウンターで1パイントのバルマースを頼んだ。パブの名をHead Of The Riverと呼ぶ。

この歴史あるイングリッシュ・パブには運河に面したテラスがあり、人々は水面を行き来するボートや大学のカッター部の練習を眺めながらビールを飲んでいる。ときどき水鳥が遊びに上がってきたりもする。パブの敷地はクライストチャーチの森と運河、それに中世に作られた石造りのアーチ橋とで三方を囲まれ、まるで田園地方にいるようにのんびりとした時が流れている。私は街を歩くと、きまってここで一休みした。

涼やかな風が水面を撫でながら通ってゆく。私はテラス席に座つ

て論考を開き、冒頭から目を通しはじめた。この書に記されたあまりに有名な一節。

およそ語りうるものは明晰に語られる。

語りえぬものには沈黙しなければならない。

八十年前、ワイトゲンシユタインもこのイギリスの地で言語哲学と格闘していた。私はオックスフォードで研究のデータを取りながら、この「語りえぬもの」をめぐる思索を続けていた。

時刻は夜の七時をまわっていたが、空はまだ昼間のような明るさで、本を読むのに何の不都合もない。初夏のイギリスは九時を回っても明るい。夏のイギリスの夜は軽い白夜なのだ。

そして私は昨夜に引き続き、この日もまたリチャードと会うことになっていた。約束の時間が近づいたので、私はビクトリアまで歩いていくことにした。

今頃、ビクトリアのテラスでは、リチャードが二人用の席の真ん中にどっかりと腰かけ、巨体を肘で支えながら煙草の煙を吐いていることだろう。こうして私たちは、今夜もまた長い議論へ入っていくのだ。

The Objective

オックスフォード大学は一二六四年創設のマートン・コレッジを

はじめ、三十九のコレッジと七つのホール、それに博物館や図書館などからなる教育組織で、英国圏で最古の大学である。オックスフォードの町はこれらのコレッジ群を取り囲むように、あるいは校舎の間隙に複雑に入り込みながら広がっている。大学の歴史とともに発展した街だけあって、古い建造物や老舗の商店も少なくない。イギリスの街の中でもオックスフォードには独特の雰囲気がある。

さて、この小文は留学中の出来事をふり返りながら、徒然書いてみようと思っている。特に出会った人々のこと、オックスフォードで学びながら感じたこと、考えたこと、そしてイギリス生活で出会った文化や面白い食べ物のことなども記してみるつもりだ。留学未経験の方が何となく留学気分を感じられたらいいと思っている。また留学を考える手引きになればとも思っている。少々長くなるかもしれないが、実際にイギリスに滞在するなどのような感じなのか分かっていただけるものにもなればと思う。

滞在の前半は留学前からの予定通り、調査研究が中心の生活になった。それはそれでかなりのパワーが必要な日々だった。しかし後半に入って、日本では出会うことがまずないような驚くべき人々との出会いがあり、非常に面白い体験を沢山することができた。それを転機に私のイギリスでの生活は急変していく。

ここでひとまず私が今回の渡英に至るまでの経緯を記しておかなければならないだろう。ちよつと込み入った話なので、興味がなければ次の見出しまで読みとばしてほしい。

私が初めて英国を訪れたのは二〇〇九年の七月で、場所は同じオックスフォードだった。教育の在り方とは万国共通ではない。それぞれの国で独自の教育がおこなわれており、その違いはそれぞれの国の歩んだ歴史や民族性に由来する。日本の教育も世界基準で見れば独特のものである。そしてそれは日本の歴史や文化、習慣、伝統、倫理観、自然観、宗教、そして島国の住人であり農耕民族でもあるという「日本人の気質」などに色濃く影響されている。当時私は、他者と比較しながら日本人とは何かを考えるために、古代ローマに取り組んでいた時期で、遺跡や博物館を見るためにローマを実際に二度訪れていた。無論、日本人という民族を知るためにはじっくりと日本を歩き、それを見つめることが常道だろう。しかし比較対象がなければ、その独自性を浮き上がらせることはできない。外部世界との比較の中で日本という国の客観的な特徴が見えてくる。私はそうした比較対象として古代ローマを選んだのだった。

ローマを選んだ理由は、古代ローマが当初多神教社会だったからだ。塩野七生は日本人と古代ローマ人は似た気質をもつと折に触れて書いている。そしてそれは「多神教」という宗教的要素に由来するのだという。彼女のこの言説に私はとても興味を覚えた。はたして多神教社会の住人の「気質」とはいかなるものか。

多神教は、他の神々の存在を許容する公理系だ。このことだけでも一神教社会では考えられないことである。だが多神教社会では他の神々を許容するにとどまらず、神々は何の問題もなく共存し、さ

らに新たな神をためらいもなく受け入れてしまう。絶対神だけを唯一無二とし、他は存在すら認めない一神教とは根本的に異なる。こうした宗教的な思考体系が人間世界で受肉化すると、「他者」や「外部世界の住人」の存在を認めるか、認めないかという民族の気質に影響してくると塩野はいうのだ。これらは「自己・非自己」の認識と反応という意味では、まるで免疫系だ。フアナティックな一神教は時に外部世界に対してアナフィラキシーを起こす。その一方、多神教の共同体は非自己に対してゆるやかに反応する。非自己をとりこみ、いつの間にかそれは自己の一部になっている。塩野は多神教社会が特有に持つ気質を、ひとことでは非自己への「寛容」と言うのだ。彼女は多神教の民の持つこうした寛容こそ、ボーダレスの世界に求められる資質と考える。私は塩野のこうした言説に触れるにつけ、同じ多神教社会としての古代ローマの民族性を把握し、それを日本と比較することで、反転して日本人というものを知り、今後世界で日本人の果たすことのできる役割を見定め、己の中で教育の道筋の一つをつけることができるのではないかと思ったのである。

そんな考えに従って古代ローマに取り組み中で、日本民族と古代ローマ社会の共通点が見えてくる一方、たがいの相違点やそれぞれの特徴もまた浮かび上がってきた。日本人は昔から「伝統」や「形式」を重要視し、それが考え方や生活習慣に深く組み込まれている。それはこの日本文化という不可思議で複雑な「独自の文化」を語る

上で見過ごすことのできない表徴の一つといえよう。ここでいう独自の文化とは、ドイツ独自とかスペイン独自というように「その国独自の」という意味ではない。サミュエル・ハンチントンが著書「文明の衝突」において、日本文明を大陸文化とは切り離れたオリジナルの一文明圏と定め、世界の七大文明の一つと位置づけた。私が言っているのはそうした七大文明の一つに数えられるほどの「独自の文化」を象徴するという意味だ。伝統や形式を重要視する国民性というのは日本人を知るうえで見逃せないメルクマールである。日本文明を特徴づける様々な記号、「協調」や「自然崇拜」や「礼節」などとともに大見出しになるようなキーワードだ。

古代ローマの勉強が一段落したところで、私は伝統とは何か、日本人はなぜ伝統や形式を重要視し、それが共同体のあり方によろしく影響したのかについて考えようと思った。そしてそうした事柄を考えるには、日本と同じ島国であり、同じく伝統や形式を重要視すると一般的に言われる英国と比較してみようと「とにかく」考えたのだ。いま考えてみると実に安易な発想である。しかし実際に行動を起こすと思わぬ副産物が沢山収穫できた。

英国人の伝統観もまた彼ら独特の内論に依存しているはずである。日本とはまた異なる共同体の構造の中でどのように伝統が位置づけられているのか、私は自ら英国の生活を経験し日本と比較することで伝統とは何かについて考えてみることにした。それにイタリアを巡る上で言語の壁が障害になっていた。先延ばしにしてきたが、いずれは腰を落着けて外国語に取り組みしなければならないこ

とも考えていた。こうしたいくつかの要求のベクトルを満たす地として、英国でも特にオックスフォードが浮かび上がってきたのである。

もう一つ、「伝統」や「文化」をめぐる数年間の哲学への取り組みがこの滞在最大の動機になっている。それはほかでもない、冒頭に記した「語りえぬもの」をめぐる思索であり、助成を受けた研究のテーマなのであるが、それについてはいずれ話をしていくこととしよう。

※蛇足として

留学の適齢期というテーマについて、少しだけ感じていることを述べておこうかと思う。留学は一般に学生時代に行く人が多い。これはもちろん言語の習得は若い方が有利だからだ。加えて、感受性の強い若い時代に海外経験をするのがいいことだとよく言われる。だがこれは諸刃の剣だ。若くして海外に出ればその衝撃は確かに大きいだろう。しかし海外にいる日本人の若者をよく観察すると、その後二つの系譜に分かれていく。一つ目のタイプは、留学という大きな経験をしながらも己を見失わず、日本人としての矜持をもちながら自らの使命を追う者たちだ。考え方がしっかりしているので、話をしても面白い。地に足がついているので、社会に出てもしっかりと活躍する人材に育っているように見受けられる。二つめのタイプは、妙な退廃観をもったタイプだ。その多くはモラトリアムである。つまり目的を持ってきていない。あえて言うなら目的を探すのが目的で来ている。このタイプはいつまでもダラダラと留学している人間が多く、覚悟や気概がないので、会話

をしていても面白くない。どういうわけか彼らのほとんどは本当に軽薄な国際感覚の持ち主だった。

私が思うに、国籍が違う人と分かりあるのが留学のいいところだ。しかし、まともにつきあえばつきあうほど、絶対に分かりあえない部分もあることが分かってくる。彼らはそのところが理解できてない。人類みな兄弟で、話せばすべて分かりあえると思っている。ダブリンではマルクス主義者でもないのに（マルクス主義者ならまだ話は分かる）、「国境の壁を壊してやるんだ」と言っている者もいた。彼らは文化や歴史、価値といった共同体のもつ底力を全く理解していないのだ。

また、自分のアイデンティティーが希薄な若者は、自国への誇りも乏しい。自国への誇りのない者は、自国のことを語るができないから、知的水準が低いとみなされ向こうでは信用されない。情けないことに、日本人の若者は、ダントツで自国のことを語れない。だから日本人の若者を無知だと思っている外国人は少なくない。このように留学というのは「すればいい」というものではないのだ。「目的」と「覚悟」、そして「日本を語れる知識」をしっかり持つていくことが最低限必要だと思う。

年齢の話にもどそう。私も三十歳を過ぎてから留学することになった。もちろんこのことにはメリットもデメリットもある。デメリットとしては語学の習得に多少苦労するということだ。しかし語学の習得度というのは、語学を学ぶ目的がはっきりしているかどうかや、モチベーションによって大きく変わってくる。一方で歳がいつてからの留学にもメリットがある。例えば五十歳を過ぎてから留学した場合、五十歳ではもはや感受性が低下しているから留学しても意味がないかといえ、そんなことは全くない。そのぐらいの年齢で初留学をしている日本人を何人も見ているが、むしろそういう人ほど目を輝かせて海外生活を送っている。学生に比べれば彼らの視座は比較にならないほど明

確になつてゐるし、留学の目的もはっきりしている。もちろん人によるが、概して様々な知識を充填した上での渡英なのだから、学生たちの生半可な留学とは意味が違う。驚きや発見と同時に、冷静に見るべきものを見、分析すべきものを的確に分析する冷めた目を同時にもちつことができる人が多い。年を重ねてからの留学も悪くないのだ。

Refication

二〇一〇年の夏を私はダブリンで過ごした。文学の町ダブリン。アイルランドに暮らすケルトの子孫たちは強烈なナショナルリズムとともに生きている。それは誇りと恨みが入り混じった複雑な感情だ。特にイギリスへの恨みが根強い。私はもの哀しいアイリッシュミュージックが演奏されるパブに入りし、夜な夜なアイルランド人たちからイギリス人の悪口を聞きながら、民族の物語とは何かを考えて過ごした。

ある夜、私はダブリンの町はずれのパブで友人たちと飲んでゐた。足の踏場もないほど混み合ったホールで友人たちはアイリッシュミュージックの演奏に聞き入っている。音楽に飽きた私は一人でテラスに出てギネスを飲んでゐた。そこに三十歳前後の女性がグラスを片手にやってきた。

「ここに座ってもいいかしら」

彼女は同じテーブルの椅子を指して言った。

「ああ、どうぞ」

彼女はブロンドの長い髪をたなびかせた美しい女性だった。赤い

タートルネックに白のコートを羽織っている。

「あなた、どちらからいらしたの？」

「東京からだよ。DCU (Dublin City University の略) に滞在しているんだ」

「それは素晴らしい国からいらしたのね。ようこそアイルランドへ。滞在を楽しんでいらつしやる？」

「ダブリンは小さい街だね。イギリスやイタリアに比べると街は少し物足りないけれど、アイリッシュはみんなとても親切だ。その意味では来てよかったと思う」

「それは嬉しいわ。ところであなた、ずいぶん旅をしているみたいね。いままで訪れた街でどこが一番よかった？」

「やはりローマかな。街自体が芸術品でできているように思ったよ。オックスフォードもとても美しかった。君はイギリスに行くことはある？」

「何度か行っているわ。舟に乗ればすぐリバプールですもの」

「それはそうだ。でもこんなに近い島国どうしなのにイギリス人とアイリッシュはまるで氣質が違うね」

すると彼女の顔が少し険しくなった。

「もちろんよ。イギリス人と私たちアイリッシュは根本的に違うわ。「根本的に」よ」

「オーケー、アイリッシュとイギリス人はどう違うんだ？」

「イギリス人は俗物よ。鼻持ちならない俗物なの。でも私たちアイルランド人はオープンマインドで誰とでも気さくに話をするわ。人

間の質が根本的に違うのよ」

恨みの歴史に基づく物語は物象化している。そして厄介だ。私は多くのイギリス人たちの親切さをよく知っていたし、ダブリンでは多くのアイルランド人がとても親切にしてくれた。ゆえにアイリッシュがイングリッシュの悪口を言う時、私はある意味で挟まれた立場だった。

「それよりもあなた、中で一緒に踊っていただけじゃない？ それとも場所を変えて飲み直す？」

「どこか店を変えようか」

「ええ、私もそれがいいと思ったの。私のローカル・エリアに雰囲気の良いパブがあるの。よかつたらそこに行きましようよ」

ダブリンで私は当初、スペイン人の大学の先生やロシア人の弁護士、ドイツ人のビジネスウーマンたちとともに過ごした。ある日、ドイツ人のビジネスウーマンが私を煙草に誘ったことがあった。彼女は名をイリスといい、仕事をしながら二度目の大学に通って社会学を学んでいる。この時ちょうど三十歳になったばかりであった。イリスはマルキシズムやドイツ国内のマルクス主義者の動向に興味があって、二人でカフェに入った時など、よくこうした話題を語り合った。

私たちは同じ大学寮に住んでいた。私たちは共用のダイニングキッチンで仲間と食事を作ったのだが、その食後にイリスが私を外に誘ったのだ。寮の外に出ると彼女は私のために煙草を巻いてくれ

た。香りの強いローリング・タバコを吸いながら彼女は私に漏らした。

「私はときどき他のヨーロッパ人から、嫌な言い方をされることがあるの。ああ、君はドイツ人か。じゃあヒトラーの国の人間だなんて。私はそういう言われ方をされるのが本当に嫌なの。そう言われるのは本当につらいものよ。ドイツはいつまでそんなふうに見えるのかしら」

それを聞いて私は戦後、日本のおかれた立場を思いながら彼女に言った。

「イリス、すべての外国人がそう思っているわけじゃないさ。君たちの世代は不運だと思う。たしかにナチスの行状の印象は強烈だよ。でもヒトラーの出現はどうしようもなかったのだと僕は思う」

「どうしてそう思うの？」

「具体的な数字は忘れたけれど、第一次大戦の賠償金は半端な額じゃなかったよな？ ワイマール時代の恐慌下では多くの国民が苦しめぬいたんだろ？ 僕にはあの札束の山の写真は強烈だった。あんな狂った状況が続けば、国民が強いリーダーや救世主を望むのも必然的だったように思う」

「もちろんよ。国民はヒトラーにリーダーの理想像を読み込んでしまったのよ。もちろん現実のヒトラーは彼らが期待したような人物ではなかった」

「いやイリス、もちろんヒトラーの出現は単なるボナパルティズムではないよ。僕は恐慌下の国民がもったやり場のない怒りと、ヒ

トラーの偏執的な反ユダヤ主義がリンクして排他的民族主義とナシヨナリズムが猛然と高揚したのだと思う。結果ナチスのおこなったことは最低だった。ただ、そのことで現代のドイツ人を責めるのはどうだろうかと僕は言いたいんだ。君には身に覚えのないことだ」

「でも実際、歴史的な事情をちゃんと理解している人は少数派よ。大半のヨーロッパ人の頭はいまだにドイツ人＝ヒトラーなのよ」

「いや、僕は歴史の事情を知っているかどうかを問題にしているんじゃないんだよ。昔の出来事を現代の世代に負わせるなど言いたいだけだ。戦勝国の子孫にも、「お前が勝ったわけじゃないだろう」と言っただけでやりたいということだよ」

「そうよねー」

「でもドイツ人＝ヒトラーというイメージがあることを問題にするなら、イリス、例えば君は第二次大戦の日本をどう見ている？」

君だって日本がヒトラーやムツソリーニと共謀して自国の利益のためだけにあの戦争に参加したと思っっているんじゃないのか？」

「……」

「確かにあれは手続きとしては日本が始めた戦争だった。しかし満州における利権がほしかったアメリカが日本をけしかけた戦争でもある。日本にすれば、植民地にされていたアジアの国々を独立させるために戦っていたという別の一面もある。もちろん単なる日本の侵略と見る人もいる。いずれにしろものごとは多面的な意味を持っている。それでもいまだに世界は日本を悪としてステレオタイプに語っている。それと同じことだよ。通説というのはパワーゲームの結果

にすぎない。それが知らぬ間に僕たちにも刷り込まれているんだと僕は思う」

そんなやり取りがあつて二週間ほどのち、イリスはアイルランドを去った。その頃私が知り合い、親友となつたのは韓国の若い女性だった。名をガラムという。私たちは学校が終わると二人で買い物をし、料理を作り、あるいはレストランに入り、休日には郊外の海へ出かけたりもした。国籍の違いは問題にならなかったし、私たちの英語は互いにとても聴きとりやすく、フィーリングも合ったのだ。時に彼女が韓国人であることを忘れ、日本人と話しているつもりになるほどだった。それでも一度だけ彼女は「歴史の話はやめよう」と私に言った。複雑だし難しいと。

アイルランドは人口が五百万人に満たない筋金入りの小国である。だからこそ、ゲール語の保存やアイリッシュスポーツなどの文化を必死に守ろうとしている。外国人へのホスピタリティーの高さは世界有数で、国策として「外国人に親切に」というキャンペーンを張っている。キャンペーン自体は非常に成功していて、アイルランドを訪れた外国人はアイリッシュは本当に親切だと口をそろえて言う。その運動はあたかも島一丸となってアイデンティティーを鼓舞発揚しているかのようだった。そう考えると、「もしや、イギリスへの恨みつらみもアイデンティティーの一部なのではなからうか?」、そう思えてくるほどアイルランド人の多くが口をそろえてイギリス人の悪口を言う。まるで一緒にされるのが嫌で嫌でたまら

ないという口ぶりなのだ。こうした現地の現実を見てみると、アイランド人のコルムとイギリス人のヴェンセント（ポクロベック氏）が仲良くやっているのは、失礼な話だがある意味珍妙に感じたりするほどである。

繰り返すが、民族による恨みの物語は物象化している。物象化とは哲学者廣松渉がマルクスの資本論に着想を得て養い育てた概念である。廣松は「机が足を上にして踊りだす」という資本論の有名な一節を引きあいに出し、商品価値という「魔物」の誕生する現象を国家のような組織の性質にプリントした。今でも一部の知識人は好んでこの言葉を使うが、保守派からは左派を象徴する記号として嫌悪される言葉の一つだろう。

Trinity College Dormitory

いよいよ二度目のオックスフォード、今回の滞在の話を始めよう。ここからは少しくだけた話をしていきたい。

二〇一一年七月二十五日、私は二年ぶりにヒースロー空港に降り立った。空港の到着ゲートの外で迎えのメルセデスにピックアップされ、私は一路オックスフォードへと向った。車が空港から離れていくにつれ、イングランド特有の緑とベージュのなだらかな丘の連なりが、羊雲の流れる青く広大な空の下に広がるのを車窓から眺めたとき、私は本当にイギリスに帰ってきたことを実感した。

しかし実際のところその出だしは面倒の連続だった。車は空港か

ら一時間余りでオックスフォードに入った。滞在する大学寮へと向かっていく。しかし困ったことに運転手は大学寮の場所を知らなかった。住所から判断して「おそらくこのあたりだろう」という場所では彼は一方的に私を車から下ろした。あとは自分で探せということだ。そこはシティー・センタから徒歩で十分ほどのところだったが、その時の私にはまったく見覚えのない場所だった。車は無情にも走り去り、私は一人で寮を探す羽目になった。外国の見知らぬ地で置き去りにされるほど迷惑な話はない。私は大きな荷物を引きずりながらあたりを探した。しかし誰かに道を尋ねようにも、人影が全くない。それでもしばらくウロウロしていると、なんとか寮の入口が見つかった。しかしホッとしたのも束の間、今度は入り口がオートロック式で中に入れない。

よく見ると扉の脇に小さなカードが貼ってある。そこには何か番号が書いてある。電話番号のようだ。他に何の手掛かりないので試しに電話をしてみると女が出た。そこで待っているという。どうも英語の電話はまだにあまり好きになれない。やがて出てきた寮の管理人はカナダ人の若い女性でエマと名乗った。

エマは私を部屋に案内してくれた。そして共用キッチンやバスの使い方、入り口の暗証番号、ランドリーカードの使い方など、滞に必要な内容を一通り説明した。しかし彼女の英語は私には聞き取りづらく、これには最後まで苦労することになる。

彼女は一通り滞在に関する必要事項を早口で説明すると、さっさと管理人室へ帰って行った。私はとりあえず落ち着こうと思い、部

屋の照明のスイッチを入れた。だが困ったことに照明がつかなかった。天井のメインの照明、机の明かり、枕元の照明と部屋にある三つの照明のうち、枕元を除いた二つまでが切れていた。夕闇が迫っている。私はため息をついた。

日本の自宅を発つてからというもの、二十時間を超える長旅を終えたばかりだったが、私は部屋に荷物を置くと切れた照明もそのままにして、すぐにシティー・センタまで歩いた。ウッドストック・ロードをひたすら南下した。

街は何も変わっていないかった。たかだか二年前からそう変わるはずもないのだが、この町には本当にたくさんの思い出が詰まっております、何もかもが懐かしかった。私はバス停からカーファックスタワーの方へ歩き、クライストチャーチの森を一周した。二年前私にはファルックというトルコ人の親友がいた。ここは彼とよく歩いたところだった。彼とはあれ以来一度も会っていない。

その夜は電球の切れた殺風景な部屋で早々に眠りに就いた。

翌朝、私は部屋の照明の修理をエマに頼んだ。幸いエマはすぐに見てくれたらしく、午後になって部屋に戻った時には全て修理されていた。明かりが試みてみるとそう悪い部屋でもない。イギリスにいた間はここが私の仕事場になる。普段はオックスフォード大学の学生が使っているだけあって、学問するには便利なつくりだ。本棚がたっぷりとしてあり、勉強道具を置くには非常に使いやすい。私は研究調査のために持参した膨大なアンケート用紙や、持っ

てきた二十冊程度の本をすべてその棚に並べた。

さらに林望がその著書の中で書いていたのに倣って、マーケットで買ってきたリンゴを二十個ほど本棚に並べてみた。すると色気のない部屋にもなんとなく生活感が出てくる。しばらくすれば部屋はリンゴの芳香で満ちることだろう。

ところでイギリスで最も美味な食材の一つであるリンゴについて、少しでも書いてみたい。イギリスのリンゴは日本のリンゴに比べるとふた回り、いや、三回りほど小さい。様々な品種があつて、マーケットやスーパーでどれも比較的安く売られている。Pink lady や Gala Gold などといった品種がよく出回っているが、イギリスを代表する品種は(林氏も書いてるように)何といってもCox (Cox's orange pippin)である。Coxは秋から冬に出回るリンゴだが、未熟なものは深い緑色に深紅があらわれ、実は固くて非常に酸っぱい。紅玉よりもはるかに酸味があつて、野生種に近い風味と強さを感じさせる。しかし皮にしわが寄るほどよく熟してくると、その果皮は橙色に色づき、周囲には爽やかで甘い香りを放ち、完熟の名に値するリンゴになる。

ちなみに日本のリンゴに比べてイギリスのリンゴが小さいと言つたが、これは別段イギリスだけに限ったことではなく、ヨーロッパのリンゴはどれも同じように小さい。直径は5〜7センチほど。これが正しいリンゴの大きさである。農学的見地から言えば、日本のリンゴは繰り返し施された品種改良によって異常肥大するようになったのだ。それが日本人のよく知っている大きくて甘いリンゴであ

る。もちろんこれはこれで立派な農学的成果であるが、肝心の味は甘いだけでまったく単調だ。食べてみればすぐに違いが分かる。日本のリンゴは野生の風味に欠け、リンゴ本来の良さが消滅している。どうもリンゴにしろ和牛にしろ、日本人は特定の一形質・二形質を極端に強調するように改良する傾向があるようだ。日本人が霜降りの和牛を好むのに対して、フランスでは海辺の牧草地で放牧された牛肉を尊ぶ。これは塩分を含んだ牧草が肉に独特の風味と味を与えるとされているからで、彼らは自然に近い環境でできた健全な赤身を好むのである。日本人は肉食文化の歴史が浅いため、まだ脂肪の味しか分らないのだと指摘する人も少なくない。しかし面白いことに、スペインはアンダルシア出身の友人であるダリオは、日本を訪れたときに神戸牛を食べたそうで、その柔らかさと味を絶賛していた。もちろんものすごく高かったとこぼしていたが。

ところでイギリスのリンゴである。街を歩けば果樹を植えてある家があちこちにある。直径1〜2センチの観賞用と思われるリンゴを植えている家も多い。もちろん中にはOxを植えている家もある。そうした家の前には6〜7センチに育った実が熟して自然に落下している。これも実にイギリスらしい風景だ。彼らはこうしたりリンゴやプラムなどの庭に植えた果樹を、摘んだり拾ったりしてジャムやコンポートを作って楽しむようだ。しかしイギリスのリンゴも昨今は輸入が多く、Oxの栽培量はずいぶん少なくなっていて、マーケットでも昔のように大量には見なくなると後にオックスフォード育ちのレオに聞かされた。

さて、この日私は研究調査に協力してくれる語学学校を二年ぶりに訪れた。調査への協力と引き換えに、私自身が学校に在籍するという条件だったからだ。しかしこれは私にとっても悪い話ではない。英語の授業が受けられるばかりでなく、学校で新たな人脈もできるはずだ。海外を一人で動きまわるのも一・二週間なら良いが、それ以上になると一人であるのが苦痛になる。よく留学はしたものの友人ができず、現地で鬱のようにふさぎ込み、部屋から出てこなくなる生徒がいる。彼らは毎日ベッドの中でひたすら時間が過ぎ去り、帰国の日がやって来るのを待っているのだ。こういう留学生にとって留学はまさしく地獄の日々にほかならず、彼らは二度と来たくないと言をそろえていう。そしてこのようなケースはどちらかというと若い女性に多いようだ。

久々に訪れたOEC (The Oxford English Centre) の校舎はとても懐かしかった。私は学校に着くと、まずは日本にいるときからやり取りをし、今回の調査研究の便宜を図ってくれたミホコ・ポリー女史に挨拶し、その後学校長のDゴグラム・シンプソン氏に、調査協力への謝辞を述べにいった。氏は新入生受け入れの準備で取りこんでいたが、私を一瞥すると、「ああ、アキオさん、よく戻ってきてくれましたね」と言って握手を求めた。

続いては入学の続きだ。あらかじめ送られてきた入学許可証やパスポートなどの必要な書類を持って手続きをする。

ところで留学の友人作りは初日が肝心だ。この一日でその後の友人関係の半分は決まってしまうといっている。私は経験上それを心

得ていたので、グレーディングテストのときに、飲み友達として行動を共にできそうなやつをひそかに探していた。こういう相手は年齢が近く、自分より長期で滞在する者がいい。相手が滞在期間を満了して国へ帰ったあと、残された方は必ず時間をもて余すことになる。これは留学の宿命だ。前回行動を共にしたファルックはトルコ人のビジネスマンで私と同じ年だったが、彼の滞在は半年、私はひと月だった。私たちは何をすることも毎日一緒だったので、私がイギリスからが去ったあと、彼は学校に出てこなくなった。家でDVDばかり見るようになり、たまに出てくるとアキオが帰ってしまったつまらないとか、さみしいといつも漏らしていたと後に何人もの日本人の友人に聞いた。彼自身からも同様のEメールを何度か受け取った。新しい友人はいくらでもできるのだが、常に行動を共にするほどの友人はなかなかできないのだ。そのかわりパートナー（もしくはグループ）は一度決まるとそう簡単に崩れないし、多くの場合は強い絆で結ばれた親友になる。見知らぬ土地で数々の印象的な非日常の経験と共にした相手だからだ。ファルックは今でも私をBrotherと呼ぶ。

ダブリンで私が当初一緒に行動したグループは自分たちをThe Dublinersと称していた。福島の原因事故のとき、私は彼らに海外で報じられている最新情報や状況分析を送ってくれと頼んだ。彼らのリアクションは早かった。二・三日のうちに手元には色々な情報が舞い込んだ。その中には当時日本では報道されていない情報もずいぶん含まれており、それは非常に役立つたしとても助けられた。震

災直後の三月・四月、まだほとんどの人が核物質の飛散状況を知らず、政府の発表する「安全宣言」にただ首をかしげていた頃（このころの雰囲気はまだ津波の衝撃の方が大きかった）、私は海外から来た飛散分布予測図を見て身近な人々には警報を発したが、それは彼らの助けがあつてのことだった。

そうしたパートナーやグループは絆が強い分固定性が強く、そこに新たに入りこむのは簡単なことではない。ところがこのようなグループは初日にできてしまうことが多いのだ。文化の混在する海外生活にはホッとできる相手も必要である。しかし数人でいい。もちろん飲みに行く程度の友人ならばいくらでもできる。でも後からパートナーにまではなかなかならない。今話しているのは毎日の昼食を一緒に食べ、学校帰りに一杯飲みに行き、買い物に付き合ひ、週末は旅行に出かけ、人生について語り、晩飯を一緒に作り、果てはパブ・クローラまで共にするような友人のことである。だから初日というのは肝心なのだ。

私はグレーディングテストのあと、一人のドイツ人に話しかけた。私と年齢が近く、なんとなく私よりも長期で滞在しそうに見えたのだ。一つの賭けである。彼はトムスと名乗った。歳は私の一つ下だったが、流暢な英語を話す冗談が好きな面白い男だった。しかし残念ながら滞在はわずか三週間で、今回の私の賭けは外れた。

Thomas Haller

トムスはハンブルグ近郊の町に住むビジネスマンで、身長は170cmもない小男だ。私よりも一つ年下だが、白髪がかなり混ざり、額の髪は後退している。腹も出ているというほどではないにしろ、痩せ形ではない。一般に西洋人は男女ともにアジア人よりも早熟で、その分老いも早い。しかし、彼も十年前はずいぶんいい男であったに違いなかった。

初めて話しかけたのは学校が主催する入学初日の街案内ツアーのなさかだった。最初トムスは口数が少なかったが、互いの身の上などを話しているうちに徐々にうちとけていった。

夏の間、イギリスの語学学校には世界中から留学生が集まる。アムステルダムからロンドンは空路で一時間ちよつと、バルセロナからでも三時間、パリにいたつてはユーロスターで来られるため飛行機にすら乗る必要がない。もちろん世界中から生徒は来ているものの、アクセスの良さゆえヨーロッパからの留学生が圧倒的に多い。中でも近年はスペイン人が増えている。彼らはスペイン経済の悪化のあおりを受け、海外に職を求めするために英語を学びにきているのである。次いでドイツ人、フランス人、イタリア人の順だ。その多くは夏休みを利用してくるので、学校の生徒数は七月から増え始め、八月の末で急に減少する。九月になればまたいつもの静かな環境に戻る。七・八月の二カ月間は学校にとってかき入れ時なのだ。それはまた一種のお祭り期間で、学校は様々なアクティビティーを

準備する。月曜日はカレッジ見学、火曜日はプール（ピリヤードのことをイギリスではプールという）、水曜日はディスコ、木曜日はバーベキュー、金曜日はスポーツ、これに加えて土曜日は貸切バスで近郊への遠足が有料で実施される。私も交流のために度々参加したが、これらの中には夜遅いアクティビティーも少なくない。ディスコなどは始まるのが夜の十二時だ。もちろん翌日は朝から授業がある。

アクティビティーのアナウンスは当日の授業中におこなわれる。たとえば水曜日、午前の授業中に突然教室のドアがノックされる。そしてアクティビティー担当のスタッフがズカズカと教室に入ってきて、アナウンスをしながらディスコのチケットを配り始める。授業を中座してである。教師は苦い顔でそれを見ながら言う。

「あなたたち、今夜ディスコに行ったらダメよ！ 行けば明日学校を休むか、登校しても死んでいるはずよ！」

その言葉が終らぬうちにスタッフがまくしたてる。

「参加希望者は夜九時にカーファックス・タワーに集合！ まずパブで二・三時間飲んで、それからディスコに繰り出すからな！ ではまた夜に！」

スタッフが出ていくとすぐに教師が釘を刺す。

「今日は宿題がありますからね！ ディスコに行ってる暇なんてないのよ！ 分かっているわね、セバスタン、バラン！」

名指しされた生徒は、「とんでもない」という身振りで答える。

「もちろんディスコなんて行きませんよ、先生！ 僕は英語を

学びに来ているんですから、なあ、 balan」

「もちろんです！ 僕たち心を入れ替えたんです！」

皆その場では教師の言うことを聞く。もちろん聖木曜の朝は、教室にいる生徒の人数は半分が減る。勉強をさせるべき学校で勉強の妨げとなるアクティビティーを準備しているという、これは一種の自己矛盾だが、そうやって生徒をかき集めようとしているのだ。だから八月に入ると授業にはほとんど顔を出さずに、夜遊びばかりしている学生も徐々に増えてくる。

OECでは入学初日だけ特別のアクティビティーが準備されている。オックスフォード名物のパンティングだ。早い話が柳川の舟下りのようなものだが、船はふた回りほど小さい。定員は5人ほどで、普通料金の場合船頭はつかず、仲間が交代で操船する。操船には柳川と同じく竿を使うが、竹竿ではなく3mほどの長さの鉄パイプを使う。この竿はとても重いので、慣れないと思うように舟をコントロールできない。時には川底に刺した竿が深く入りすぎて抜けなくなり、抜こうとしているうちに舟が先に行ってしまうたり、船上でバランスを崩してそのまま運河に落水してしまうということもある。なにしろ運河の水は泥濁りでもとにも汚い。かつて私の乗った舟を操っていたタルハというトルコ人がやはり竿が底に刺さって抜けなくなり、あわてて引きぬこうとしたところ、バランスを崩して落水した。彼は純白のTシャツを着ていたが、上がってきたときにはそれが茶緑色に染まっていた。しかし落水しても竿を手放さな

ったため、模範的な船頭であると仲間の称賛を浴びた。そうは言っても、そのあとタルハはその汚らしいなりで人通りの多いシテイ・センタを歩き、さらにバスに乗って帰る羽目になったわけだ、彼のその時の気分を想像すると気の毒というより他に言いようがなかった。

ところでオックスフォード大学の学生はこの船の上でプロポーズをするというのがひとつの伝統だ。男はワインとグラス、それに指輪をバスケットに詰めて持って行く。舟を漕いで静かで景色のいいところまで来たら、やおらバスケットを開くのである。

トムスと私は街案内ツアーの学校スタッフに先導され、話をしながらハイ・ストリートを歩いた。私たちはパントの乗り場まで歩き、それぞれ男手として別々の舟に乗ったが、夜はパブで飲もうという話になり、タフ・ターバンというパブで七時に待ち合わせた。

私は一度部屋に帰り、机に向かうことにした。この日から平日に授業を受けた後は、毎日三時ぐらいいから夜の七時ぐらいいまで机に向かうことになる。レポートやプレゼンテーションの準備などもあったが、多くの時間をリサーチに関係する勉強時間に費やした。

人類の歴史の中で、哲学の命題は大量に提出されてきた。しかしその中には多くの無理のある命題が混じっている。

目の前にあるコップに対し、

「このコップは私に本当に見えているとはいえない」

このような不健全な命題は、言葉の使い方の間違いにより生じた

哲学的眩暈である。つまり哲学では、出発点となる命題を構成する言葉がとても大事なのであり、ある意味では全てなのである。私はこの点に特に気を使いながら毎日机に向かった。

タフ・ターバンは有名な溜息橋の下にある幅1mほどの細い路地を入った奥にある。この路地は途中で曲がっていて先が見えない。だが角を曲がると突然開けたスペースが現れる。四方を古いコレツジに囲まれた不思議なパブだ。大きなテラス席があつて、夏は屋外で飲むのが気持ちいい。数多くのイングリッシュ・ビアを取りそろえており、その名もタフ・ターバンという店の名を冠した地ビールまで置いてある。

パブではパイントという単位でビールが売られるが、1パイントかハーフ・パイントで買うのが普通だ。カウンターにはタップと呼ばれる水道の蛇口のようなものがビールの銘柄の数だけあつて、注文するとそこからグラスに注いでくれる。昔のイギリスではパブのビールはぬるいのが普通だったというが、今はそんなことはない。どのビールもしっかりと冷えている。ちなみにイギリスのビールは我々日本人がよく飲むピルスナータイプのビールとはまったくものが違う。色は暗琥珀色のように濃いものが多く、果実香がたち、大麦の重みとホップの苦みも強烈だ。泡があまり立たないことも特徴の一つである。

トムスはタフ・ターバンを1パイント買い、私はマグナスというサイダーを買ってテラスのテーブルに座った。

トムスが私に聞いた。

「仕事は何をしているんだ？」

「教師だ。東京の私立高校で教えている」

「英語を教えているのか？」

「いや教えているのは生物学だ」

「生物を英語で教えるのか？」

「いや、授業は全部日本語だよ。ここに来ているのは英語を学ぶためではないんだ。OECの留学生を対象に研究をするために来ている。日本の私立学校を支援する財団法人が研究費と滞在費を出してくれている。その研究調査がこの滞在の第一の目的だ。ただし調査をさせてもらうことと引き換えに、僕自身がOECに在籍すること」

が条件になっている」

「何の調査だい？」

「教育や哲学に関する調査だ。研究の中心はワイトゲンシュタイプだが、この調査では各国の教育観のちがいを検出したいと思っている。それぞれの国の宗教や歴史、文化の違いが教育観に現れていると思うんだ。僕はそれを数字として検出したい」

「なるほど、興味深いな」

簡単に前述したように、前年の十二月に財団法人私学研修福祉会の海外派遣員の審査を受け、研究および滞在費を支給してもらっていた。その内容は「ナショナルリティーによる教育観の変異に関する研究」である。

「ところでトムスはドイツで何をしているんだ？」

「ビジネスだ。会社は車を売っているが、僕は会社の中で教育係をしている。若いビジネスマンの研修をするのが仕事だ。今は夏休みを使ってここにきている。普段は本当に忙しくて自分の時間もなかなか持てないけど、僕はいまオックスフォードで英語を学びながらこうして君とビールを飲んでいるというわけだ。悪くない休暇だよ。乾杯！」

そう言つてトムスはグラスをかけた。私は笑つて言った。

「ドイツ人も勤勉だからな」

「ああ、ものすごく忙しい。休みは週に一日だけだ。日本人とドイツ人は氣質が似ていると言われるが、それにしても僕の場合少し働きすぎだ。」

「ドイツ人は何のために仕事をするんだ？」

「それはどういう意味だ？」

「ヨーロッパ人は徹頭徹尾自分の生活のために仕事をしているという意識の人が多いと思う。スペイン人の割り切りなんかその典型だ。彼らにとって仕事は収入を得る手段だ。イギリス人の場合はプロ意識が強い。残業なんかは絶対にしない代わりに、勤務時間内はいい仕事をしようと努力する。仕事とプライベートが明確にセパレートされている。イタリア人に至っては四十歳まで親の脛をかじっている奴も沢山いる。一方で日本人は社会貢献という意識が比較的強い。仕事を通じて誰かの役に立ったり、社会をよくしたいと願つて仕事をしている部分がある。だから時には損得抜きに使命感で仕事をする。例えば僕は教師をしている。もちろん生活は大事だ。給

料が下がったりすればモチベーションは絶対に下がる。でもそれが保障されていれば、むしろ自分の微々たる力をいかに社会のために生かせるだろうかという意識で仕事に向かう、それが日本人だ。結果、生産性も上がるから経済的でもある。マックス・ウェバーのいうプロテスタンティズムと日本人の公共心は同じ役割を果たしていると思ふ。僕は社会の質は人間の質で決まると思っている。誠実な次代の人材を育てることが僕の第一の役割だと思う。それが日本の内在論理の要求だからだ」

「アキオ、今夜は実に嬉しく思う。日本人の口からそういう考え方が聞けるとは。僕たちドイツ人も全く同じ価値観をもっている。社会のために仕事に取り組むということはドイツでもとても重要な考え方だ。そして他のヨーロッパ人の多くが自分の生活を第一に考えているということについては僕も常々思っていたことだよ。特にラテン系のヨーロッパ人についてはその見方に同意するよ。彼らはエピキュリアンだ。でもむしろそれが当たり前なのかもしれない」

「OECも四時を過ぎたらスタッフルームは空だしな」

「ああ、四時で仕事場が空になるなんて、ドイツではありえないことだよ」

そう言つてトムスは、濃琥珀色の泡の乏しいイングリッシュ・ビアをまた一口飲んだ。

「つけ加えれば、こんなビールの味もドイツではありえない。」
miss bubbles…」

Traditional Afternoon Tea

OECの授業は期待以上に充実していた。二年前に受けた授業よりずっといいように感じた。一般にイギリス人は外国語を学ぶのが不得意だという。少なくとも複数のイギリス人からそのことを聞いた。それゆえ：：かどうかはともかくとして、彼らは自らが学ぶのではなく、外国人に自分たちの言語を「学ばせる」という道を選んだ。それゆえ外国人に英語を教えるスキルはものすごく充実している。当然様々なプログラムがあり、今も教授法は日進月歩で次々に開発されている。

私のクラスは2コマ目の教師に恵まれ、ここでは発音やスピーキングの訓練が徹底して行われた。その中にプレゼンテーションの訓練があり、三十分ほど二人で話をしなければならぬ。テーマは自分で選べるが、カンニングペーパーは持ちこめない。発表の間他の生徒はじっと耳を傾け、質疑応答の時間になると一斉に質問の雨が降る。プレゼンテーションの順番が回ってきた日はスピーチと質疑応答で充実感のある一日になる。これは本当にいい訓練になった。

一度目のプレゼンテーションで私が選んだテーマは大震災と津波、それに福島原発事故についてだった。私が提供できるトピックスのなかで、この話題が最もヨーロッパ人たちの知りたいことであろうと思ったからだ。私は震災の時の状況や学校での生徒対応の話、津波被害の状況、そして原発事故がもたらした現況と今後の見通しについてできるだけ詳しく話した。私が話している間、他の生

徒たちは食い入るようにじっと私を見つめながら話を聞いてくれた。

三十分の持ち時間を少しオーバーして質疑応答に入った。いつもならわれ先に質問が出てくるのだが、この時は誰ひとり声をあげなかった。しばらくの沈黙の後、先生が震える声でいった。

「人生には予想のつかない哀しいできごとが起きることがある。あなたたち日本人はこれからそれを乗り越えなければならぬのね。遠く険しい道かもしれない。でもあなたたちがこの困難を乗り越えることをみんな信じているわ」

この先生がジニーだった。私が研究調査を行う上でずいぶんお世話になることになる先生である。

このクラスには一人の日本人がいた。国立大の医学部の三年生で井上涼子という。涼子は四週間の滞在予定で、このとき残りが二週間だった。国立大の医学部生だけあって、さすがに英文法は良くできる。グレーディングテストのとき、「筆記試験」の出来が良かったのだろう。アッパーインターメデイイトに入れられて四苦八苦していた。アッパーインターメデイイトで学ぶ文法は、せいぜい高校生レベルだ。しかし速読力やボキャブラリーは大学受験レベル、会話にいたってはほとんどの生徒がとても流暢に話す。ネイティブが使うような慣用語はあまり使わないし、文法的なミスはもちろんあるものの、話をする速度はネイティブと全く変わらない。少なくとも日常レベルの意思の疎通という意味ではほとんど不自由がな

い。だから彼女のような基礎学力のある日本人学生がグレーディングテストを受けると、このようにスピーキングスキルで全くついていけないようなクラスに入れられてしまうことがよくある。一般に日本人や韓国人の学生は、リスニングも含めて、会話の瞬発力をつける訓練が全くできていないからだ。

それでも涼子は必死に授業についていこうとしていた。初めての海外留学で、初めて英語で授業を受けた彼女は、毎日の授業に出ているだけで精一杯だった。

あるとき授業のあと涼子が話しかけてきた。一通り互いの身の上がなどを話しているうちに、この滞在が私にとっては二度目のオックスフォードだと知った彼女は、私に言った。

「実は私、あと二週間で帰国なんです。でも毎日授業を受けるだけで精一杯で、街のこともまだよく分からないし、旅行にも行ってないし、パブも行ってないんですよ。やりたいこともやれてないし」「それはもったいないよ。異国の生活をしっかりと体験すること、も留学の大事な要素だよ。積極的に動かないと、二週間なんてあっという間に終わっちゃうよ」

「…ですよね…。あの、帰るまでにやっておいた方がいいことって何かありますか？」

「そうだなあ、オックスフォードで見るところは、自然史博物館やコレッジ、マーケット、それにオックスフォード大学公園なんかかなあ。コレッジはまずはクライストチャーチとマートンコレッジに行ったらどうだろう。パントには一度くらい乗ってもいいと思

うし、デイスコも一見の価値があると思うよ」

「へえ…」

「あとはコッツウォルズには行った方がいい。ちょうど今の時期は最高だよ。とてもきれいだから。あとは駅から電車でストラトフォードあたりへの日帰り旅行をするのもお勧めだし、泊まりでロンドンに出るのもいいんじゃないかな」

「なるほど、いま出てきた中ではパンテイングだけはやりました。帰るまでに他のことをやっておかないと」

「あとは食べ物だよ。フィッシュアンドチップスを美味しい店でぜひ食べた方がいいよ。それからウスターソース入りのトマトジュースを飲んだり、サイダーを制覇することもお勧めだよ」

「待ってください、全部メモします」

そうやって涼子は私が言ったことを全てメモし、「やることリスト」を作っていた。

「この辺で食べられる伝統的な英国料理ならステーキ&キドニーパイとシェパードズ・パイがいいんじゃないかと思う。学校の近くにガーデナーズ・アームスというおいしいお店がある。それからコーニッシュ・パステイは食べた？」

「いえ…何ですか？」

コーニッシュ・パステイとは二十cmほどの半月型のパイで、中にジャガイモとタマネギ、場合によってはリークとニンジンなどの野菜と、ビーフがラムと一緒に煮込まれたフィリングが入っている。胡椒が効いていて旨いものだ。

「へえ、それは食べておかないと。あとアキオさんはパプに行く予定ってありますか？ ご迷惑でなければ連れて行ってほしいんですけど」

「ああ、そんなことか。ほとんど毎日行くよ。できるだけ英語を話す機会を作らないといけないから。そんなことでよければいつでも。それよりアフタヌーン・ティーは行った？」

「まだなんです。実はどうしても行きたい店があって。シティーセントにグランドカフェという老舗のティールームがあるんですけど。一緒に行きませんか？」

「あ、グランドカフェか！」

そこにトムスたちがやってきた。

「何の話をしているんだ？」

「アフタヌーン・ティーに行こうかって話していたんです」

「アフタヌーン・ティーか、それはいいな。おれ達も加わっていいか？」

「どうも、空気の読めない奴に国籍は関係ないらしい。」

「ああ。四人でいこうか……」

グランドカフェはオックスフォードのハイストリート沿いであり、英国で初めてできたコーヒーハウスといわれている。格式の高い店で店構えからして、いかにも敷居が高い雰囲気だが、入ってみるとスタッフは皆気さくで、実に居心地のいいカフェだ。

グランドカフェのアフタヌーン・ティーは一番略式のクリーム・

ティーから、シャンパンがついたフルコースのアフタヌーン・ティーまで、四種類のコースがラインナップされている。私たちはせっかくなのでフルコースを頼んだ。

まずは紅茶選びである。リストにはずらりと紅茶の名前が並んでいて、アールグレイやセイロンなどの一般的な紅茶から珍しものまで二十種類ほどあり、そのなかから一つを選ぶ。コース内容であるが、まずはシャンパンが手元のシャンパンフルートに注がれる。昼下がりのイギリスでシャンパンとは、不思議な気分だ。そのあと例の三層構造のプレートに一通りのものが載って運ばれてくる。一番上にはイチゴのタルトとチョコプレート、それにクロードクリームとイチゴジャムの小鉢。二段目には大きなスコングが一人当たり二つ。片方はチョコプレート・チップ入りだ。もちろん焼き立てのように温かい。三段目にはスモークド・サーモン入りのキューカンバー・サンドイッチがのっている。これだけの量だから全部食べれば腹がふくれて夕食は入らない。昼食よりも多いくらいの量だ。

スコンにはジャムとクロードクリームをたっぷり塗る。それは温かいスコンの上ですぐバターのように溶けはじめる。クロードクリームは純白よりも少し黄色みがかかったクリームで、生クリームより濃厚だがバターより軽い。乳脂肪の塊なので、ジャムと一緒にスコンに塗って食べると爽やかな甘みとこってりとしたコクが味わえる。旨いものだ。

キューカンバーサンドイッチはキューワリのサンドイッチで、これも必ずアフタヌーン・ティーにはつく「決まり」になっている。グラ

ンドカフェのものはスモークド・サーモン入りで少し豪華だ。もちろん美味しい。値段はコースで一人二十ポンド程度だったような気がする。学校の隣の名もないホテルのアフタヌーンティーは六ポンドだ。それに比べれば結構な値段である。だがゆっくりとミルクティーを飲みながらおしゃべりをするには絶好の場所だ。

ティーカップに三分の一ほど冷たいミルクを注ぎ、そこに熱い紅茶を注ぎ入れる。純白のミルクに赤琥珀色の紅茶が広がっていき、白い湯気とともにアールグレイの芳香が立ちのぼる。私たちは話をしながらお菓子をほおばり、紅茶の味を楽しんだ。アフタヌーン・ティーはイギリスのちよつと贅沢な午後の過ごし方なのだ。

紅茶は一人ずつ別々のポットに入れている。それと一緒に熱湯の入ったポットが添えられている。濃くなりすぎた紅茶をちよつどいい濃さに薄めるためだ。もちろん冷めかけたお茶はこれでも温かくもなる。

私たちはプレート上のお菓子をすべて平らげた。もちろん満腹だ。私はその夜一切何も食することができなかった。

しかしあろうことか涼子は、「これ以上お腹に入りません」などと言いつつも、帰り際、「これからホストファミリーと一緒にバーベキューをするんです！」と言って、軽い足取りで帰っていった。

大和撫子の強さも捨てたものではない。

Research

オックスフォードの滞在も二週間目に入った日、私は調査の実施に向けて具体的な打ち合わせをするために、授業のあとスタッフルームを訪れた。今回、OEC側に私の調査のネゴシエーションをしてくれたのは、ここでアコモデーションの手配などを行っているミホ・ポーリー女史だった。ミホ女史はイギリス人と結婚し、長年オックスフォードに住んでいる。彼女との話し合いで、翌日から私が一人一人の教師と交渉し、授業時間の一部をもらってアンケート調査を行わせてもらえるよう頼む方式でいくということになった。

私はさっそく午後の授業を教わっている先生に相談した。彼は四十年代半ばの臨時教師で、ナイジェルといった。夏期だけOECで教えている。私は午後にはFluent Speakingという授業をとっていて、これは会話の流暢さを鍛える授業であるが、担当教師がコロコロ変わり、最終的にナイジェルに落ち着いたのだった。授業内容はいたって手抜きで、毎回ナイジェルが一つテーマを示す。例えば言語の由来について。ヨーロッパ言語はどこに語源があつていつ頃、どんな言語に派生したかなど、古英語の単語なども挙げながら、まずナイジェルがちよつと話をする。そのあと生徒たちはその話題についてパートナーと話し合うという授業構成だ。OECの授業では生徒同士がペアになって練習することがとても重要視される。プログラムによっては3〜4人のグループで行う場合もある。実用英語の訓練では何より使うこと・聴くことが重要視されているのだ。徹頭徹

尾実践的なプログラムをこなしていく。

しかしナイジェルの授業は徹底していた。ナイジェルはほんの三分間ほど、何か一つのテーマについて話したあとは、三十分以上生徒まかせにしておくのだ。勝手にしゃべっているというわけだ。生徒はとりあえずそのテーマに沿って話をするが、テーマによっては五分で話のネタが尽きる。するとそのテーマから多少強引に関連する話題を広げていく。しかしそれも尽きると全く関係のないただのお喋りになる。そうなるのもナイジェルは何も言わずに生徒のお喋りを聞いていた。

当然この授業は生徒たちには実に不評だった。退屈だといってエスケープする生徒が増え、最初に十三・四人いた生徒が、時には三人になったほどだ。トムスは午前の文法の授業をナイジェルに教わっていた。文法の授業というのはただでさえ退屈だ。トムスは僕に言った。

「ナイジェルは実に愉快だ。退屈な能書き、笑顔なし、ジョークなし、模範的なイギリス人だ。実にいい」

だがあとで考えると、結果としてこの午後の授業は相当な会話を生徒に強いることになった。ある意味では最も力をつけられた授業だったかもしれない。

この日、授業の終わりに私はナイジェルを呼び止めた。

「ナイジェル、頼みがある。僕はここで英語を習っているけれど、同時に教育関係のリサーチを取るためにここに滞在しているんだ。そこで頼みなんだけれど、午前のナイジェルの授業で僕のリサーチ

をやらせてもらえないだろうか。十分ほどなんだけれど」

「ふむ。別にいいよ。やりたければどうぞ。僕が決めていいのだからないけれど」

「レセプションはすでに承知している。ナイジェルに問題がなければの話だけど」

「そうか。それならこちらは問題ない」

「明日お願いしていいかな？」

「わかった。一時間目はアッパー・インターメディアイトだ。別館校舎でやってる」

「ありがたい、助かるよ。授業の最初と最後ではどちらの方が都合がいいだろうか？」

「最後のかな。まあ君の好きな方でいい」

「オーケー、では明日、授業の終了のちよっと前に行くよ」

翌日の一時間目の授業時間、私はリサーチの準備をし、授業終了の十分ほど前にナイジェルの教えているクラスへ行った。ノックをして入ると、ナイジェルが私の顔を見て「あっ！」という顔をして言った。

「そうか、リサーチだったな。オーケー、そこに座って一分ほど待っていてくれ」

私は脇の椅子に座って教室を見まわした。そこにトムスの姿を見つけた。偶然にも彼のいるクラスだったのだ。ナイジェルが生徒たちと言った。

「よし、今日の授業はここで終わりだ。今からここにいるアキオが君たちに頼みごとがあるらしい。聞いてくれ」

「おはようございます皆さん。ちよつとだけ時間をください。私は東京から来たヤマダアキオです。日本では教師をしているのですが、ここに滞在しているのは教育に関係するリサーチを取るためです。みなさんにアンケートに答えてもらいたいのですが、協力してもらえないでしょうか？」

ありがたいことに生徒たちはOKといってくれた。私はそれを聞いてリサーチペーパーを配布した。

「ありがとう。私はこのアンケートで国籍の違いによって教育観がどう異なるかを検出したいと思っています。特に倫理や道徳に関する考え方の違いです。回答方法は簡単。文章が箇条書きになっていますね。それぞれの文章を読んで、貴方の国の考え方に特にあてはまると思ったら、チェックボックスにチェックをしてください。ちよつと読んでみて質問はありますか？」

いくつかの単語に関する質問が出たが、概ねリサーチペーパーに大きな問題はなさそうだ。

「では明日同じぐらいの時間に回収に来ます。それまでにやっておいてくれたら助かります。ご協力ありがとうございます」

こうしてOECにおける私のリサーチはついに始まったのだ。

次の時間はジニーの授業だった。授業後に私は彼女にナイジェルクラスでリサーチを取った話をした。するとジニーがいった。

「アキオ、ちよつと待って。あなたが一人一人の教師を回るのはあまりに効率が悪いわ。学校側と交渉して、調査を一括でやれるようオルガナイズすることを頼んでみるから私に任せてちょうだい」

「いやジニー、あなたの手を煩わせるつもりで話したんじゃないよ。何とか自力でやってみる。できればジニーも教えているクラスでも協力してくれないかな？」

「アキオ、いいから待ってて。私の言うことを聞くのよ！」

その日の夜のアクティビティーはバーベキューだった。トムスとコンラッドというドイツ人コンビと同じテーブルを囲みながら話をしていた。コンラッドはトムスと同じクラスで学んでいて、この日私のリサーチに協力してくれていた。

バーベキューといってもみんなでワイワイと肉や野菜を焼いて食べるのではなく、学校スタッフが肉とソーセージを焼き、それをパンにはさんで食べるというだけのものである。そのハンバーガーを食べながらトムスが私に尋ねた。

「アキオ、あのリサーチから何が分かるんだ？」

「教育で、特に倫理で何を重要視するかはその国の考え方や習慣に基づいている。それははっきりさせたいんだ。リサーチは答えにくかったか？」

「いや、問題ないよ。分かりやすい英語だった。」

そこでコンラッドが言った。

「たしかに英文は簡単だったよ。でもそれぞれの文の意味を本当

に理解するために考えるのが難しかった。かなり知的な問いだ」

彼はこのIt's very intelligent of very(に)のほか力を入れて言った。

「でもリサーチとしては問題がない。答えやすい形式だと思う。それにしても国による考え方の違いから何が分かるんだ？」

「倫理とは共同体の物語に基づく考え方だ。それは論理的にどうして重要なかを説明することはできない。良いことや悪いことはその根拠を論理的に説明することは出来ないんだ。ウイトゲンシュタインが論理哲学論考で書いた「語りえぬことには沈黙しなければならぬ」とはそういうことだ。言いかえれば良いとか悪いという価値は論理に依存している概念ではない。では何に依存しているのかというのがこの研究の核心だ」

「つまり教育で重要なことについて、もっと明確にしようとしているんだな？」

「その通りだよ。でもそれだけではなくて、人間が何に従って生きているのか、共同体とどう関わっているのかなどといった社会の仕組みに関する研究でもあるんだ」

コンラッドが顔をしかめて言った。

「このパンはどうしようもなく不味いな。イギリスのパンはまるで紙だ。ドイツ人にとってはひどい国だ」

Go around

その翌日、私はOECのアカデミックチームに呼び出された。ジニーが学校側に手をまわしてくれたのだ。指定された場所へ行く時、そこで待っていたのはヘッド・ティーチャーのジョンだった。ヘッド・ティーチャーという響きが軽いが、日本の学校でいえば教頭のような存在だ。私たちは空いている教室に入り、具体的にやることを話し合った。

「ジョンさん、夏の忙しい時期に調査のことで煩わせて申し訳ありません。ご協力いただけるということを担当にありがたいと思っています」

「いやいや、アキオさん、あなたの研究に協力できてこちらもうれしいよ。校長もあなたの研究の内容に興味を示している。そんなに気にしないでくれ。こちらとして何をしたらいいか話し合おう」

「ありがとうございます。早速具体的な話をしたいんですが、私としては一定の規模のデータを集めたいと思っています。いまOECで行われている授業は数十クラスあると思いますが、その授業時間を少し頂いて調査をさせていただくことはできますか？ それから入学日である毎週月曜日にオリエンテーションが行われますよね。そこで私に三分だけ時間をくれませんか？」

「そうだね、ありていに言えばオリエンテーションの日は時間が押しているのちょっと難しいと思う。それに入学する全ての生徒を対象にすることはできないよ。アンケート用紙を見せてもらった

が、この質問に回答するにはアッパー・インターメディアイト（中級）以上の英語力が必要だ」

「いや、できるだけシンプルな英語で作ったつもりです。インターメディアイト（中級）ぐらいでもなんとかできるんじゃないですか？」

「そうだな、せめてインターメディアイトだ。ただしいずれにしろオリエンテーションでやるのは難しい。残念だが。そのかわりアキオさん、貴方が全クラスを回って授業をちよつと中座して、そこでリサーチをとることは構わない。それから貴方が教室を回る際に学校のスタッフを一人つけることにする。スタッフの方から貴方を紹介し、その上で貴方からリサーチの説明をするようにしよう。その方がスムーズにいくはずだ」

「それは願ってもないことですが、この忙しい時期によろしいのですか？ ありがたい話なのですが、私は学校側をあまり煩わせたくはありません」

「アキオさん、それは気にしなくていい。逆に希望を全て聞けなくして申し訳ない」

「とんでもないですよジョンさん。感謝します」

「準備はできているのか？ いつからスタートできる？」

「こちらはいつでも大丈夫です」

「そうか、では早速だが明日から始めることにしよう。明日の朝九時にレセプションに来てくれ」

私は学校を出ると夕食の材料を買いにシティー・センタへ向かった。私の住む寮には共同のキッチンがあり、同じプロックの住人で共用する。四人がブロックに住んでいるが、共用スペースにはシャワーと台所が一つずつ、トイレと冷蔵庫は二つずつあってそれを上手く使っている。

買い物はスーパーマーケットや市場です。イギリスではテスコ、センスベリー、マークス&スペンサーという三つの代表的なスーパーマーケットがある。この中ではマークス&スペンサーが、やよいい物を買っている。

この日私はエスカルゴ型のパスタにニンニク、パンチエッタ、ラムのステーキ肉、パン、スモークサーモン、パルミジャーノ・レッジャーノ、エポワース、赤ワイン、それにフッレッシュユバジルひと鉢（ハーブは鉢植えで売っているのだ）を買って帰宅した。

三時間ほど集中して机に向かったあと、夕食を作り始める。夕食はパスタだ。イタリヤ人に直接教わったやり方で作る。まずは大量の湯を沸かし、そこにしっかりと味がつくぐらいの塩を投入する。かなりの量の塩を入れる。これで麺に味をつけるとともに沸点を上げ、パスタを芯一本を残してしっかりと茹で上げるのだ。この場合エスカルゴタイプのパスタを使ったが、フレッシュトマトやオイル系のソースの場合フェデリーニなどの細めの乾麺を使うと味のなじみがいい。さて、パスタを茹でる一方でフライパンに刻んだニンニクと50cc程度のオリーブオイルを注いで弱火にかける。ゆつくりとニンニクの水分が飛び、香りのいい味のあるオイルになるまでじ

つくりと待つ。イタリア人はニンニクでオイルに香りだけでなく旨みをつける。これに刻んだパンチエッタを入れて豚の脂を溶かし出し、刻んだフレッシュトマトを加えて煮詰め、岩塩・胡椒で味を調べておく。パスタは茹で時間を計ってはいけない。表示時間は目安にはなるが、茹で上げのタイミングは目と歯ごたえで決める。少し柔らかくなり始めたら、食べて硬さをチェックする。パスタは最初硬いと思っても、ある時間帯に急激に柔らかくなっていくので、芯が減ってきたと思ったら十秒ごとにチェックしなければならぬ。このまま食べたらまだちよつと硬いかな、というところで引き上げる。ソースと合わせたり盛りつけている間にもパスタは柔らかくなっていく。引き上げる段階でアルデンテになっているのではなく、食べる瞬間にアルデンテになるように計算するのだ。パスタが茹であがったらすぐにソースと合わせ、若干の茹で汁で濃度を調整する。最後に刻んだフレッシュバジルと砕いたパルミジャーノをたっぷりと散せば出来上がりだ。こうしたレセピを五つも覚えれば、あとは無限にパスタの種類は増えていく。パスタの茹で方、オリーブオイルとニンニク、アンチョビ、オリーブの実、パンチエッタ、唐辛子、チーズ、トマト、フレッシュクリームなどの基本的な食材の使い方さえ押さえれば習得は早い。イタリア人たちのやり方に習うと、食材のちよつとした扱い方の違いで味が完全に変わってしまうことがよく分かる。こうした食材の扱いにはすべて小さなコツがある。

この日はラム肉のステーキを同時並行で焼いた。ローズマリーや

オレガノなどの香草と胡椒をし、グリルする直前に砕いた岩塩で味をつける。ラムは寄生虫の心配がないので表面はクリスピーにしつかりと焼き目をつけ、中はミディアムレアの手前になるようにする。イギリスのラムは獣臭さがほとんどなくとても柔らかい。しかもものすごく安い。百グラムが百円ほどだ。日本では百グラムが三百円ほどなので三分の一の値段である。ポンドは安くなったとはいえ、それでもイギリスは日本よりもやや物価が高い。だから日本では高価だがイギリスでは安いものに目をつけるのが上手に生活するコツだ。エポワースというウォッシュタイプのチーズがある。熟成すると中がクリーム状にとろけて本当においしい。日本では一個三千円から三千五百円ほどするが、ここでは五百円で買うことができる。さすがに日本では頻繁には買えないが、イギリスにいる間は毎朝パンにたっぷり塗って食べるという信じられない贅沢ができた。

翌朝一番に私はジョンと約束したとおりレセプションに向かった。朝の職員室はバタバタしている。これは日本もイギリスも変わらない。ただ違うのはイギリスの職員室には朝から笑顔があることだろうか。ここにいるすべての人は相手の目を見て「Good morning」と大きな声でいい、必ず微笑みかける。これはもちろん文化の違いというのだが、これが当たり前になって日本に帰るとやはり複雑な心境になる。

ジョンは始業前の雑務をこなしていたが、私が声をかけるとこち

らにやってきました。

「おはようアキオ。準備はいいか？」

「おはようございますジョンさん。もちろん大丈夫です」

「では始めよう。君につき添うスタッフだが、この校舎の教室をまわるときは僕がつき添うよ。別校舎はサリーに頼んだ」

「ジョンさん、あなたはヘッドティーチャーじゃないですか。今の時期はお忙しいはずですよ。それでしたら一人で回れますよ」

「いや、授業時間の間はあいている。この時期僕は授業をもつてないから問題ないよ。それより早速回ろう」

私たちは階段を上り、四階の教室から回ることにした。ジョンは私を一つの扉の前まで連れていった。

「アキオ、まず手始めはこの部屋だ。この教室ではティーチャーズトレーニングが行われている。英語の教授法を学ぶ授業で、おもにポーランド人やフランス人の生徒が勉強している。もちろんみんな教師だ」

「なるほど、それは好都合です」

「うん、おそらく君の研究に興味を持ってくれるだろう。では行く」

ジョンはノックをすると、中に入ってしまった。そこにいた教師と生徒たちが一斉に私たちを見る。「何事か？」という雰囲気だ。ジョンが言った。

「授業中に申しわけない。みなさんにこの人を紹介したい。日本から来たアキオさんだ。彼は皆さんと同じ教育者で、研究のために〇

ECに滞在している。彼はここでリサーチを取っている。詳しくは本人から語ってもらおう。ではアキオさん」

「おはようございますみなさん。東京からきたヤマダアキオといえます。私は教育に関するリサーチを取っています。ごく簡単なリサーチです。みなさんにご協力いただきたいのですがよろしいでしょうか？」

生徒たちはうなずいたり私に目配せしたりしてオーケーの意思表示をした。

「ありがとうございます。まずはリサーチペーパーを配りますので見てください。質問はここにある通りです。国籍によって教育観がどう違うのかを調べる研究です。ざっと見て何か質問はありますか？」

さすがにみな英語の教師だけあって英文に関する質問は出ない。一人の女性が手を挙げた。

「おもしろいわ。私たちも結果を見ることができるといいですね」
「もちろんですよ。結果を知りたければ十一月以降に私にメールをください。結果を送りますよ」

そういつて私は後ろの小さなホワイトボードに私のメールアドレスを書いた。みなリサーチペーパーを読みながら隣どうしで何事か話を始めた。

「ありがとうございます、明日の同じ時間に取りに伺います。それまでにどうかよろしく願います」

私とジョンは教室をあとにした。こんな形でのリサーチがこの日から始まったのだ。

Hedgehogs

トムスとともによく飲みに行ったのがレオというイギリス人だ。

彼はオックスフォード生まれオックスフォード育ちという生粋のイングランド人で、OECの夏季アルバイトとしてアクティビティを担当している。大学でスポーツ科学を学び、自身もウエイトリフティングをしているため、往年のシュワルツェネッカーのような体型をしている二十八歳だ。どういうわけか彼は私とトムスをプライベートで誘い、よく飲みに行った。こちらとしてもオックスフォードが地元だという人物と仲良くなれば実に都合がいい。私たちは様々な情報を彼から得ただけでなく、観光客のまづ知りえない世界に連れて行ってもらった。何より彼は親切だった。

ある日、私たちはタフターバンで飲んでいたら、トムスにコンラッド、涼子、レオ、そして私である。

とにかくレオは何でも親切に教えることが好きだった。

「レオ、さっぱりした、あまり強くないビールが飲みたい。どの銘柄を頼めばいいだろう」

「それならサマー・ブリッジだ。濃すぎず、苦すぎず飲みやすい」
「少し変わったものはないだろうか？」

「それならシャンディーガフを作ってみたらどうか。そのビールを半分まで飲んだらカウンターでジンジャー・ピアを頼んでくるんだ。1対1の割合で作るとちょうどいい。」

これ以上の優良ガイドはなかなか望めない。

「しかしレオはよく飲むな。一般的に日本人はヨーロッパ人と比べるとアルコールに弱いといわれているけれど、ちなみにレオほどのくらい飲めるんだ？」

「普段はそんなに飲まないよ。いつだったか、一度バブにあるすべのビールを制覇してひどい目にあつたことがある。起きたら道で寝ていたんだが、裸だった。靴も履かずに財布もない。二時間かけて裸で家まで歩いて帰つたことがある。」

「いったい何ポイント飲んだんだ？」

「三十ポイントぐらいかな、正確には憶えていない」

「それは像でも酔っ払う量だ。いくらヨーロッパ人でもそれだけ飲めば正気でいられるわけではない」

「日本人とヨーロッパ人では酒に対する歴史が違う。日本の水はきれいだろ？ しかしヨーロッパの水はふつう濁っていてバクテリアがたくさんいる。衛生的な問題でそのまま飲むことはできない。だから我々は酒を醸造して水代わりに日常的に飲んでいたら。だからヨーロッパ人は遺伝的にアルコールに強くなつていったんだよ」

「なるほど、それは面白い」

「でもすべてのヨーロッパ人が酒に強いわけじゃない。あんなふうだね」

レオが目配せした方を見ると、トムスが相当に酔っているのが見えた。そこへちょうど私が注文していた料理が運ばれてきた。ソーセージ&マッシュだ。これはイギリスの伝統料理ともいえるし、典型的なバブのつまみともいえる。マッシュポテトの上にグリルした

ソーセージが二本のついでにグレービーソースがかけられているシンプルな料理だ。いかにも手軽な食べものだが、私はパブに行くとき好んでこれを食べる。

ついでにいうと、イギリスのソーセージは日本でよく食べるドイツ式のソーセージと少々異なる。形は似たようなものだが、燻煙していないため、燻製香がなく、 Grillする前の生のそれはピンクがかった肌色をしている。大きさはフランクフルトのように太いものが多く、中身は水分をたくさん含んでいる。豚のひき肉にハーブやパンを混ぜて腸詰にしたものだ。このイギリスのソーセージには独特の癖があり、塩辛いことがほとんどだ。日本人の多くは不味いというが、私は何度も食べているうちに結構好きになった。

「レオ、このソーセージの味はなかなかいい。少し味を見てみないか？」

レオは私の皿からソーセージを一切れつまむと、それをムシャムシャと食べて言った。

「うむ、このソーセージはなかなかミートイードだ。普通はもつとパンを混ぜてあるものだがこれは肉が多い上物だ」

彼の言葉から肉の味がしっかりしていることを言い表すのに meaty という表現を使うことを私は初めて知った。

レオは言った。

「アキオ、こんど俺のパブで年に一回のビア・フェスティバルがある。来週の火曜日だ。地ビールが十種類、地サイダーが八種類出る。ここには本当にローカルな人間しか来ない。地元祭りの祭りになんだ。是

非来い」

「それは面白い。絶対に見てみたい」

「本物のイギリス人の生活の一端が見られるはずだ。ビジネスでやっているホームステイよりよほどリアルだよ」

その帰り道、トムスは随分と酔っていたが、シティーセントで腹が減ったと一人で騒いでいた。イギリスの街には夜になると屋台の車が出てくる。その多くがケバブやバーガー類、パニーニ、フィッシュ&チップスなど手軽な食べ物を売る店だ。私たちはケバブ&ライスを買って歩きながら食べた。日本でもおなじみだが、肉の塊を回転させながらローストし、焼けた外側から表面を削って食べる。この屋台では硬く炊いたピラフのようなものにこれをどっさりとのせ、上から好みのソースをかける。スパイシーなソースを頼んだら(店の者はアフリカンソースといていたが)赤くてドロドロした、本当にももの凄くスパイシーなソースがかかってきた。

こうした屋台の多くは移民がやっている。トルコ人やギリシャ人などが多い。イギリスは労働力の確保のため、一時期もの凄く数の移民を受け入れた。この政策は結局イギリス人自身の雇用を食うことになり、職に就けなくなったりイギリス人たちから不満が噴出した。そのためイギリス政府は百八十度政策を転換した。今は全くと言ってよいほど移民を受け入れていない。入国審査はとても厳しく、私も色々質問された。

トムスは今度はトイレに行きたいと言い出した。全く騒がしい男

である。しかし店もレストランもとっくに閉まっているし、近くに公衆トイレなどあるわけがない。私は聞いた。

「Hey, is that a big one or small one?」

「Oh dear, if it was a big one, it should be an absolutely serious problem!」

時間は深夜の一時ごろだ。私たちは馬鹿話をしながらウッドストックロードを歩いた。勤勉でまじめなドイツ人も心を許すと陽気で冗談好きで国民になる。トムスは西洋人の女性の良し悪しをあれこれ語りだし、すれ違う女性を見て、「あれはいい」「あれはダメ」「あれはありえない」「今のは悪くない」「あれは完全に問題外」など、大真面目な顔でいちいち批評し始めた。

「アキオ、いま俺はヨーロッパ女性の良し悪しの「一般的な」見分け方をお前に教えている。どういうタイプがヨーロッパ美人なのか正確に理解するんだ」

「えっ?…ああ…」

と私が煮え切らない返事をする、トムスは

「YES or NO!」

と叫んだ。

どこの国も一般的な男の話題などというものは似たようなものだ。むしろこうした馬鹿話は万国の共通語である。男にしか通じないが。

このような調子で馬鹿な話をしながらウッドストックロードを歩いた。北に向かって歩いていくにつれ、人影はまばらになり、ウツ

ドストックロードは次第に静かになっていった。

私たちは寮へ向かって歩き続けた。やがてシティーセントラを出る。人通りのない深夜のオックスフォード。通る車もほとんどなく、レンガ造りの住宅地は深い闇に沈みこんでいる。洋館のシルエットの上に雲の切れ間からのぞく満月が私たちを照らしている。それを見て私は言った。

「まるでドラキュラが出そうだな」

「ドラキュラ? おれはそうは思わんね。これはシャーロックホームズのイメージだ」

そのとき私は我々の歩く歩道のはるか先に何か動く影を見た。

「トムス、何かいる」

「何だ? ドラキュラか?」

「いや、何か小さな動物のようだ」

私たちはその影に近づいていった。そこにいたのは小さくて丸くて鼻のとがった生き物で、ゴソゴソ動いている。私たちが目の前に立つと、コロンとうずくまった。野生のハリネズミだ。

「ああ、ハリネズミか。ヨーロッパではありふれた動物だ」

「僕は初めて見た。しかし本当にかわいい動物だな!」

「そうだな、かわいい動物だ。しかし触ったらあとでよく手を洗わなくてはダメだ。ハリネズミは草の茂みに入ったり落ち葉や土を掘り返して虫を食べたりしている。だから針の根元には蚤が沢山ついているんだ。虫の他には落ちたフルーツを食べる。この通りには庭木のプラムやリンゴなどが沢山落ちていて。ハリネズミは夜行性だ」

からこの道で好きな果物を食べ歩いているんだよ」

これが私にとって、この動物との最初の感動的な対面だった。しかしハリネズミを見たときの私ののはしゃぎようがトムスにはよほどおかしかったらしい。トムスがこの時の私の真似を、沢山の友人の前で後々までやりつづけたのにはまったく閉口した。

Beer Festival

私のクラスにアイリという日本人女性に戻ってきた。私がオックフォードに着いた時、彼女は学校を休んでヨーロッパを旅行中だった。司法書士会の理事の秘書をしている女性で、三十歳そこそだが美人だし性格もいい。彼女は半年ほど留学しているが、本人は英語が上達しないと悩んでいた。努力家で一生懸命話そうとする。彼女は事あるごとに私に相談してきたが、私に聞かれても答えようもない。そんなある日、彼女が私に言った。

「どうすれば英語が話せるのか考えていたら、結局私は物を知らないんだということに気がついたんです」

これはとても本質的な発見だと思う。私たちはネイティブでもなければ英語の教師でもない。したがって私たちにとっては英語を上手く話すことよりも、話す内容の方がよほど重要である。文法の間違えはもちろんに越したことはないが、些細な間違いがあったからといって実生活ではどうということもない。日本人は試験のための英語ばかり勉強してきているので、間違いを恐れる癖がつきす

ぎているのだ。

「こんど新発売のゲームさあ、アメリカにはないタイプだからちよー驚いたよ。あれマジ凄いやねー」

と、どうでもいいことを流暢に話す外国人より、

「日本人とイギリス人の大きな違いは、他人との関わり方デスネ」

と、言葉はたどたどしいが本質的なことを見通す外国人を私は尊敬する。

話したいことがあれば、たとえひどい英語でも何とか話すことができるものだとは思っている。それを積極的に繰り返していけば、瞬発力・反射能力はついてくる。特に学生を見てみると、何を言えばいいか分からなくなるといふ人の多くは、話すべきことが見つかからないのだ。

もちろん言いたいことはあるのだけれど、どう言いかえればいいのか分からないという場合もあるだろう。しかしこれはこれで会話へのスタンスとしてはちよつと間違っていると云わざるを得ないように思う。言いたい日本語の文をいちいち英語に変換している限りは（よつほど根暗な努力を長年繰り返さない限り）まともにしゃべれるようにはならないだろう。そんな不毛な努力をするよりも、言いたいことを英語で考えて英語で話すようにするのが早道である。

とにかく英語というものは「実用道具」以外の何物でもない。それは頼れる道具であり、使えなければどうしようもない。異国で生活する私たちにとって、まさにそれが生存に関わる命綱なのだ。美しくとか、正しくなどと言ってはられないし、言う必要もない。そ

のかわり反射能力だけは鍛えなくてはならない。専門家は別の意見を持つていようが、それはともかく、私たちにとつての英語とはそういうものだ。とにかくスペイン人たちがスペイン語でペラペラ喋っているのを聞いたあとで、英語が聞こえると本当にホッとすることものだ。

ビア・フェスティバルの日が来た。当初私とトムスでいく予定だったが、当日になって涼子がついてきた。午後七時、レオを含めた四人は彼の家のそばにあるパブに向かった。シティー・センタからバスで二十分ほど。観光客には無縁のただの住宅街。この奥にレオのマイ・パブはあった。

夕暮れ時、パブの奥の庭に屋台が設置され、そこで地ビールと地サイダーが買える。いろいろ楽しめるようにハーフパイントずつ買うのが上手い飲み方だ。

ちなみにサイダーとはリンゴの発泡酒のことである。アップルサイダーとかシードルと言った方が通りがいいかもしれない。例のCoxも優れたサイダーになるリンゴである。

サイダー作りは単純だ。収穫したリンゴを絞り、100%のリンゴジュースをとつたらそれを樽で醸造する。もちろん酵母菌によるアルコール発酵だ。サイダーのアルコール度数は5%ほどのものから10%近いものまであり、味も甘いものから酸味の強いものまで様々である。日本でも飲めるストロングボーやイギリスのパブには必ずおいてあるアスポールはかなり酸味が強い。私が好きなマグナーズや

バルマースはアイリッシュ・サイダーなのだが少し甘めだ。実はマグナーズもバルマースも同じ会社がつ作つていてしかも中身も同じなのだが、イギリスで売られているのがマグナーズ、アイルランドで売られているのがバルマースということに（一応）なっている。コルムは「飲み比べると味がちょっとだけ違う」と言っていたが、私も同意見だ。バルマースの方が若干甘みが強い。

このマグナーズにはリンゴだけでなく洋ナシで作つたマグナーズ・ペアや、ベリー類がブレンドされたマグナーズ・ベリーもある。私はイギリスやアイルランドのビールは比較的苦手なので、どこにいてもサイダーを飲む。特にマグナーズ・ペアを頼むことが多い。私の場合、少なくともパブで一晩に飲む3〜4パイントのうち、半分以上はサイダーを飲む。

アイルランドはギネスが有名だが、似たような比較的濃く苦いビールが沢山ある。当地ではギネスやキルケニーのような黒、もしくは暗琥珀色の「スタウト」と呼ばれるビールがパブでも比較的的花形だ。ちなみにアイルランドで飲むギネスは美味しいことは知られているが、不思議なことにアイルランドの中でもパブによって同じビールでも味が少しずつ異なり、特にギネスは美味しいパブと不味いパブがはっきりしている。ダブリンにあるギネス・ブリュアリー（ギネス博物館）は、かつて稼働していた工場跡を改装して建てられたので、当時のプラントや引き込み線の線路などがそのまま残つていて興味深い。一通り醸造過程を見学したあと、最上階の展望レストランに出るとダブリンの町が一望できる。チケットにはギネ

ス一杯分の料金が含まれているので、ここで一パイントのギネスを片手に、ダブリンの広い空とレンガ色の街を眺めながら飲むことになる。一杯やるには最高のロケーションである。

私はここをダリオというスペイン人の大学職員と一緒に訪れた。ダリオは恋人が妊娠していたのだが、ここを見学中に国際電話で双子だという知らせを受けた。360度広がる展望を背に、二人で乾杯したことを覚えている。あの広く青い空と眼下のダブリンの町と海は、彼にとつて忘れえぬ記憶として刻まれたことだろう。

ところで話はレオのパブだ。私たちはハーフパイントずつのビールやサイダーを次々に飲んでいった。まわりは地元の英国人ばかりだ。彼らは特につまみも食わず、少しずつ飲みながらおしゃべりをしている。宵が更けるにつれ、暗闇が迫り、その闇の中から時々笑い声が起きる。明かりもない裏庭の暗闇で、人々がそこに数人ずつかたまつて飲み続ける。

トムスがどこで手に入れたのかチップス（揚げ芋）を手に入れて戻ってきた。

「アキオ、一緒に食べるか？」

「いや、ポテトはたくさんだ。イギリスに来てからずいぶんポテトを食べているけれど、僕はそもそもポテトが好きじゃない」

「本当か、ポテトが嫌いなんて、一体普段は何を食べているんだ？」

イギリスでもドイツでも毎日ポテトを食べているぞ。ヨーロッパ人はポテトが大好きなんだ。ドイツにもポテト畑が広がっている」

私は広いポテト畑の話聞いて、アイルランドのジャガイモの伝染病による大飢饉を思いだした。通常ジャガイモは花粉（中の精細胞）と雌しべの卵細胞が受精して種を作ることはしない。子イモが次世代の植物になる。子イモは親の体の一部でもあるので、当然親と同じ遺伝子を持つことになるため、性質も同じということになる。栽培では種イモを植えるが、これを数世代繰り返していくと、畑一面、あるいはその地方一面のジャガイモが同じ遺伝子ということも起きる。性質が同じだということは、特定の病気が流行りやすいということだ。アイルランドの大飢饉はこうした理由で起きた。親の体の一部が子になる生殖方式を無性生殖というが、こうした遺伝的均一性がこの生殖方式の弱点なのである。

一方、花粉と卵が受精する場合は、父親と母親の遺伝子が半分ずつ合わさるので、かなり多様な遺伝子の組み合わせができる。この有性生殖では病気への耐性を持った遺伝形質の個体が必ず生まれてくる。

こうした内容をトムスに話そうと思ったのだが、ここで私は「性質」を表す単語“nature”が出てこなかった。natureの代わりに私ごとつさに使った言葉が“temperament”「気質・性格」だったことがワケの分からない話の始まりになってしまった。もちろんこれは完全な間違いである。私はnatureという単語を見つけれないまま話し始めた。

「大量のジャガイモだけを栽培するのはいいアイデアとは思えない。もしも特定の病気が流行れば全てのジャガイモが枯死する可

能性があるからだ。アイルランドの飢饉はこうして起きた。ジャガイモは種子繁殖をしない。子イモが次世代になるからだ。しかし子イモは親の体の一部でもある。だから彼ら親子のDNAは同じなんだ。それゆえに親イモの「気質」と子イモの「気質」は同じになる。だから特定の病気の流行によって全滅する可能性がある。こういう理由で君らの国もジャガイモだけでなく、穀物を多めに栽培する方がいいと思う」

トムスも相当酔っている。彼は完全に目が据わった顔で言った。

“Sorry? The temperament of potato?”

そこにタイミング悪く、レオがやってきた。これまた千鳥足で完全に出来上がっている。

“Hey gents, what are you talking about?”

トムスが聞いてくれとはかりに答える。トムスはもはや半笑いで吹き出しながら言った。

“We are talking about “the temperament of potato”! Akio said the temperament of parent potato and the temperament of child potato is the same! What do you think?”

それを聞いて、レオはフラフラしながら真顔で言った。

“I think temperament of potato is very similar...”

“What? Stop the crazy talking!”

とトムスが叫んだ。レオの呂律は回っていないが、酔っているとはいえボテトの本場のイギリス人がそう言うのだから多分そうなのであろう。

パブの室内ではバンドが伝統的なイングリッシュ・ミュージックを奏でている。スウェードのジャケットを着た一人の酔った老人がバンドのステージの前で踊り始め、みんな手拍子をしながらかつて楽しそうに見ている。

庭では相変わらずビールが飛ぶように売れている。レオがプールで遊ぶと言い始め、私は彼と一对一の勝負をした。酒、音楽、プール、そしていつまでも続く会話……。イギリス人はお堅い？確かに昼間のパブリックな場ではそうだ。だが、プライベートのイギリス人は実に陽気である。観光客の入っていないローカルなイギリス人たちの祭りに入りこんで、彼らがどんな人々で、人生をどうやって楽しんでいるのか、また少しわかった貴重な経験だった。

このあとトムスがハリズムと出会ったときの私の物真似をしはじめ、彼がひとしきり演じるのをみんなが大笑いした。私はへべれけの彼を寮まで連行せねばならず、奴の首根っこをつかんでこの日のビアフェスティバルをあとにした。

この週末に涼子は帰国していった。帰る前日の放課後、私は彼女に学校の庭に呼び出された。彼女は私に手紙と小さな包みを渡した。袋を開けると、オックスフォード大学の紋章が刻まれた、削り出しの金属の葉が光っていた。

Muslim Usama Ali

翌週も私は授業時間にリサーチを取っていた。OECでは授業に

八割以上の出席をしないと修了時の成績表が発行してもらえない。しかし留学というのは毎日が緊張の連続だ。もちろん次第に慣れてくるのだが、それでも日本にいる時と比べたら知らないうちにストレスをためている。だからひどく疲労する。どうしても朝起きられない時が出てくる。ほとんどの生徒は八割の出席を気にしているし、授業料を払っているのだからとできるだけ出席するが、疲労でどうにもならないときだけ退屈な文法の授業を休む。一方夜遊び組は開き直っている。成績表が出ないことを覚悟するとそのサボり方も徹底してくる。一週間に一日ぐらいしか顔を見なくなる。毎晩パーティーをしているという者も少なくない。

私は授業を休んでリサーチを取っていたが、OECは特別に配慮してくれ、この間も出席扱いしてくれた。私の時間割は一時間目が文法、二時間目が会話技法、三時間目がFluent speakingである。これは日本語にすれば「流暢な会話」という授業名だが、例のナイジェルの手抜き授業だ。この三つの授業のうち、私は極力文法の間をリサーチに充てることにした。

この日の授業後、トムスが私に言った。

「アキオ、面白い人物を紹介するよ。ウサマというエジプト人のビジネスマンだ。エジプトでは相当なエリートだ。アレキサンドリア出身だがUniversity of Genevaを出てからスイスに渡り、University of Neuchatelで学んでいる。今はイスラム系のオイルカンパニーの商社マンだ。会えばお互いにくっくと興味をもつと思う」「イスラム系の商社マンか。面白そうだ。どこで会うんだ？」

「今夜、俺の行きつけのパブで対面することしよう」

トムスは「行きつけのパブ」にMy Pubという表現を使ったが、これは彼に限ったことではない。イギリス人は地元の足しげく通うパブをMy Pubとよぶ。トムスのMy PubはTough Turbanだったし、私のMy PubはHead Of The Riverであった。

「それはいいけれど、彼はムスリムじゃないのか？ 酒は飲めるのか？」

「彼は大丈夫だ。ムスリムだがサウジアラビア人のようなファナティックなムスリムではない」

ちなみにこの時期のムスリムはラマダンの真つ最中である。イスラム教徒たちは陽のあるうちは食べ物を口にしてはいけないことになっている。特にこの時期のイギリスやアイルランドは中東の国々よりも陽の出ている時間がずっと長いので、ラマダンをするには厳しい場所なのだ。だからこの時期のサウジアラビアの留学生は目に見えて元気がなくなる。朝の日の出前に最後の食事をする、昼の間は断食をし、日の沈む夜の九時・十時頃にブレイクファストを食べる。夜に朝食を食べるといふ表現も変な話だが、ファストとは断食、断食を中断するから正しくブレイクファストなのだ。

ちなみに私はダブリンにいたときに、彼らのブレイクファストに招かれたことがある。私を招いてくれたのはシャディーというサウジアラビア人だった。彼らは敬虔なムスリムだ。ラマダンのもとより酒や食べ物、男女間などの諸戒律を誠実に守っている。時間が来

るとマットを敷いて、メッカに向かって祈りを捧げる。

彼はサウジアラビアのイスラム教徒専用アパートに住んでいた。警備がとても厳重なアパートだ。アパートの敷地に入るのにオートロック式のゲートがあり、さらに各棟の入り口にも厳重なロックがかかっている。

シャディーが招いてくれたときのブレイクファストのメニューは次の通りだった。まずは干した砂糖ヤシの実。いわゆるデザートというドライフルーツだが、大皿に盛られた大量のデザートを断食明けの最初の一品として食べる。糖分がとても多く、当然かなり甘い。しかしこれが断食明けの食事のスタートとして体に良いのだという。断食明けだけあって、みんな次々にデザートに手を伸ばしては、種を吐き出している。山のようなデザートがみるみる減っていき、あつという間に種だけになる。

次に出てきたのはスープだ。食べたことのないような不思議な味である。塩味とわずかな酸味があり、少しとろみがついている。中には野菜と豆、それにパスタが入っていた。この酸味が不思議な酸味で、柑橘とも酢とも違うような味だった。

このスープで食べたとき、ちょうど祈りの時間が来た。シャディーは言った。

「アキオ、申し訳ないが祈りの時間だ。いったん食事を中断するよ」

そういうと彼らは床のうえから食器を手早く移動させ、(彼らはテーブルの上ではなく、床に食器や食べ物をおいてあぐらをかき、

車座になって食事をする)、周囲のソファーなどをどかして、あつという間に祈りができるだけのスペースを作った。

「シャディー、僕はイスラム教徒じゃない。邪魔をしてはいけないから外に出ていようか？」

「いやアキオ、そこに座って見ていてくれ。僕たちの文化を理解してほしいんだ」

祈りはほんの五分ほどで終わる。リーダーが前方に立ち、コーラの一節と思われる文句を唱え、後ろに従って並ぶ者たちがそれを復唱しているようだ。もちろん彼らは真剣そのものである。ときどきメッカに向かって土下座のような形で頭を下げる。そして下を向いて小声で、しかし早口でボソボソボソと祈りを捧げる。彼らは一日に何度もこれを繰り返す。

祈りが終わるとまた食事が再開される。次のメニューはピラフの上にフライドチキンが載ったカブサという料理だ。一辺が七十cmほどもある銀の大皿に黄色いピラフが山盛りになっていて、この大皿にみんなで手を伸ばし、手で直接食べる。一人ずつの皿は使わない。ピラフが黄色いのはサフランかターメリックで色づけされているからだ。これをスプーンもフォークも使わずに手で食べる。彼らは私のためにフォークを用意してくれたが、これも経験だということであるが、まずはフライドチキンを指で少しちぎりと、その手で軽くピラフを握ってピンポン玉ぐらいのライスボールにする。それを口に運び、親指の背で口に押し出す。これを満腹になるまでひた

すら繰り返す。味はやや薄味だが見た目と違ってスパイシーではなく、チキンの味と相まってなかなか美味しい。しかしピラフはできたので慣れないと指が熱い。

一通り皆が満腹すると、片付けに入る。この片付けがまた合理的だ。ピラフはまだだいぶ残っている。彼らはまず新聞紙を広げ、手で触られた山の周辺のご飯をフォークで掻きとり、それを広げた新聞紙の上へ移す。するとピラフの山は少し小さくなるが手つかずのところだけが残る。汚れたご飯は新聞紙ごと丸めて捨て、残ったピラフは明日にでも温め直して食べることができるといふ寸法だ。とても便利なシステムである。

さて食事の後、私たちはアラビックコーヒーを飲みながら語っていた。

「シャデー、ブレイクファストに招待してくれてありがとう。とても美味しかった。もっとスパイシーな料理なのかと思っていたが、日本人の味覚とよく合う味付けだった。それにムスリムの祈りは初めて見た。これは僕にとって貴重な経験だ。ところでこんなことを聞いていいのかわからないが、一日に何度もこうして祈ったり、断食をしたり、正直に言ってイスラム教の戒律を面倒だと感じることはないのか？」

「それほどでもないよ。一回のお祈りはたったの五分だ。たいした負担じゃない。それに断食はとても体にいいんだ」

「なるほど、そうなのか」

と答えたものの、それは信仰心あつての感覚であつて、私だった

ら間違ひなく面倒だと思つてははずだ。実際戒律の厳しいサウジアラビア人の中でも、最近では平気で酒を飲んだりお祈りもあまりしない者もいる。

シャデーはいろいろとムスリム世界の仕組みや内在論理を説明してくれた。イスラム社会は独特だ。しかしその独自の公理系でこの社会が安定するように実にうまくできている。例えば一定の収入のある者は、毎年収入の二%を弱者のために寄付することが義務になっている。これは法制化されていて、社会の仕組みと宗教が不可分なものであることがわかる。女性を徹底的に守る仕組みも持っている。女性は肌を公の場でさらさないことになっている。これは地域によつて厳しさが段階的に違う。肌をさらさない、顔を見せてはいけない、髪を見せてはいけないと、厳格さの程度に差はあるが、基本的に男女の生活は隔離されるシステムになっている。髪の毛すら結婚相手と家族以外には見せてはいけないのだ。イスラム教は男女間の道徳を厳しく律している。

それにサウジアラビアは表面的には強烈な男性社会である。重要なことの決定はすべて男が行うし、外では女性は徹頭徹尾男性を立てる。だからヨーロッパの女性にはサウジの男はとにかく不評である。たとえば、英語の授業中にサウジの男性が「女が政治に参加するなんて変なことだ」といった発言をする。とたんに教室は欧州女性連合によるブーイングの嵐となる。こういう光景を何度も目にした。

ただし重要なところは、家に帰るとこの力関係は変わるといふ

ことだ。伴侶との愛を育てて子供をたくさん作りなさい、というのがイスラムの教えである。たしかに西洋の価値観からすれば、差別としか見えないことも沢山ある。しかし当人たちにしてみれば、男は男らしく、女は女らしく生きるということのようだ。それに最近のサウジの女性は意外とバシツとものを言う。これはこれで実はバランスがとれているのかもしれない。ただバランスのとり方が西洋社会と異なるだけだ。西洋社会は公でも私でも男女は平等である。だから女性は男性に甘えたことを言わないし、責任も応分に負う。これも一つのバランスの取り方だ。どちらも異なる公理に基づいた、「完結した世界」なのだろう。

こうした内在論理の違いを理解しないと相手を奇異の目で見ることになる。少なくとも私はイスラム社会に一定の理解を持ち続けるであろうし、よそ者の私が彼らの文化に対して野蛮な口出しをするつもりもない。

だが、彼らにすればこちら側こそが不思議な世界なのだ。シャデイーはしばらく考えて言った。

「アキオはたしか自然科学の修士号を持っていたな。いい機会だから聞きたいことがある。人間は猿から進化したという「変な話」を聞いたことがある。それは本当なのか？率直に答えてくれ」

私は正直ショックだった。文化の違いというのは恐ろしい。そして偉大だ。彼は進化論を「変な話」と言ったのだ。さすがの私もここまでとは思わなかった。つまり彼らの世界ではいまだに進化論はタブーなのである。

「僕は生物学をやっている人間だ。僕の立場から言えば、答えはイエスだ。人間は猿に近い生き物から徐々に変化して今の形になった」

「どうしてそんなことが言えるんだ？」

「生物学ではこれを形態学的に実証するんだ。この場合化石が証拠だ。たとえば大昔の一種の猿の骨の化石がある。それより少し時代がすぎると少し人間に近づいた別の動物の化石が出てくる。さらに時代が過ぎるとより人間に近づいた骨が見つかる。より時代が過ぎるとほとんど人間に近い化石が出る。こうした化石を時代の流れ順に並べると、どんなふうに変化してきたのが分かるんだ。最近では遺伝子の分析も行われている。僕は専門家ではないので旧人や猿人の遺伝子が調べられたかどうかはわからないが」

その場にいた三人のサウジアラビア人はじっと私の話を聞いたあと、下を向いて一言「そうか」とだけ言った。

話はオックスフォードに戻る。この日は私とトムス、そしてウサマとジュエルというメンバーでタフターバンへ向かった。日本、ドイツ、エジプト、フランスという四カ国会談だ。私たちはそれぞれがカウンターでビールを買い、まだ明るいテラス席で飲み始めた。

「ウサマ、君の名前はイスラム社会でよくみられる名前だな」

「その通りだ。例のウサマ・ビンラディンと同じ名前だよ。ついこの前商談でスイスの会社を訪れたときも、僕が名前を名乗ったら相手が早速反応した。今日は爆弾持ってませんよねって」

そう言ってウサマは大声で笑った。

トムスが煙草に火をつけながら言った。

「このパブは煙草を吸えるのがいい。だからこのパブが俺のマイ・パブなんだ」

「しかしイギリスの煙草は高い。これで一箱6ポンドもした」

「ヨーロッパはどこでも高いよ。ドイツでもフランスでも同じよなものだ」

「アイルランドでは一箱9ユーロだったよ。そのうえ道を歩けば煙草をく咧つていう人が多くて困った」

「9ユーロは高いな。日本ではどうなんだ？」

「今のレートで一箱3ポンドというところだ。まだそれほど高くない」

それを受けてウサマが言った。

「エジプトだと二十ドルする。エジプトでは煙草が高いんだ」

「それは高すぎる。エジプトでは煙草はそんなに大きな税金なのか？」

「そうだ。でも一番の理由は医療政策だ。エジプト人は煙草狂いが多い。しかもその多くが低賃金労働者だ。彼らは日雇いの仕事をしているのだが、一日の収入はわずか三十ドルほどだ。しかしその金を煙草に使ってしまう。パンが買えなくても煙草を買うんだ。これはエジプトにとって深刻な問題なんだ。煙草狂いで沢山の人が死んでいる。でも彼らは煙草をやめようとしなない」

エジプト社会の実体を聞く機会はとても少ないので、ウサマの話はとても興味深かった。ウサマは続けた。

「アキオ、実のところ僕はビンラディンの弟と一緒に仕事をしているんだ」

「えっ！ 本当か？ 真面目な話か？」

「ああ本当だよ。こういうと驚く人が多いからいつも話のタネにしている。彼はアシュラフ・ビンラディンという。僕はビンラディン・ペトロ・サービス・カンパニーというオイル会社で働いているんだ」

「驚いたな。ビンラディンの弟というのはどんな人物だ？」

「ビンラディンには何人か兄弟がいるが、アシュラフは実にいい人だ。彼だけではなく、彼のファミリーはみんなとても気持ちのいい人々だよ。日本人であるアキオにとっては驚きかもしれないけれど」

「いや、そんなことはない。僕にはイスラム教徒の友達がいる。僕の親友はトルコ人だし、サウジアラビアやオマーン、アラブ首長国連邦の友達もいる。西側諸国で報じられているムスリムのイメージと、実際のイスラムの人々が違うことは分かっているつもりだ。みんな平和を望んでいる。彼らを見ているから僕はイスラム社会に対しては比較的偏見が少ないと思う」

「それはいいことだ。イスラムの人々がみんな爆弾を持っているわけじゃない！」

そう言ってウサマはまた大笑いした。私は言った。

「もちろんだ。それどころかムスリムはとても規律がしっかりしているし、ものすごく親切で礼儀正しい。僕はダブリンでサウジアラビア人の家に招かれたことがある。食事をごちそうになった。実はそのとき、帰りが少し遅くなってしまったんだ。そうしたら、「このあたりは拳銃を持った連中が多くて夜は危ないから」といつて、わざわざ二人のムスリムの友人が僕を住んでいた寮まで見送ってくれたんだ。本当に親切だった」

「それもイスラムの教えだよ。人に親切にすることはイスラム教ではとても重要な道徳なんだ」

「しかしウサマは、実際のところビンラディンのことをどう思っているんだ？ さしつかえなかったらイスラム社会における一般的なウサマ・ビンラディンの受け止め方を聞きたい。彼に対するイスラム社会の率直な評価を教えてください」

「もちろんだ。ビンラディンの考え方はイスラム社会である程度支持されていると思う。もちろんテロという手法についてはイスラム社会でも多くの人が反対しているが、彼の思想は間違っていないと考える人が多い。まずイスラム社会の中に土足で入ってきたのはアメリカだ。狙いは石油だ。背後ではアメリカのオイル・カンパニーの政治献金が動いている。しかしアメリカがアラブに侵入するには、政治家がアメリカ国民の同意や支持を取り付ける必要がある。だからビンラディンとイスラム社会のイメージを徹底的におとしてみた。そしていかにも正当さを装ってアラブに入ってきたんだ。だがそれはイスラム教徒には受け入れられないことだ。イスラムにはイ

スラムの伝統や暮らしがある。ビンラディンはそれを守りたかっただけなんだ」

「もちろんアメリカがイスラム世界全体のイメージ操作をしているのはよくわかる。でもあのような報道のシナリオは誰が書いているんだ？」

「確かなことは言えないけれど、僕の考えではCIAの情報操作を担当している部署だと思う。基本的に報道機関は政府の発表に基づいてシナリオを描く。でも報道機関もシナリオ作りには加担している」

「CIAがそんな露骨なシナリオ作りなんかするのか？ ウサマはなぜCIAだと思うんだ？」

「あまり知られていないが、かつてビンラディンはCIAで仕事をしていたんだ。冷戦時代のことだ。特に70年代、ビンラディンは対ロシア・アフガニスタン工作でずいぶん活躍した。しかしそのことがあまり公になるとアメリカ政府としてはやりにくい。だから一切報道されない。なかでも一番都合が悪いのはCIA自身だろう」

「報道機関もシナリオ作りに加担していると思っるのはなぜだ？」

「僕はアラビア語と英語の両方が分かる。アメリカのニュースでビンラディンの映像が流れているときに翻訳が流れるだろ？ そのとき、ビンラディンが映像で語っていることとまったく違う訳が流れていることがよくある。あるときビンラディンがテロを予告するような英訳が流れているときがあった。でもビンラディンは「我々の家を守ろう」と言っていただけだった。まともな報道機関だった

らそんな間違えはしない。明らかに意図的にやっている」

「驚いた。特にビンラディンがCIAにいたというのは初耳だ」

「そうか、我々の中では有名な話だよ。たとえばビンラディンがこれほど長くアメリカの追跡から逃れられたのはどうしてだと思う？ CIAの戦略ややり口を全部知っていたからだ」

「ウサマ、おもしろい話だ。これは西側の人間はほとんど知らない話だと思う」

「ヨーロッパ人の半分は知っているよ。でもアメリカや日本でこういう事情が広まることはないかもしれないけれどね。日本は親米国だろう。とにかくアメリカ人は自分たちの見方・考え方を絶対的に正しいと思い込んでいる。それがアメリカ人のナシヨナリズムであり、唯一のよりどころだからだ。だからアメリカはある意味イスラムよりよほど一神教原理主義なんだよ。彼らの公理系は所詮は近代の「システム」だ。それが歴史のない国の弱みなんだ。でもイスラムにはイスラムの完成した物語や世界がある。それは西欧の近代の価値観とは相容れないかもしれない。でも僕たちは僕たちのやり方で平和で美しい社会を作ってきたんだ。だから、ビンラディンの「手法」は間違いだつたと多くの人が思っている、彼の思いはよくわかるんだよ。彼は金に執着せず、正義のために生きた。とにかくイスラムの人々は彼の死を悲しんだんだ」

Real Intelligence Rechard

オックスフォード・シティーセンタの中心部、ブロードストリートとハイストリートに挟まれた一角にマーケット (Covered Market) がある。肉屋、魚屋、八百屋、デリカ、ケーキ屋、ペイストリーといった食料品店、雑貨屋、洋服屋、時計屋、食器店などの生活雑貨、そして二・三軒のカフェやレストランが入っている。見て回るだけでも楽しい場所だ。特に八百屋と魚屋には見慣れない商品が並べられていて私には本当に面白い。

例えばイギリスの白桃。直径は五〜六cmぐらいの小粒で、厚みが3cmほどの扁平な形をしている。小さくて少々食べにくい、味は日本の白桃よりもむしろ甘いぐらいだ。それでいて値段は非常に安い。

イギリスは鮮魚が高い。スーパーでは基本的に鮮魚らしい鮮魚はあまりなく、あってもタラやサバなど種類が限られている。しかしこのマーケット内の魚屋では様々な魚が売られている。タイやヒラメ、マトウガイ、スズキ、マスなどの鮮魚から、スモークしたり味付けをしたりした加工品も売られている。もちろんスモークドサーモンも有名だ。スコットランド産のスモークドサーモンにハニーマスタードをつけ、パンにはさんで食べるととても美味しい。ちよつと甘いマスタードとサーモンの塩気の取り合わせは、日本人には馴染みの薄味だが、慣れると何とも言えない美味しさがある。

スモークドマツカレルやスモークドサーディンもよく食べた。特

にヨーロッパのサバは日本のサバよりもずっと脂ののりがいい。私は釣りをするので、日本の細いサバはパサパサで食べられたものではないことをよく知っている。しかしノルウェーサバを想像してもらえると分かりやすいと思うが、当地のサバはスリムなものでもよく脂がのっている。これを口にするまでは、秋から冬の日本のサバを塩焼きにするのが一番うまいと思っていた。次いで味噌煮。さすがに釣らたてのサバに大量の塩をし、酢と柚子の果汁で作るメサバは今でもやや別格であるが、私にとってこのスモークドマツカレは塩焼きや味噌煮には圧勝である。パンには喜んで食べるのもよし、そのままビールつまみとしてもよし、ほぐしてパスタに使用してもいい。サバは癖が強く、特に生臭みが強い魚だ。塩焼きではその脂の強さや癖の強さが際立ってしまう。だがスモークドマツカレの強い燻製香は、サバの野性的な味と引き立て合う関係で、本当に相性がいい。

ある日見慣れないものをマーケットの八百屋で見つけた。緑の葉の塊のようで、見た目はホップのようだが、果物の売り場に並べられている。よく見ると葉の中央に殻がある。商品札にはフレッシュ・ケント・コブ・ナッツと書いてある。私はすぐに店主に聞いてみた。

「すみません、このケント・コブ・ナッツはどうやって食べるんですか？」

「これかい？ 見せてやるよ」

そう言っただけで店主は一粒の実を手にとると、殻の周りの葉をむしり

取り、割れ目を入れて殻を器用に剥き去った。中から白い実が出てきた。

「この部分を食べるんだよ。ポートワインを飲みながら。この季節の風物詩だよ。ケント・コブ・ナッツとポートワインは最高のコンビネーションなんだ」

「フライパンでローストしたりするんですか？」

「いや、生のまま、このまま食べるんだ」

私はその場でひと掴みのケント・コブ・ナッツを買い込んだ。八百屋の陽気なオジサンは、昔ながらの秤で適量を売ってくれ、茶色い紙の袋のごっそりとそれを入れて手渡してくれた。私はその足でポートワインを手に入れるため酒屋へ向かった。

帰ると早速試食である。殻を割る。ちょうど大きなピスタチオのような感じで、3cmほどの大きさがある。殻を割ると白い中心部が出てくる。梅干しの種の中に入っている仁のような感じである。奇妙な食べ物ものだ。歯ごたえはカリツとしていて、生のアーモンドのようだが、味のほうは（率直な感想として）旨い不味いというものではなく、味がほとんどない。甘いポートワインはもちろん美味しいが、何度試してもこのコンビネーションの妙が私にはどうもわからなかった。

ある朝学校に着くとトムスが敷地の外に立っている。彼は落ち着きのない様子で煙草を吸っていた。私は彼に近づいていって話しかけた。

「おはようトムス、調子はどうか？」

「どうもこうもない。最悪だ」

「どうした？ 何かあったのか？」

「明後日ドイツに帰るよ」

「明後日？ 帰国の予定は今週末じゃなかったのか？ しかもイスで仕事を済ませてからドイツに帰るって言っていたじゃないか」

「そう思っていたんだが、実は父の具合が悪いらしい。明後日の飛行機がとれたから、ドイツに帰ることにする」

「大丈夫なのか？」

「あまり良くなさそう。父には癌がある。ここのところ体調がよくないらしいんだ」

「それは心配だな」

「ああ、しかし今日帰ろうにも飛行機がないからどうしようもない」

「トムス、だったら夜は出かけよう。部屋で考えていても気分が晴れないだろう。レオにいいところがないか相談してみるよ」

「ああ、そうだな。残った時間を楽しまないと」

私は午後の授業のあと、前庭でレオをつかまえて相談した。

「そうか、じゃあ今夜は夜のオックスフォードにくりだそう。パブで飲んで、それからいいところへ連れていく」

その夜、私たちは学校のグラスで待ち合わせ、トムスにレオ、そしてヤニーナというドイツ美人と私の四人でパブに向かった。そこ

はヴィクトリアという、パブでシティーセンターからは少し離れているが、古い内装が実に美しいパブだ。天井から大きな飛行機の模型がつるされていて、このパブの一種のシンボルになっている。

私たちはそれぞれビールを頼み、ソファに座って談笑しながら飲んでいった。そこに一人のアンティークな服装をした紳士が話しかけてきた。まるでシャーロックホームズの時代から来たような、グレイのベストの上に背広を着て、さらに黒いロングコートを羽織っている。長身でかつ太っており、ものすごい存在感だ。まるで妖怪である。それでいかにもイギリス紳士を絵にかいたような男だった。

彼の英語は完全なオクスブリッジだ。上流階級の発音だが、ゆっくりと話す。

「見ない顔だね。留学生かな？ どこから来たんだ？」

ヤニーナが答える。

「私はドイツからよ」

「そうか、ようこそオックスフォードへ。このパブはなかなかいいだろう？ 是非とも楽しんで」

そう言って妖怪はビールのグラスを片手に、のっしのっしとテラスの方へ歩いて行った。これが私とリチャードとの最初の出会いだった。

私たち四人は引き続きソファに座って談笑していた。レオが話題を先導していた。テーマは男女のつきあいが上手いくくために大事なことは何かといったことだったように思う。一時間くらい話して

いたであろうか。私は話がつまらなくて外で煙草を吸うために席を立った。

テラス席で煙草を吸っていると、隣の席に妖怪が煙草をふかしながら一人で座っていた。目が合うと彼は話しかけてきた。

「君も煙草を吸うのか」

「ああ。だがイギリスも日本同様、喫煙のポリシーが厳しいね」

「全くだ。外で吸えるだけかもしれませんがね。ところで君はどこから来た？」

「東京だよ。いまは語学学校に協力してもらって研究調査をしている」

妖怪は右手を差し出して握手を求めながら私に名刺を手渡した。

「リチャードだ。オックスフォードでギリシヤ文学とラテン文学を教えている」

「大学のメンバーの学者か？」

「そうだ。コープス・クリステイ・コレッジに属している」

「僕のことをどこの人間だと思った？」

「日本人だと思った。日本人と中国人はぜんぜんちがう。振る舞いを見ていれば分かる。韓国人と日本人の見分けは難しいが、君は日本人だと思った」

「そうか。しかし日本と中国ほとんど同じだと考えているヨーロッパ人は多い。スペインとポルトガルみたいなものだと思っているみたいだ」

「ああ、そう思われているだろうね。だが日本と中国は全く違う国

だ。日本は侍の文化の国だ。美しい文化がある。いまでも企業の経営者の中には侍の精神で経営を行う人がいると聞いたが、実際のところどうなんだ？」

「確かにそういう人もいる。しかし日本経済を牽引するほどの強い企業では、昨今それをするのはなかなか難しいと思う。今どきほとんどの企業の経営方式はアメリカナイズされているから」

アメリカという言葉が出た瞬間、リチャードはさもおかしいと言った感じで「うわあっはっはっは！」と大声で笑った。

「アメリカナイズか。いや、まったくだ。どうしようもない」

「アメリカ式の経営は労働者の生活や幸福に価値を置いていない。会社の利益の追求が唯一の教義だ。僕にはこの方式が本質的に日本の内在論理とそりが合わないと思っている」

「あたりまえだ。それは侍の精神にもとづく日本の考え方とは相容れないのだろうか？」

「君はイギリス人だろ？ よく知っているな。その通りだ。日本の会社組織が終身雇用制度を伝統的に取り入れてきたのも、経営者が社員の家族ごと守る覚悟を決めていたからだ。日本の伝統的な考え方は、上に立つ者は下に従う者のことを優先的に考えるのが基本なんだ」

「ああ、それはshogunateの時代に成立した倫理だな。ヨーロッパの王政では上の者は贅沢をすることと保身で一生懸命だったというのが一般的だった。特に我々の敵のフランスではね。だがイギリスには日本的な考えがある。騎士道だ」

「なるほど。僕は騎士道についてはあまり詳しくない。騎士道の考え方は武士道に似ているのか？」

「武士道というのは何だ？」

「Shogunateの時代に侍が守った倫理観だ。いままさに話していたような考え方だよ」

「ああ、騎士道は武士道に似ている。騎士道でも上に立つ者は下の者や弱い立場の者のことを考えるんだ。イギリスには騎士道に基づくような倫理観が今でもある。日本と同じように」

「なるほど。でも日本の場合、第二次大戦後にアメリカの影響を受けすぎた。伝統的な考え方はかなり失われていると思う」

「アメリカね」と唸るようにリチャードは言い、そして続けた。

「日本の伝統的な仕組みは実に美しい公理系だったと思う。一面的にみて評価してはダメだ。強者は弱者を救い、弱者は強者を支える。男は女を守り、女は男を支える。複雑だが整合性がとれている。収支がプラスマイナスゼロで完結した世界だ。アメリカの民主主義のような単純な幻想崇拜とは違う。アメリカは100÷100＝1という単純な平等だ」

「だから僕は日本に民主主義や法治主義が根づくのかという、根本的な疑問を持っているんだ」

リチャードは再び唸って言った。

「たしかにそれは難しいかもしれない。昔から日本には日本流の自由があった。だがそこに現実にある自由の形と、システムとしての自由は完全に別のものだからだ」

「だが、イギリスだって民主国家じゃないか。民主主義を内在論理の中核に据えているんじゃないのか？」

「イギリスの中核は民主主義だって？ 断固としてノーだ！ それはただの看板だよ。イギリスの中核はキリスト教と個人主義だ」リチャードは完全にそう言い切った。

「リチャード、君の話は面白い。でも残念だが僕はそろそろ友人のところに戻らなくてはいいけない」

「アキオ、僕も日本のことを知れて楽しかった。しかしこれで終わりにしてしまうのは誠にもつたいないことだ。アキオはまだオックスフォードにいるのか？」

「ああ、まだしばらくいる」

「よし、それでは今度は一人でここに来てくれ。二人だけで話をしよう。これが僕の連絡先だ。連絡をくれ」

「必ず連絡する。近々またここで会おう」

私が友人たちのところへ戻るとすぐ、四人でヴィクトリアを出た。夜中の十二時を回っていたが、私たちは静まり返った街の中をシティーセンターまで歩いた。そう、レオが言う面白いところへ向かったのだ。十五分ほど歩いてたどり着いたのはFive bridgeというデイスコである。日本ではクラブという言い方をしますが中身は同じだ。フロアには大音量で音楽が流れ、バーカウンターで酒を買うことができる。日本のクラブと最も違うところは客の乗りであるう。

ヨーロッパ人は踊るという行為にためらいがない。恥ずかしいなどとは考えず、とにかく心から楽しんでる。日本人には恥ずかしさがあるし、クラブで踊るなどということも半ば恰好をつけた行爲だが、ヨーロッパ人にとっては比較的日常的なことなのだ。もちろん全ての人というわけではないが、特に若者たちにとってこうしたクラブで遊ぶことはとても楽しいらしい。日本人の学生はフロアの片隅で小さくなっているが、ヨーロッパ人たちには不思議に映るらしい。

レオは早速フロアの中央で踊り始めた。私とトムスは二階のフロアのバーカウンターでビールを飲みながら、踊り狂う人々を呆然と見ていた。すると突然見知らぬ白人女性が私の手をとったかと思うと、耳元で囁いた。

「一緒に踊りましょうよ」

私はフロアの真ん中まで連れて行かれた。三十畳ほどのフロアをヨーロッパ人たちが埋め尽くし、半狂乱のカオスになっている。全体が地響きのような。音楽が最高潮を迎えたとき、突然ステージ前方から大量の白い泡がもの凄い勢いで吹き出し、踊り狂う人々の上に無遠慮に降り注いだ。膝下まで泡に埋めながら、髪や顔に着いた大量の泡にまみれて踊り続ける人々。それをその真ん中に立って眺めていると、不思議な感慨が湧いてきた。これもまた、まことのヨーロッパの血というべきものであり、文化の違い・民族性の違いを最も如実に感じることが出来る場面の一つに違いないと私は感じた。

Vandalism

ロンドンで暴動が起きたことは日本からの連絡で知った。八月四日にマーク・ダガンが警察官に射殺されたことがそのきっかけとなったという。しかし暴動はロンドンだけに収まらず、マンチェスター、バーミンガム、ノッティンガム、リバプール、ブリストルといった周辺都市へあつという間に広がったのだ。

この暴動で不思議だったのは、ここまで広範囲に広がった理由を誰に聞いても分からなかったことである。一説によるとマーク・ダガンの射殺は暴動の引き金を引いただけで、実質的には雇用や経済状況に関する政府への抗議だとも言われた。しかし単なる打ちこわしだけでは終わらず、一部には略奪も行われた。

私のもとにも日本から安否を確認するメールが何通か届いたが、オックスフォードは平和そのものだった。学術都市だけあって普段から治安は良いのだ。私は学校が終わるといつもと変わらぬ街のにぎわいの中を歩きながら、本屋をめぐり、買い物をし、森を散歩しながら思索した。リサーチは思うように回収できていなかったがそれなりに順調だった。

寮の部屋にいるときは哲学書を読んだり、得られたデータを前に考えることが多かった。価値というものは論理的に出力できない。たとえばお年寄りをいたわることは「善いこと」であると多くの人は思っている。しかしそれを論理的に説明することはできない。一方で世の中には屁理屈というものがある。例えば、お年寄りを粗暴

に扱った若者がいたとする。その若者に対して、「お年寄りをいたわりなさい」と叱ったとき、その若者は「それはお年寄りのためにならない」という屁理屈をこねたとする。しかしそうした屁理屈もまた論理的に真偽を出力できない。つまり論理で説明出来ない領域の中で「倫理」として成立している（と思われる）事柄と、単なる誤謬であるはずの「屁理屈」の両者は、「論理的に」峻別することは不可能なのだ。屁理屈を撃退することがなかなか難しいのもそのためだ。屁理屈はあたかも倫理のような顔をして、いかにもまともなことであるかのように振る舞うが、やはり屁理屈は屁理屈なのだ。果たして屁理屈と倫理はどのように峻別すればいいのだろうか。もちろん私は現実生活上のテクニカルな回答を求めているのではなく、哲学的な峻別を可能にする明確なメルクマールを探しているのだ。私のやっている哲学の一部については、こういう言い方もできるかもしれない。

そうこうしているうちに暴動の規模は大きくなっていった。ついにおックスフォードシティーセントからバスで十五分ほどのヘディントンでも暴動が起きた。マクドナルドで破壊活動が起きたという。私はオックスフォードの町中に住んでいたが、ホームステイをしている友人のほとんどは、少し離れた郊外の町からバスで通ってきており、中にはヘディントンに滞在している者もいた。さすがに町中にいる我々の中にも一抹不安がよぎった。

日本人の留学生の多くはエージェントを通じて留学の手配をして

いる。彼らの多くにはエージェントからメールが届いたらしい。それはロンドンに出ることは自粛するようという内容だった。

私は今回どうしてもロンドンに行きたかった。平日は忙しくて身動きが取れないものの、週末には時間ができる。ロンドンでは二年前から目をつけていたある買い物がしたかったのと、ロンドンの中華街にどうしても行きたい店があった。それが日本から予定していた「唯一の」楽しみだった。この滞在記は毎日が面白いかのように書いているかもしれないが、実際は調査や勉強で一日一日がとても大変なのだ。多少ゆっくりできるのは週末だけである。そこで暴動を考慮し、一週間待って、ロンドンへは次の週末に出ることにした。

この時の週末はコッツウォルズに出かけることにした。田舎ならば暴動の心配はまずない。コッツウォルズはイギリス南西部に広がるカントリーサイドで、オックスフォードの西に位置する。昔ながらのコテージが点在し、人々の多くは牧畜をしながら暮らしている。街にも古い建物が残り、周辺にはなだらかな丘に開かれた牧草地が広がっている。風になびく広大な緑に白い羊たちが点在するさまは、イギリスの典型的な風景だ。牧草地は石積み塀で囲まれており、敷地から羊が逃げないようにしている。この石塀はコッツウォルウォールとよばれ、横に平積みした石で塀を作り。その上に五センチほどの厚さの石を縦に積んである。この地方を象徴する特徴的な石囲いだ。

私はコッツウォルズ地方の中でも二年前に訪れることができなかつたカースルクロムという村に行くことにした。

カースルクームはイギリスでもっとも古い家並みがよく保存されている村として何度も表彰されているが、いままも幾百年もの間変わっていない美しい景観が残っている。山間の清流に沿って村が開け、マーケットの跡や貴族の館も残っているが、三十分もあればぐるっと回ることができる小さな村だ。日本人には特に人気が高い。だがここに行くには電車やバスに何度も乗り継がなくてはいけない。私はオックスフォード駅から鉄道に乗り、途中スウインドンで乗換え、チツペナムという駅で降りた。そこから一日に四便しかないバスを待つ。それもマイクロバスのような小さなバスだ。とにかく不便な村なのだ。その不便さゆえに、古の美しさが残っているのである。

実際に降り立ったカースルクームは本当に美しかった。ライムストーンを積み重ねて建てられたコテージの家々。そこには赤や朱鷲色のバラが見事に咲き、脇のイングリッシュガーデンにもまた色とりどりの花が咲き乱れている。清流には川鱒が泳ぎ、時々水面で身を翻しては、静寂の中に波紋だけ残して再び沈んでゆく。彼らは小さな羽虫が水面に落ちると、水の下から浮き上がってそれを捕食する。その時に波紋や小さな水飛沫が起きる。これをアングラーたちは「ライズ」とよぶ。イギリスのフライアングラーたちはこのライズをたよりに、フライ（毛鉤）を投げる。

イギリスはフライフィッシング発祥の地だ。フライフィッシングは一種の紳士の嗜みで、特に上流階級の遊びである。イギリスの川の多くは貴族（荘園領主）の私有地を流れているので、勝手に釣り

や漁をすることはできない。昔から一般庶民がこうした川で魚を獲ることは密猟とみなされ、見つければ逮捕された。貴族たちはスーツにハンチング帽、蝶ネクタイといういで立ちで釣りをするのである。自らの手で鳥の羽を巻きつけた毛鉤を飛ばし、流れにそっと載せる。魚の目には水面に浮かぶそのシルエツトが羽虫のように映るのだ。川鱒や虹鱒が流れてきた毛鉤を捕食した瞬間をとらえて釣りあげるのである。一方、庶民には庶民で密猟が一種の水面下の文化となっていた。もちろん捕まれば大変なことになる。彼らは餌をつけた釣針をこうした川に投げ入れ、糸を木陰の目立たないところに結んでおいた。こうした置き針の仕掛けでウナギなどを釣りあげるので、ロビンフッドも有名な密猟者だった。

カースルクームのマーケット跡の脇には、小さな尖塔をもつとても古い教会があり、ステンドグラスの色や石壁の風化の具合、そして苔むした墓石から、およそ何百年も昔からこの地の風景が何ら変わっていないことが容易に想像された。通りに並ぶコテージの前では掃き掃除をしている中年の女性がいて、家を伝う鳶の枯葉などを集めている。いかに古いコテージといえども、そこには今も人々が暮らす生活感があり、手入れの行き届いた花壇からは生き生きとした人の営みの息吹が聞こえてくるのだ。

私はハイストリート沿いの村はずれまであるき、そこからまたゆっくりと引き返した。教会の中を歩き、家の前で手作りのケーキなどを無人販売しているテーブルなどを眺めながら、大小色とりどり

の鮮やかな花にあふれる村の風景を一つ一つ目にするたび、私は溜息をつかずにいられなかった。自然と人間と長い時間が作りだし、美しい生活がそこにあった。

マーケット跡の脇にホテル・カッスルという洒落たホテルがあった。私はそこで昼食をとった。大きな暖炉のある食堂に座る。重厚な木の深い艶と、石の堅牢さを感じる室内だ。ここはパイが名物である。私にはパイは重すぎると思ったので、何の期待もせず、フィッシュアンドチップスを頼んだ。サイダーを飲みながら待っていると、しばらくしてウェイターがフィッシュアンドチップスを運んできた。見た目はごくごく普通のフィッシュアンドチップスだ。

それまでに食べたフィッシュアンドチップスで一番おいしかったのはダブリン郊外にあるホースという港町で食べたものだった。海を目の前にしたホースでは新鮮なタラを軽い衣で揚げる。ホースには漁港の中にフィッシュマーケットがあり、フィッシュアンドチップス自体がこの町の名物だった。しかしカーズルームという山間の村の一軒宿で出てきたこのフィッシュアンドチップスが、それまで私が食べたどのフィッシュアンドチップスよりも美味しかったのだ。ホースのそれをはるかに凌駕していた。

その後、私はチップナムへ戻り、チップナムのマーケットや教会をまた散策し、再び列車に乗ってオックスフォードに帰った。穏やかな週末の一日だった。

暴動はそれから一週間もすると話にも上がらなくなった。知らぬ

ところで起きて、知らぬうちに自然に消えていったような不思議な感覚だった。

Intelligence Lesson

リチャード・スウェル＝ラター博士とはその後もメールでやり取りをしていたが、お互いもつとゆつくり話がしたいということになり、ある日再びヴィクトリアで会おうということになった。特にオックスフォードでの私の研究の話をしようという話になった。

ウイトゲンシュタインには「論理哲学論考」と「哲学探究」という二つの代表作がある。このうち論理哲学論考は思考可能な領域と思考不可能な領域の境界に明確な線を引いた哲学書だ。もう少し分かりやすく言えば、論理的に説明が可能な領域あるいは論理的に真偽が出力できる領域と、それが不可能な領域を明晰にするとともに、言語の使い方という観点から古来より提出されてきた数々の哲学命題の不健全さを問うことを試みた。論考には誤りがあるのでこの書を誤謬として遠ざけてしまう向きもある一方、野矢茂樹氏（東京大学大学院教授）土屋賢二氏（お茶の水女子大学名誉教授）を始めその功績を高く評価する研究者も少なからずいる。

私にとって論考で最も興味深いところは、ウイトゲンシュタインが思考可能な領域を明確にしたことにより、反転して思考不可能な領域を浮き上がらせたところにある。語りうることを語ることは難しいことではないことを明らかにすることによって、語りえぬこと

の重要性を語りたかったのではないか。反哲学的断章を読んでいると、まさに彼が大事なものとして思っているのが思考不可能な領域に存在するものであることがうかがえる。彼は写像理論の中で、「説明する」ということは、結局世界の事実に対応する命題を作成することであることを明らかにした。所詮は文を作るということにすぎないのだ。こうなると論理的なものなどたかだか論理にすぎない、と言いたくなるし、超越論的なものの重要性をさらに感じるばかりである。同時に哲学において命題を構成する言語の使い方が正しいかどうか死活的に重要であると（ワイトゲンシュタインは言いたかったであろう）いうことは、今回の研究をおこなう上でも非常に気を使った点であった。

一方で「哲学探究」はワイトゲンシュタインがその後半生をかけて書き続けた書で、刊行されたのは彼の死後のことだった。彼は思考不可能な領域をいかにしてつかみ、把握し、表現すればいいのか、考えた末に得たのが言語ゲームの着想である。「あるゲーム（状況）において語られるその言葉が意味するところ」という着想によって、それまで語りようのなかった概念が上手く表現できるようになったのだ。同じ言葉でもそのゲームによって意味するところが変わってくるという発想がその出発点になっている。

私は数人の哲学者の理論を簡単に勉強してきたが、最も腰を落ち着けて学んだのはワイトゲンシュタインだった。そのせいで私の思考の道筋は少し普通ではないかもしれない。いずれにしてもこの理論体系の骨格が、可視化されたイメージとして常に私の脳裏に存在

し、拭い去ることができなくなってしまった。

夕刻ヴィクトリアに着くと、すでにリチャードはテラスで飲んでいた。大柄なうえ、その風貌は明らかに異彩を放っている。二人掛けの木製の椅子にどっかりと座り、テーブルに肘をのせて飲んでいた。

「アキオ、ここだ！」

「リチャード、元気か？ また会えてうれしいよ！」

リチャードは立ちあがり、私たちは握手を交わした。私はひとまずカウンターでサイダーを買い、テラスに戻って改めて飲み始めた。

リチャードが聞いた。

「調査の進み具合はどうだ？ うまくいっているか？」

「ああ、学校が協力してくれている。任意の調査だから回収率が悪いけれど、なんとかデータも集まってきたよ。これはその一部だ」

そう言っただけで私は回収したリサーチの束を見せると、リチャードは笑いながら言った。

「おう、ずいぶん集まったな！」

「だが国籍に偏りがある。ドイツ、スペイン、フランスの数はある程度集まった。だがそれ以外の国の数はかなり少ない。何かを言うためにはもう少し必要だ」

「見てもいいか？」

「もちろんだ。リチャードにも答えてもらえると助かる。イギリス

人のデータとしてではなく、僕の設定した問いにリチャードがどう答えるか、またリサーチ自体をどう見るかに興味がある」

「喜んで協力するよ」

そう言つてリチャードは私の差し出したリサーチペーパーを読み始めた。

「うん、面白い問いだ。こちらの問いはきき方が実に興味深いし、いい設問だと思う」

「僕はこれで国籍によつて倫理観がどう異なっているのかを検出したいんだ。研究の軸はワイトゲンシュタインだ。設問自体には言語ゲームも援用しているが、基本は論考を核に組み立てである」

「論考か。あれは難解な書だ。最初は簡単だが、読み進めるに従つて本当に難しくなる」

「原典を完全に解読することは自力では難しい。幸い東京大学の教授が分かりやすい参考書を出している。僕は数冊の参考書を使って理解した。僕は哲学者ではないし、哲学科を出ているわけでもない。でも専門書を読み込んで、なんとか論考の世界自体は理解したと思う」

「社会学者でワイトゲンシュタインを使って研究をしているといふのは珍しいな」

「いや、僕は社会学者ではないよ。僕は農学修士だ」

「えっ？ アキオは科学者なのか？：それは興味深い話だ。いや、むしろ科学者の方がワイトゲンシュタインとは親和性が高いかもしれないな」

私は紙を広げて論考の体系のイメージを描き始めた。

「……ここが思考可能な領域。つまり論理で構成される世界だ。そして……これが「Trans……」

「だ」。Transcendentalだ」

「そうそう、Transcendental……超越論的な概念はここに集まっているとする。思考可能な領域は対応する命題で裁かれる。それが論理的に妥当だということだ。つまり説明すること」

「うんうん……」

「問題はここなんだ」

私は超越論的な世界を指して、それを捌くために超越論的な世界をさらにカテゴリーに分けるといふ私の考えを一通り話した。リチャードは頷きながら黙つて聞いている。

「……というわけだ。確かに膨大な量の記述を必要とするが、こう考えると一部の領域については把握することができるとは思わないか？」

「ううむ、できるように思うな。少なくとも分析することはできる。面白い考え方だ。私も同意するよ。だが私の意見では一つ大きな問題がある」

リチャードは一息ついてから続けた。

「それが何なのかというと、つまりこの手法では本質的なものが明らかになるわけではないということだ。アキオのやろうとしていることはもちろん意味がないわけではない。分析というのは科学者らしいアプローチだ。だがこの手法では分析しているうちに、その

もの自体が雲散霧消してしまふ。タマネギの芯をむいていくうちに、結局何も残らないのに似ている。結局もつとも重要なのは本質の意味だ。意味だよ。それが価値だ」

私たちは夜遅くまで喋りながら痛飲した。夜もすっかり更けた。リチャードが新たなビールを買いに席を立つ。

「アキオ、何が飲みたい？」

「そうだな、正直イギリスのビールは味が濃すぎて苦手なんだ。あまり苦すぎず、味の濃すぎないものがいい」

「OK、僕を信じてくれ」

リチャードはそう言うと、またのっしのっしと体をゆすりながら歩いていった。しばらくすると両手にビールを持って帰ってくる。

「これを試してみろ」

リチャードの差し出したビールは薄い琥珀色で、飲んでみると確かに苦すぎず、味も強すぎない比較的飲みやすいビールだった。

「うん旨いね。なんていうビールなんだ？」

「これはEPAっていうんだ。飲みやすいだろ？」

「ああ、僕の中ではナンバーワン・イングリッシュ・ビアード。ところでリチャードはさつきから同じビールだよな。一体何を飲んでいるんだ？」

「ハイネケンだよ。僕はイギリスのビールは苦手なんだ！」

French Doctor

翌日は朝から勤勉に学校に行った。疲れはピークに達していたが、リチャードとの議論のおかげで滞在が充実しているという実感があつた。昼休み、Fluent speakingのクラスメートでスイス人のラティという女の子が話しかけてきた。彼女はスイスにおいてはフレンチパートに属するため、フランス語訛りの流暢な英語を喋る。なぜか私を呼ぶ時は名前を二回くりかえして呼ぶ。

「アキオアキオ、今週末一緒にケンブリッジに行かない？」

「どうやって行くんだ？ たしかケンブリッジ行きのコーチはグロースターバスステーションから出ていたけれど、片道三時間ぐらしかかるんじゃないかな」

「パーソナルな旅じゃないわ。学校で週末のエクスカージョンが組まれたのよ。貸切バスに乗って学校から行けるの。参加費は二十ポンドよ」

「それは安いな。ケンブリッジは行きたいと思っていたんだ。前向きに考えてみるよ」

ワイトゲンシュタインはケンブリッジ大学を卒業し、その後第一次大戦でオーストリア軍に従軍した。捕虜となり、やがて釈放されるが、その間に書きためたメモをまとめて論理哲学論考を書いた。しかし無名のワイトゲンシュタインの本を出そうという出版社はなく、出版は難航する。しかし彼の才能を認めていたバートランド・ラッセルが前書きを書くという条件で出版が決まったのだった。ラ

ツセルはワイトゲンシユタインの恩人なのである。

しかし書かれた前書きを読んだワイトゲンシユタインは、ラッセルが論考をきちんと理解できていないことに激怒する。ラッセルにさんざん悪態をついた揚句、前書きにもラッセルへの批判を書いた。にもかかわらず、その後ラッセルはワイトゲンシユタインをケンブリッジに呼び戻す運動までしている。博士論文のなかったワイトゲンシユタインであったが、ラッセルの運動のおかげで論理哲学論考を博士論文のかわりするという特例が認められ、彼はケンブリッジ大学トリニティー・コレッジの教員として赴任するのだ。トリニティー・コレッジはケンブリッジ大学の中で最も裕福で最も栄光あるコレッジである。それまでの間、彼は各地を放浪し、庭師や小学校教員として働いた。だがあまりにも完璧主義だった彼は、行動が奇異にみられることが多かった。結局小学校でも生徒への体罰がもとでその職を離れている。

ワイトゲンシユタインはケンブリッジ大学で研究生活に入り、長く務めた。やがてムーアのあとを継いで教授となるが、その講義は少数数の精鋭の生徒を集め、彼らの前で哲学を「実践する」という独特のスタイルであった。しかし彼はあるとき突然に教授の職を辞し、その後アイルランドなどに移り住むが、体調を崩し、オックスフォードにも一時滞在したあと、最後はケンブリッジで逝去した。

最後の言葉は、

「彼らに伝えてください。僕は素晴らしい人生を送りましたと」

彼はいまもケンブリッジの墓地に眠っている。

私は今回のイギリス滞在で、ぜひ彼の足跡を訪ねてみたいと思っていたのだ。

私は昼食をとりて学校を出て、ガーデンズ・アームスという行きつけのレストランに入った。伝統的なイギリス料理を出す、なかなか美味しいので頻繁に足を運んでいた。店のカウンターでステーキ&キドニーパイを頼む。いつもはすいているのだがこの日は珍しく混んでいた。席を見ると顔を見たことがある中年のフランス人が一人で食事をしている。私は彼のところへ行つて相席をしてもいいかと尋ねた。彼は快く、もちろん座ってくれと答えてくれた。

「どこから来たんだ？」

「東京だ。あなたは？」

「パリから来た。ここではメデイカル・イングリッシュのコースにいる」

「すると医者か？」

「ああ、そうだ。君は何の仕事をしているんだ？」

「僕は高校の教師だ。東京の私学で理科を教えている」

「そうか、東京は地震の影響はもうないのか？」

「おかげで東京の被害は小さくて済んだ。だが今一番心配なのは原子力発電所の事故だよ。福島のパラントはメルトダウンを起こしているのではないかと僕は心配している（当時はメルトダウンはしていないという公式発表だった）。相当量の放射性物質が流出しているんじゃないかと不安に思っているんだ」

「それはそうだろう。日本は小さな国だ。放射線の害を免れる地域はないよ」

「僕もそう思う。福島から東京は百キロ以上離れているが、東京にも放射性物質は来ているはずだ」

「僕はチェルノブイリ原発事故のあと現地調査をした医師団の一人だ。百キロメートルなんて無いに等しいよ。チェルノブイリの場合も百キロ以上離れたところで発癌が確認されている」

私は驚いて言った。

「チェルノブイリを調査したのか？ 放射線の専門医か？」

「ああそうだ」

「福島原発事故について率直な見立てを聞かせてくれないか？」

「もちろんだ。僕の考えでは東京にはかなりの量の放射性物質がある。とにかく放射性物質は遠くまで運ばれるんだ。百キロ二百キロなどものの数じゃないよ。チェルノブイリ事故の時、葉物野菜を食べてもいいとされた境界線はどこか知っているか？」

「ヨーロッパの話か？」

「そうだ。事故直後はどこも葉物野菜は食べられなかった。その後長いこと境界線になっていたのはドイツとフランスの国境線だ。ドイツで野菜を食べられるようになったのはずっと後だよ。千キロ以上離れているんだよ。」

「これから日本では何が起これと思う？」

「わからない。しかしチェルノブイリの場合、数年後から発癌が確認され、十年後がピークになった。その後は減少していった」

「食べてはいけないものはあるか？」

「まずは飲料水だ。水の産地には気をつけた方がいい。水道水にも必ず放射性物質が混ざる。それからやはり葉物野菜やワイルドマッシュルームは控えた方がいい。また汚染地域でとれた牛乳は危ない。飲まない方がいい。もう一つ、放射性物質は地形などによって高濃度でたまる場所がある。ホットスポットというんだが、近くにこうした場所がないか、細かく測定することが大事だ」

今では常識的なこうした見立てでも、当時は誰も把握していなかった。そのころの政府やメディアは例の「直ちに人体に健康を及ぼすレベルではございません」という発表を繰り返すばかりだった。

前述したように私のところにはフェイスブックを通じて警告してくれる友人が沢山いた。それゆえ、私は震災以来、関東産の葉物野菜は極力口にしていなかった。牛乳は元々飲まないが、水もフランス産のミネラルウォーターを使うことにした。気をつけるにも限界はある。しかし一年間はこうした生活を続けようと思っていた。彼の話聞いて背筋が寒くなるとともに、自分なりの対処もやっておいてよかったです。

その後帰国した私は、このことを周囲の親しい人間たちには伝えた。しかし彼らの多くは「へえ〜」というばかりでほとんど聞き流していた。両親などは「そんなに長生きしてもしょうがない」となるといいながら、一向に気にする様子もなく、何でもおいしく食べていた。友人の看護師はかなり真面目に聞いてくれた。彼女は食生活にも気を配るようになったらしい。日本でこうした情報が公にメ

ディアで流れるようになったのは十月を過ぎてからだだった。彼らの多くは私が当時同じ内容の警告を発したことを覚えてもいないだろう。

Religion

リチャードと私はフィーリングが合ったので、それから頻繁に会うようになった。彼と私の会話を読んでみると、いかにも私が流暢に英語を話しているように感じられるかもしれない。しかし私は基本的にシンプルな表現しかできない。シンプルな表現を組み合わせて言いたいことを伝えている。これはヨーロッパの留学生たちの会話手法を学んだのである。口から出る言葉は多いが、文法の誤りは相当ある。それでもこのやり方ならば専門的な言葉を使わなくてもかなりの割合で言いたいことが伝わる。

リチャードは本物のインテリだ。彼は相手の英語のレベルではなく、その人間をしっかりと見て人物評価する。だから時々私が表現に困ってもじっと待っている。そして彼もあえてマイナーなアイデアを使わずに分かりやすく話してくれる。相手に伝わらなければ意味がないことをよく分かっているのだ。

「アキオ、日本について聞きたい。日本の伝統的な宗教は仏教ということでもいいのか？」

「仏教と神道だよ。キリスト教と比較する意味で宗教という言葉が正しいかどうかかわからないけれど」

「シントウ？ それはどういう概念だ？」

「神道は日本独自のアミニズムでありシャーマニズムだ。仏教よりも古くから日本に根づいている。仏教が伝来したのはたしかAC五三八年だったと思う。日本の天皇の家系は二千六百年以上続いていると言われている。実際はつきりしているのは千数百年だけだね。天皇という存在は神道の祭祀王なんだ。これは今でもそうだ。実は世界中の王室の中で最も長く、ひとつの家系で続いてきたのが日本の皇室だ。もちろんそのこと自体とても価値のあることだと思う。でも僕は西洋のロイヤルファミリーと日本の皇室との最も大きな違いは祭祀王だということにあると思う」

「なるほど。日本人には仏教徒と神道徒とがいるんだな」

「そうじゃないよ。多くの日本人は仏教徒であり神道徒なんだ。一般の日本人にとって仏教も神道も区別しようという意識はあまりない。神職や僧は当然意識しているけれどね。でもキリスト教とイスラム教のような違いではないんだ。寺の中に神社があることもよくある。教会の中にモスクがあることって考えられないだろう？」

「もちろん、それはとてもじゃないが想像できないね」

「それどころか日本人には宗教という意識もあまりないんだと思う。少なくともキリスト教徒が考える religion とはまったく異なる。仏教も神道も宗教というよりも生活様式・生活儀礼なんだ。宗教儀礼と生活習慣との境界がないんだよ」

「それは我々には分かりにくい。例えばどんなことがあげられるんだ？」

「例えば日本人は食事の前に「いただきます」という挨拶をする。日本人にとっては「おはよう」という挨拶と変わらない習慣だ。でもそれはそもそも自然信仰の儀礼だったと思う。食べるということは何かの命をもらうことだ。その命に対して感謝の言葉を述べる言葉なんだ」

「それが残っているのか。よい意味でプリミティブな感じもするな」

「プリミティブだよ、そもそもその意味はね。でもいまは習慣として行われているんだ。いまの「いただきます」には、「さあ食べるぞ」とか「うまそうだな」ぐらいの意味しかないよ。だからキリスト教徒が食事の前に述べる神への感謝とは感覚が違う。あれは宗教儀礼だという自覚があるだろ？」

「当然だ。神に感謝の言葉を捧げているんだから」

「神という概念が違うんだよ。日本は多神教だ。日本の神々は山や川や岩や木に宿るんだ。一神教の強い神とは根本的に違う。日本の神は神というより精霊だ」

「それはまさにアニミズムの世界だね。ガリアの森の神々を連想させる」

「カエサル以前のガリアだね。しかし日本人は自然の大きさと己の小ささを対比させて偉大なものにひれ伏すとか、自分の小ささを理解する（身のほどを知る）という精神性を育てた。自然は常に恐れるべき存在だ。対して西欧では自然は征服しなくてはいけない相手になったと聞く」

「興味深い話だ。たしかに、例えば北欧の森には悪霊が住むと考えられていた。考え方の違いが人間の気質や神との関わり方に影響しているのかもしれない」

「君たち西洋人は神と契約し、神に守ってもらうだろ？僕たちはそういう強い神を持たない。日本の神々は人間に近いんだ。だから失敗やいたずらもするんだよ。だから君たちは強い神を持ってラッキーだと僕は思うよ」

するとリチャードは唸るような声を出していった。

「ウーン：アキオ、クリスチャンであるということはそんなに簡単なことじゃないんだよ。これは試練の道なんだ」

「それはそうだろう。だが今言っているのは双方の神の持つ力の比較だ。多神教の国の人間である僕が言いたいのは、一神教の強い神はときに大きな心の支えになるということだ。特に試練の時に」

「いや、そんな簡単なことじゃないんだよ」

「そうか、それは僕にはわからないところだ」

ここはリチャードにこだわりがあるように思えたので、私は話題を横滑りさせた。

「一方で強い神が存在しているために一神教は原理主義の土壤になることも確かだ。僕はバチカンで神にひれ伏すように祈る人々を沢山見た。サンジョバンニ・イン・ラテラーノでも同じような光景を目にした。日本の寺や神社でも熱心に祈る人の姿はあるが、さすがにあそこまでの姿は見えない。もちろんムスリムにはいまだに殉教者が多い。一神教は信仰がファンティックになりやすい」

「それはそうだ。だから力がどこかに集中しやすしいし、イスラム教もキリスト教もユダヤ教も、排他的原理主義が暴力をふるってきた歴史がある。特に中世のキリスト教はひどかった。イスラムにはジ・ハードという概念が教義に含まれている。つまりイスラム教は条件を満たせば暴力を容認するということだ」

「リチャード、同じ一神教でもそれぞれ違いがある。僕はサウジの連中に日本の宗教の話をしたら、おまえの宗教は邪宗だと言われたことがある。多神教は悪魔の宗教だと言うんだ。他者の世界を理解できないほどその連中はアッラーに心酔しているんだよ。なるほど、こうやって宗教の摩擦は起きるんだなって思ったよ。その点カトリックのうまくできているところは神父が結婚しないところだ。煩惱を遠ざけ高潔を保つために結婚しないんだと思われがちだが、実は子供を作らないように、つまり権力の世襲を防ぐためだということを読んだことがある。そのくせ実態としては女や隠し子がいるケースもあるようだが、そういう曖昧さも宗教には必要なんだと僕は思う」

そこにパブのスタッフが通りかかって、顔見知りのリチャードに話しかけた。

「おうリチャードさん、楽しそうだね！ 何の話をしてるんだい？」

リチャードが答える。

「知りたいか？ 私たちはいま神様について話していたんだよ」するとスタッフは、いかにも関心がなさそうに、「ナイス…」と

言った。それを聞いたリチャードは私の顔を見ながら「わあっはっはっ！」と大声で笑った。リチャード自身は敬虔な信者だが、いまのヨーロッパ人のかんりの割合の人々は信仰にまったく関心が無い。リチャードはそのことをよく分かっている。

「リチャード、僕は古代ローマ史に取り組んでいたことがある。知っての通り古代ローマはそもそも多神教社会だった。しかし一神教がとってかわった。多神教は一神教に飲みこまれたんだ。一神教は多神教よりもパワーゲームにおいても強いんだ」

イエス・キリストが布教を開始したのはローマ帝国二代皇帝ティベリウスの治世においてである。イエスはゴルゴダの丘で処刑されたが、その後復活し、それを目の当たりにした弟子たちによって勢力が拡大する。しかし当初は小勢力で、いわば変わり者の集まりでしかなかった。それがカリグラ、クラウディウスの時代から、徐々に社会に影響を及ぼし始める。その後ローマ帝国は一神教を邪教として抑圧した。コロッセオで殉教したキリスト教徒たちの話は有名な。

一方ユダヤ教もローマ帝国に抵抗した。だがユダヤ教徒は激しやすく、ときどき暴発した。そのたびに徹底的に弾圧された。一方でキリスト教徒は表立った暴発はしなかった。弾圧を受け、信徒が処刑されても組織だった蜂起はあまりしていない。しかし彼らは水面下で徐々に勢力を伸ばした。気づいたときにはローマはキリスト教に飲みこまれていた。ローマには多神教の時代、多神教とキリスト教が共存した時代、そしてキリスト教が栄えるとともに多神教が消

え去った時代があるのだ。

「アキオ、ユダヤ教の起源を知っているか？ 僕はその分野は専門ではないけれど、興味深いことにユダヤ教も最初は多神教だったんだ。紆余曲折あって一神教になっていったんだ。一神教が強いことは確かにそうだろう。だが問題の本質をとらえるためには、一神教・多神教という対立項でとらえない方がいいのではないか。日本にだってあちこちにフアナティックな信者はいる筈だ」

「いや、リチャード、神道や仏教ではそうそういないと思うよ。政治が絡めば話は別だが」

「いや、だから一神教とか多神教の話ではないよ。僕は「信じるという行為」全般を捉えた方がいいのではないかと言いたいんだ。イデオロギーでもシステムでも何でもいい」

リチャードは鋭い指摘をした。例えば社会主義はシステムである。しかしそれを国家の物語としてそれを信じる人々がソビエト連邦には沢山いた。システムは物象化するとある意味で宗教になる。民主主義も同様だ。日本でも民主主義を「近代の獲得した最大の価値」として無批判に受け入れるインテリは少なくない。だがシステムもイデオロギーもその人にとつての「価値」になったとき、それは容易に「宗教」になる。そしてそうなる崩れない。リチャードはそのことを言っているのだ。

「それはリチャードの言うとおりで。そしてその人の信仰を外側から崩すことはできない。なぜならそれはここにがあるからだ」

そう言つて私は、ノートに描いた概念図の「Transcendental」の字

を指さした。論理哲学論考において価値は思考不可能な世界に属する。つまり価値は論考でいうところの「世界」にも「論理空間」にも存在せず、経験主体の生そのものに根ざしている。人によって価値観が異なるというのは哲学的にも正しいのである。そこが原理主義の難しさの根源だ。

「誰にも信じているものはある。私にとつてはキリスト教であり、アキオにとつてはサムライの道徳かもしれない。問題は自分に信じているものがあるように、他者にも信じているものがあることを理解できるかどうかだ。中身を互いに完全に理解することはできない。でもこうやつて対話をすれば、相手にも自分と同様にゆずれない価値観があるということに気づくことはできる。気づかなくてはダメだ。自分の価値が一番大事なうちはダメだということだ。それはキリスト教の本来持つ寛容でもあるし、人間社会を安定させるためのインテリジェンスの本質でもあるんだよ」

「日本ではクレメンティアが欠けている男は男として認められない。「小さい奴」とか「心が狭い奴」というんだ。自分のことしか考えない奴が一番嫌われるんだよ」

「わっはっは！ クレメンティアア！ そう、ラテン語でいえばクレメンティアだ！ アキオ、面白い。さすがサムライの子孫だ」

リチャードはいつもサムライを「サミュライ」と発音する。私は彼がそれを何度も繰り返すのがおかしかった。

Cambridge

日本を離れて時間がたつと、多くの人は日本食に飢える。特にこはイギリスだ。旨いものがないという不名誉なレッテルを貼られたお国柄である。私の場合は寮生活で、食事は自分で作るの、ホーム・ステイをしている学生たちよりはるかにぶんましだった。正直言って米が食えないのはつらい。特に私にとって最もつらいのはパンが続くことだ。そこで助けられるのがパスタだ。イギリスのパンはドイツ人たちが評しているように紙のように軽くておいしい。その点パスタはテクスチュアが米飯に近い。私は今回もパスタにとっても助けられた。

私は日本から持てるだけの日本食を持ってきた。うどんや出汁、レトルトの味噌汁、干し納豆、お茶漬けに吸い物の元、乾燥梅干しなど。刺激的だが不安定な海外生活の中で、日本の味を口にできるときというのはホッとできる瞬間なのである。結構な量の日本食を持ってきたつもりだったが、それを滞在期間で配分すると、梅干しは二日に一粒、味噌汁は週に一杯、うどんは滞在中を通して二回だけと、意外に少ない。結局持ちこめる量には限界がある。そうなるとうイギリスの食べ物を積極的に楽しんだ方がよいと考える方が前向きというものだ。それでもどうしても米が食いたくなると中華料理やタイ料理のレストランに行った。

ある日曜日、私はルバーブを煮ていた。イギリスではルバーブはごく一般的な食品で、テスコやマークス&スペンサーなどのスーパ

ーマーケットでもごく普通に売っている。茎の部分だけが束になっているので葉がどういう形をしているのかは分からない。茎の部分だけが50〜60cmほどに切りそろえられた一見露のようなのだが、直径が3cmほどあるので露よりもずっと太くてしつかりとしている。表皮が赤いのが特徴で、根元の部分が最も濃く鮮やかな赤を呈し、上に行くに従って赤から緑に変わる。

ルバーブは砂糖とともに煮て使う。するとジャムというか、コンポートのようなものになる。ルバーブは「ものすごく」酸っぱいで驚くほど大量の砂糖を使う。私は一キロのルバーブに対して六百グラムのブラウンシュガーを加えたが、これでも甘すぎるなどということはない。

ルバーブはよく洗ってから拍子木型にぎくぎくと切り、白いホウロウ鍋に入れる。上から砂糖を大量に投入し、しばらく置いておく。そして汁がじわっと出てきたら弱火にかける。このとき生姜やクローブなどのスパイスを入れる人もいるようだ。しばらくすると美しい赤に染まった果汁が浸み出してくる。ルバーブはすぐに柔らかくなるが、私は三十分ほど煮てから火を止めた。冷めればコンポートの完成である。

野菜のような見た目のルバーブだが、味はフルーツとしか言いようがなく、例えるなら酸味の強い紅玉で作ったジャムのような味だ。飽きのこない品のいい甘酸っぱさがあり、そのまま食べてもいよっとしたデザートになるし、ケーキやヨーグルトに添えてもいい。そのままパンにのせて食べるのも代表的な食べ方だ。私はルバ

ープのコンポートをタッパーに入れて冷たく保存し、朝食や小腹が減った時にパンにのせるなどしてしばらくの間、毎日のようにこの味を楽しんだ。

ラテイからケンブリッジの話があつて、一も二もなく私は参加を申し込んだ。ウイトゲンシュタインが研究生活を送ったコレッジが見られるまたとないチャンスだと思つたし、あわよくば彼の眠る墓地に足を運んで墓参りをしたいと思つたのだ。

ケンブリッジまではオックスフォードから貸切バスで約三時間半、結構な長旅だ。おもにハイウェイを走つて行くが、イギリス南部の典型的な丘陵地帯を通つて行く。

イギリスのこうした景色は確かに単調だ。しかし草原の淡い緑のゆるやかな曲線が見渡す限り広がり、頭上に青く広大な空の開けているさまは、日本ではけつして見る事ができない。時々彼方に巨大な入道雲が湧きあがり、その暗い芯のあたりが激しく光つたかと思えば、大地との間を稲妻がつなぐ凄まじい落雷が見られる。そうかと思えば急に降りだした雨が上がり、あざやかな七色に発色した虹が、大地の東西をまたいで架かるのである。

私が集合場所になつていた学校のグラスに着いたとき、ラテイたちはすでにそこにいた。

「アキオアキオ、おはよう。ケンブリッジに行つたら一緒に回るわよ」

「OK。それはいいけれどちょっと見たいところがあるんだ」

「どこを見たいの？」

「トリニティーコレッジとキングス・コレッジをみて、できれば町中をゆっくりと歩いてみたい。それから少し離れているが、行きたい墓地がある」

「墓地？ どうして墓地なんかにいきたいのよ」

「僕が勉強している哲学者の墓があるんだ」

「ああ、なるほどね。それは一人で行きなさいよ。私は墓地には行きたくないわ。いいわ、最初にコレッジを見て、それからアキオは墓地、私はショッピンクをするわ」

バスはオックスフォードを出ると、休憩もとらずにハイウェイを走り続けた。よく晴れた日で、イングランド南部の丘陵を横目に、途中で林望氏の書いていたコンプリート・アングラース・ホテルらしき建物の付近を通つていった。

ケンブリッジに到着したのは午前十一時頃だった。バスを降りると一行はケム川にかかる数学橋の脇を通り、マーケットの脇のインフォメーションセンターに向かった。

ケンブリッジもまた美しい町だ。オックスフォードより開けて明るい印象の街である。コレッジも古いことは共通しているが、ケンブリッジの方が校舎ははるかに大きく、大学の庭も道の幅も広い。

オックスフォードでは一二〇〇年代初頭から大学が創設されたが、大学と街の間で争いが絶えず、大学の環境は荒廃した。多くの学者がケンブリッジに移動し、新たに大学を作つたのである。その際、富裕な貴族たちから資金が集まり、その潤沢な資金を使って大

大きく壮麗な校舎が建てられた。そのためケンブリッジのキャンパスはオックスフォードよりも広大なのである。その分人間も多い。オックスフォードのコレッジはクライストチャーチを除くとどれも小さく、そしてより古く、何か流れた時間が凝縮した感じがする。中世そのままの世界はオックスフォードにある。

私たちはまずキングス・コレッジへ向かった。ここはケンブリッジ大学の中でも多くの人々が訪れる筆頭のコレッジとも言えるべき存在で、校舎はとりわけ大きく、荘厳華麗である。教会ホールは様々な彫刻や絵画、ステンドグラスで彩られ、かしまった案内係が観光客のふるまいに睨みを利かせている。庭も広大だが手入れが行き届き、広い芝のフィールドにクリークが流れ、小さな森が隣接している。

歩いているうちに私はトイレに行きたくなり、コンラッドと一緒に案内係に聞いた。すると案内係は鼻にかかった声で答えた。

「ありません。ここにトイレはありません」

コンラッドがそんなわけないだろうとブツブツ言っていた。私は彼に言っただけでよかった。

「イギリス人の特に高尚な連中は、きつとトイレに行くなんてお下品な行為はしないんだろ」

「なんだって？ やつら礼儀もわきまえずにそのあたりにまき散らすということか？」

するとラティが

「品の悪い話はやめてもらえるかしら？ 聞きたくもないわ！」

と人差し指を立てて私たちに説教した。

時刻はちょうど昼時、私たちは日本食レストラン「wagamama」に入った。焼きそばやラーメン、トンカツなどがメニューに載っている。私はオックスフォードの日本食レストランでは食べることにできない「海鮮味噌ラーメン」を注文した。久々に本格的な日本食を口にできると楽しみだった。しかし出てきた代物は残念ながら中華の麺を代用しており、コシが中途半端、出汁はあまりよく出でず、うっすらと魚介の味が生きているだけで、あとは醤油と味噌で味をつけてあるらしい偽物。塩味も極まっておらず、どうも生ぬるい味である。

引率役をしている学校スタッフの二人のイギリス人は、箸の持ち方だとか日本食の味についていろいろ蘊蓄を語りながら、時々私に相槌を求める。彼らも本物の日本食を知らないで日本食を語っている。近年海外にも「日本食」と銘うたれたレストランが沢山できた。しかし実態はシェフが中国人だったり、インド人だったりする。Wagamamaはイギリスのチェーン店だ。あつちこつちで日本食に対する誤解を広めている。

余談になるが、近年の寿司ブームは大変なもので、イギリスではテスコなどのスーパーマーケットですら出来合いの寿司がパックで売られている。内容はエビやサーモン、ツナなどがメインで、握りと巻物が詰め合わせになっている。肝心の味はどうかというと、米がパラパラの長粒種なので全く話にならない。まとまりにくい米を

無理にまとめるために相当固く握られている。ネタも不味い。見た目は確かに寿司らしきもののだが、どうも寿司を食べているという感覚にはならない。ちなみに海外で安くておいしかったのはアムステルダム空港の中にある寿司カウンターだ。小さな店だが日本人職人が握っている。

話を戻そう。Wagamamaでの昼食のあと、私たちはいよいよトリニティー・コレッジの前にやって来た。胸が躍る。ワイトゲンシユタインは一体どんなところで研究生活を送り、どんなところで講義をしたのだろうか。いよいよそこに足を踏み入れる瞬間が近づいている。

校門の前に出ていくと、張り紙があり、そこにはこう書かれています。

白い紙の上に……。

「本日休み」

「！」

何ということだ！ はるばるここまでやってきたというのに！

しかも今日は土曜日、観光客がお金を落としていく日じゃないか！ 私はあまりのことに本当にがっかりした。だが仕方がない。一瞬、ここに一泊し明日帰るということもできるのではないか、明日の午

後ケンブリッジを出ればロンドンのキングスクロス・ヴィクトリア経由で夜にはオックスフォードに帰ることができる、とも思ったが、今はバスツアーのさなかだ。中座してというわけにも行かないだろう。第一この日の街の混みようを見れば宿もまず見つからないだろう。結局またの機会に来るよりほかはない。

このあと私は友人たちから離れ、一人で歩くことにした。残された時間は二時間ほど。この中でいかにワイトゲンシユタインの足跡をたどるか。私は彼の墓地に行くことも考えたが、限られた時間では墓地まで行って帰ってくるだけになってしまう。それだったら彼が過ごしたこの街を、時間の許す限り歩いてみようと思った。ここはイギリス、街の様子はワイトゲンシユタインが生きていたところとそれほど大きく変わってはいないはずだ。私は街の大通りから小さな路地裏の道、ケム川沿いに建ち並ぶ錚々たるコレッジの威容、路地マーケットが開かれている広場などを歩きながら、八十年前、天才哲学者も間違いなくこの景色を見、古い自転車をこいで路地へ入って行く姿を思い、彼も踏んだはずの石畳を私も踏みしめてすごした。

Cheese And Wine Festival

OECのアクティビティは未成年（十七歳未満対象）のプログラムと、成人（十八歳以上）のプログラムに分かれていたが、時にはアダルト（二十三歳以上）向けのプログラムが準備された。その

中の一つがチーズ・アンド・ワイン・フェスティバルと銘うたれた企画だった。

何のことはない。OECの校舎でイギリス産のローカルチーズと各国のワインを楽しむというイベントである。しかしローカルチーズの中には珍しいものや季節限定のチーズもあってなかなか面白い。

こういう単発の企画はなぜか生徒全員に周知されない。どこからともなく「こんなイベントがある」という話が、風のうわさとして聞こえてくる。そしてたまたま噂でイベントを知った生徒が集まらず、実際にそれは行われる。噂を耳にしなかった生徒は当然知らずじまいになることだ。日本ではこういうやり方だと色々問題が起きそう。要するに「同じ授業料なのに公平性を欠く」などと、鬼の首でも取ったように言うやつが絶対に出てくるのだ。だがここでは誰もそんなことは言わない。そういう小さいことをネチネチ言うやつは「陰険」「子供っぽい」とみなされるし、たかだかチーズやワインを食べ損ねるだけの話で、ぐちぐち文句を言うほどのことではないからだ。今回自分にはあたらなくても、次はいい巡り合わせが来るかもしれない。それでいいと思ってるのだろう。

しかしこういうことで文句を言うのは日本人と中国人だ。中国人というのは自分が得をすることに命がけになる。これは「良い」「悪い」の問題ではなく文化の問題だ。例えば中国では、いい父親とは自分の家族に沢山の利益を持ちかえる父親という文化だ。そういう理屈だから、路上で喧嘩をしていたり、物の売買で怒鳴り合っ

たりというのでも説明がつく。しかし結果、公共性が低下する。当然こういうことにも文句を言う。ときには大声で要求しないと欲しいものも手に入らない社会なのだ。

一方、日本人は指摘をすること自体に命がけになる。小さなことにも目くじらを立ててヒステリックに指摘するのは「指摘すること自体」が死活的に重要で、そういう連中は、本当はチーズもワインもどうでもいいのだ。残念ながら昨今の日本人は、批判好きで狭量で小粒な民族になってしまった。昨今の日本人は物事の大きさを極めるバランスが崩れている。と、まあずいぶん悪口を並べ立てたが、海外にいて感じた正直な気持ちであって、これは今の日本人のダメなところ。だから私は古き良き時代の日本人に懐かしさを覚えたいと思う。

さて、火曜日の午後七時、私たちは集合場所と「噂」になっていたOECの中庭にいた。六時半の段階では誰もいなかったが、十分ほど前から三々五々集まってくる。七時を過ぎると四々五十人が中庭のテーブルに座っていた。私のテーブルにはオランダ人のデボラ、韓国人のキューサンとキヨンホン、それにユミとアイリという二人の日本人がいた。私はキューサンと話をしていた。キューサンは本当に流暢できれいな英語を話す。アクセントも韓国訛りが少ない。一方もう一人の韓国人キヨンホンは英会話からはつきしダメだが、日本語が少しわかる。そこでユミとアイリがキヨンホンを相手に日本語で話し始めた。これはマナー違反だ。デボラは日本語が分

からないので一人になってしまった。それでもデボラは時々アイリに英語で話しかける。アイリは一言だけデボラに返すが、すぐに彼女に背を向けて日本語で話し始めてしまう。実のところデボラとアイリはクラスメイトだ。しかし会話力は月と鼈である。デボラはものすごく早口で流暢だ。アイリにはデボラと一対一で会話するのに耐えるだけの自信がないのだろう。「会話が嫌い」という気持ちがあるから、失礼な態度になってしまっている。実は日本人ときどき見られるのがこういうマナー違反なのである（と言ったが、男はどうなのか分からない。何せOECでは日本人の男性とは一人も知り合わなかった。十人ぐらいいた日本人の中で男は私一人だったのだ。理由はよく分からない）。

「アイリちゃん、せっかくクラスメイトが揃ったんだから英語で話そうよ」

私はあえて彼女にそう言った。私は普段日本人に英語で話しかけることはしない。言うまでもなく日本人同士なら日本語の方が細かいニュアンスが正確に伝わる。相手の考えていることや気持ちも正確に把握できるし、第一英語で話すなんて失礼にあたる。これはオックスフォード大学でビジネスを教えているT・スズキ先生からも学んだことだ。

しかし逆に日本語が分からない人が一人でもいるときは、日本人の割合が多かったとしても私は必ず英語で話すようにしている。この場合デボラがそこにいるわけで、私まで日本語で話すと余計にデボラを孤立させてしまう。そのぐらいのことはアイリにも分かって

ほしかった。しかしアイリは曖昧な返事をして、結局ユミたちと一緒にいた。それでもアイリはOECにいる日本人の女性の中では最もモテイベーションが高く、当時最も会話力のある子だったのだ。それだけ一般の日本人にとって英語を話せるようになることは大変なことなのである。何せ、みな英語の専門家ではなく、あくまで一般の人たちなのだから。

チーズ・アンド・ワイン・フェスティバルは簡単に言えばワインのテイステイング会である。とはいえまったく堅苦しいものではなく、ワイワイ騒ぎながらクイズ形式で進められる。まず、各テーブルにチーズのプレートとクラッカーが配られる。また各自のグラスにテイステイングするワインが注がれてゆく。ワインの産地・特徴を当てるのがメインのクイズだ。クイズには2〜6人程度のグループをつくって対抗戦をする。私はデボラのところに行き、一緒に組もうと言った。

クイズの問題が配られる。A〜Eの五種類のワインの味の特徴が書いてある。例えばあるワインのテイストとして「ナッツ・枯葉・燻製香・ドライフルーツ」などがある。こうしたA〜Eの説明に、これから順次注がれるワインがどれに該当するかを当てる。さらにその生産国も当てる。

チーズは早い話ワインのつまみである。どれもイギリス産のチーズで、ステイルトン、レッドチェダー、ブリー系という定番に加え、サマーベリーというローカルな非常に珍しいチーズが並んだ。

普段は英語を教えているOECの女性教師三人が司会進行役だ。第一のワインがグラスに注がれる。

「さあみなさん、準備はいいかしら？ ようこそチーズ・アンド・ワイン・フェスティバルへ。これからワインが5種類出てきます。今注がれたワインからしっかりと味わって、シートに書いてあるAからEのワインの特徴から、どれがどのワインなのか当ててください！」

イギリスではボルドーのワインが有名だし、歴史も古い。一一五四年にアキテーヌ女公エリアノールはイングランドのヘンリー四世と結婚した。ヘンリー四世は後にイングランド王となったため、ボルドーもまたイングランドの支配下に入ることとなった。それを契機として、イギリス人たちもボルドーのワインをたくさん飲むようになった。もちろん多くのイギリス人が日常的によく飲むのはビールだ。しかしワインの愛好家も少なくなく、少し洒落たレストランに入ればワイングラスを傾けているカップルは少なくないし、マーケットにも売られているところを見ると家庭で楽しんでいる人も結構いるのであろうと想像される。

デボラが言った。

「アキオ、このワインはどう？」

「おいしいね。でもこの味をどう例えればいいのかはさっぱりわからないよ」

「イエス、私も専門的な知識はぜんぜんないのよ。日本人はワインはよく飲むの？」

「人によると思う。僕の場合は月に三〜四本飲むんじゃないかな。でも僕にとっては美味いか不味いかだけが大事で、専門的な話はぜんぜん分らない。産地の傾向だけはなんとなくわかると思う」

「私もまったく同じよ。私も飲んで美味しいか不味いかだけで。でもこのワインはとりえずなんだかシトラスっぽい感じがするよう気がする」

「そうかな……僕にはよく分からないけれど、じゃあこのワインはBのスペイン産かな？」

こんな調子でテイステイングをしていく。結果、私たちのチームは三位だった。ワインフェスティバル自体はどうということもない行事だった。しかし何か日本人たちの姿振る舞いを見て、何とも言えず切ない気分になった宵であった。

Bath

バースはオックスフォードから南西に位置し、コッツウォルズのはずれにも当たる古い町である。そもそもイギリスがブリタニアと呼ばれていた古代ローマ時代に建設された都市で、その遺跡が今もバースのアイデンティティーである。古代ローマの代表的インフラといえば、街道、円形劇場、馬車競技場、それに公共浴場などが挙げられるが、バースとは浴場という意味なのだ。ここに週末のエクスカージョンが組まれた。

リチャードとは相変わらずヴィクトリアでときどき会って話していた。リチャードは私にとってはオックスフォードと一緒に飲んでいて一番楽しい相手になっていた。オックスフォード大学の学者と一対一で飲みながら話ができる関係になれたのは、本当に幸運だったと思う。この日もリチャードと会う約束をしていた。

私は毎日からリサーチをとる作業と学校の授業を受けたあと、家に帰って一定時間勉強することを日課としていた。これは毎日みっちり続けた。勉強の前か後に徒歩十五分ほどのところにあるスーパーマーケット「マークス・アンド・スペンサー」へいき、好きな食材を買う。これはその一日唯一の楽しみだ。買った食材を抱えて家に帰り、夕食を作り、それを食べてからヴィクトリアへ向かう。イギリスでの私の生活は毎日忙しかったが、調査・勉強・余暇ともかなり充実していた。テレビもない生活だが、意外と忙しいのだ。

この日は中華材料店でボン酢が手に入ったので、イギリスでは安価な牛肉とタマネギを買って牛肉のタタキを作り、大型のマッシュルーム（直径が十数センチあり、香りや味が濃い）とアンチョビ、それにパルメジャーノ・レッズジャーノと生クリームでパスタを作った。パスタはすべてイタリア人やスペイン人に教えてもらったレシピである。共同キッチンには自然と留学生でにぎわう。多国籍の友達でワイワイと騒ぎながら夕食を作るのも楽しいものだ。スペイン人の作ってくれたサングリアやブルーチーズのパスタ、ブルスケッタなど、本物はこうも旨いものかと思う。

私は食事を済ませてからヴィクトリアへ向かった。いつも通りリ

チャードは先にテラスに座っており、彼は私に気づくと手を振った。

「ここだ、アキオ、よく来た」

「リチャード、遅くなってすまない」

「いや、まだ約束の一分前だ。さすがは日本人だな。日本の時間の文化を感じるよ。ちなみに日本の電車は正確にタイムテーブル通りに走るんだろ？ 一分の遅れでもお詫びの車内放送があると聞いたが本当か？」

「ああ本当だ。イギリスの電車は十分遅れでもオン・タイムと表示されるが、僕らの感覚からすれば完全にデイレイと表示されるべきだよ」

「そう言うな。昔に比べればあれでも良くなったんだ。それよりアキオ、いま日本とアメリカは基地の問題で揉めているみたいだな」

「ああ、アメリカとの約束不履行で、ホワイトハウスは日本に不信感を持っている。ただ、そもそもこの基地問題は複雑なんだ」

「アメリカは世界中に基地を持っているからな。世界中の女と偽装結婚している」

「ああ、日本もアメリカに占領されて、その時以来基地もそのままなんだ。ある意味日本は今でもアメリカの植民地だよ。当然基地を抱える地元の間は反発する」

「そうだろうな。ああいう国が力を持っていることが問題なんだ」

「だが中国よりはマシだよ。アメリカが中国とのパワーゲームで敗れたら地政学的に日本はかなり危ないことになると思う」

「アメリカはまだ分かりやすいからな」

「しかし日本の外交は本当に下手だ。これは最近始まった話じゃないんだけど、民主党が政権をとってからは本当にどうしようもない。リチャード、イギリスはとても外交が上手いと思う。歴史を振り返ってみればそれがよく分かる」

「ああ、イギリスの外交はそんなに悪くない」

「日本は外交の歴史が浅いんだ。百五十年前まで、貿易を基本的にしなかった。isolation・・・」

「National isolation policyだろ・・・」

「そうだ。〈鎖国政策〉をしていたんだ。これはとてもいい判断だったとおもうけれど、一方で日本はこの間、内政にしか目を向けなかった。同じ島国でもイギリスはヨーロッパ諸国との長い外交の歴史がある。それはもはや文化のようなものだ。日本は鎖国をやめてから数十年という短い期間でヨーロッパの産業やシステムを取り入れた。しかし目に見える技術や、政治や法律のシステムは真似できても、外交のスキルはそう簡単にはいかない」

「ああ、ヨーロッパ諸国の歴史は干渉の歴史だ。しかし特にイギリスはヨーロッパの中でもその分野では長けていると思う。我々の敵フランスとの長い歴史があるしね」

「日本はイギリスの外交のスキルを学んだほうがいい。リチャード、率直に聞くが、イギリスの外交戦略の核となる思想は何なんだ？」

「ああ、それはな、ひとことで言うならばプラグマティズムさ。少

し極端だが、外交は正しく筋を通す必要はない。いかにうまく利益を誘導するかということだ。外交ではうまく勝つことだけが唯一の教義なんだ」

翌日の朝、バースに向かうバスに私は乗っていた。隣の席にはキオンホンが座っている。キオンホンは同じクラスだったが、非常に面白い韓国人だ。彼の英語力はものすごく偏っている。文法や語彙力はかなりのものだが、それ以上にリーディングスキルがとても高い。ものすごいスピードで文章を正確に読むことができる。しかしリスニングとスピーキングは驚くほどできない。教師に何か質問されてもよく頓珍漢なことを返している。おもしろい男だ。韓国の受験戦争は日本の比ではない。その熾烈さを体現したような男だった。私たちはとりとめのない話をしながら二時間ほどバスに揺られた。

バースは古代ローマ帝国の覇権が海を越えてブリタニアに及んでから建設された大規模な街である。温泉が湧くのでそれを利用した公共浴場が遺跡として残っており、いまやこの町最大の観光施設となっている。また現代版公共浴場とも言うべきスパもあるが、とても高いので庶民にはなかなか手が届かない。

ところで浴場遺跡であるが、面白いことにそのテイストはまさに古代ローマ帝国の遺跡そのものである。想像していただけるだろうか、かつてフォロ・ロマーノやパラティーノの丘で目にした数々の遺跡と同じような風景を、よもやイギリスで見ることになろうと

は、私にとつては思いもよらないことだったのである。シンプルで素朴なイングリッシュ・テイストの王道をゆくバースの街の中に、遺跡といえイギリス式とは似ても似つかぬ派手な装飾の施されたローマ建築が存在しているさまは、どうもまったく不思議なものである。

ローマ帝国はガリアを征服したあと、ドーバー海峡を渡った。当時のイギリスには先住民がいたが、ローマにとつては海越えの遠征なので、それまでの地続きの土地での陸戦のようにはいかない。ローマ軍は時間をかけてゆっくりと北上した。ロンドンには南部にあるため、比較的早い時期に作られた街で、当時はロンドンウムとよばれた。ローマ自体がテベレ川の川畔にあるように、古代ローマの都市は川の脇にあるものが多いが、ロンドンウムもまたテムズ川の河口近くに建設された。

ゆっくりと北上するローマ軍に先住民族は激しく抵抗する。これには世に聞こえたローマ重装歩兵軍団も苦戦したようだ。ローマは北上した北限ラインにイギリスを東西にまたぐような長城を築いて、征服の進捗を後退させぬための防壁とした。五賢帝の一人、ハドリアヌスが造らせたハドリアヌスの長城をはじめ、数本が今も残っている。

私たちはバースに着くとさっそく公共浴場の遺跡に向かった。現存する大浴場や一部の神殿の跡など、実際の遺構をとりこんだ一種の博物館というべきもので、音声ガイドを借りて回ることができ。これはなかなか充実した施設だ。本物の遺跡を使っていると

ろなど、ちょうどローマのカピトリウム博物館のようである。カピトリウム博物館はフォロロマーノにそびえるユピテル神殿のあったカピトリウムの丘の頂きに位置し、中腹には公文書館があった。その遺構がそのまま用いられている。

さて、肝心のバースの公衆浴場はかなり大規模で、浴槽は25メートルほどの大きさがある。今も温泉が湧いているが、水が汚れているので触れないでくれと書いてある。私はこっそりと流れ込みに手を入れてみたが今でも少し温かい。30℃くらいではないだろうか。

浴槽の周りにはローマ人の装束を着たスタッフが腰かけ、雰囲気を出そうとしている。しかし見るからに顔がイギリス人なのはどうにも不似合いである。

私は浴場をはじめ、温泉を引いた水路や下水道の跡、それに付随する娯楽施設の跡や隣接する建築物の跡などをイヤホンガイドの説明を聞きながら回った。音声ガイドは丁寧なので、全て聞いているとかなりの時間がかかってしまう。私は特に面白そうな場所だけ選んで見て回ったが、それでも一時間半ほどのコースになった。

博物館を出ると何人かの留学生たちと街を歩いて回った。起伏の多い街で歩き回るのが大変だが、坂を上った小高い場所までだと古い町並みが見渡せる。丘の上から見下ろすと、バースは実に味のある美しい街だった。バースアビーを始めとする有名な観光地もサッと見てきた。

昼食時になった。ほとんどの留学生たちはお金がないからといって、サンドイッチを買いたいと言い出した。ここがづらいところだ。

彼らの多くは学生でお金がない。しかし私はまがいなりに働いているので、一生に一度しか来ないかもしれない土地なのだし、後学のためにも土地ならでわのものを口にしたい。だが彼らと一緒にいる限り、なかなかレストランに入る機会がないのだ。彼らはハムやチーズを挟んだいわゆるブラウマンズ・ランチのようなものを買った。ブラウマンズ・ランチとは「農民の昼食」という意味で、野良仕事などに持っていく粗末なサンドイッチのことだ。私はテイク・アウトで美味しいサンドイッチを食べた試しがないので、せめてパイでも買おうと思った。パイ専門店に入ってシートパイを買い、さらに全英で金賞をとったというコーニッシュパステイの専門店で購入した。

川沿いにきれいな庭園がある。地元の間人はタダで入れるが、観光客は一ポンド払わなくてはならない。まあせっかくなら来たのだからということで私たちはそれぞれに買った昼食を持ってこの庭園に入り、芝生に座って食事をした。

美しいイングリッシュガーデンの中にある、あたたかい陽だまりの中で、私に残されたイギリスでの時間も残りが少なくなってきたことを考えていた。私は予想のとおり脂っぽいミートパイを頬張りながら、日本で待っている現実の生活を思い、今ここにいるということがいかに贅沢な時間を過しているか、と心底思った。

London

研究調査は終盤を迎えていた。私は調査用紙を集めながら授業を受け、午後は調査を通して顔見知りになった留学生たちと話をすることが多かった。誰もが声をそろえていうのは、アンケートは優しい英語で書かれているので分かりやすいが、考えれば考えるほど内容が難しいということだった。リサーチに載せた文は倫理に関するものだ。例えばこういうものがある。

To be loyal to your superior. For example, you should always have respect for your master, and you should serve him appropriately.

訳すとこういうことになろう。

「目上の人へ忠義をつくすこと。例えば、常に主人に対して敬う気持ちを持ち、常に彼に奉仕する」

こうした倫理は西洋人には理解しにくいらしい。リチャードはこれを見て日本人の倫理観だと感じたと言ったが、私はむしろイスラム社会を意識して作った一文だった。

こうした内容について質問があったり、例を挙げてほしいと言われたり、あるいは自分はこう思うんだという話を聞かせてくれたり、様々な留学生から声をかけられた。バースにはこうして知り合った留学生たちとともに足を運んだ。

イギリス滞在最後となる週末はロンドンに行くことにした。どう

しても買いたいものと、行きたいレストランがあったからだ。

私はロンドン中心部の適当なホテルに電話をしてダブルルームを予約した。ロンドンのホテルのシングルルームは、よほどの高級ホテルでない限り、概してとても狭い。ダブルルームであってもベッドが大きいだけで部屋は狭い。このホテルはフル・イングリッシュ・ブレイクファストがついて一万八千円ほどだった。

オックスフォードからロンドンに出るには、電車かコーチとよばれる長距離バスで行く。電車だと一時間半ほどだが、少し高くつく。コーチの場合は二時間半ほどかかるが、そもそも料金が安いうえ、往復チケットにすると恐ろしいほどの割引がされる。しかも私は学生証を持っているのでさらに二割三割安くなり、往復でわずか二千円ほどしかかからない。当然のように私はいつもコーチを利用した。

私はグロースター・バスステーションのロンドン行きコーチのブースで二日間有効の往復チケットを買い、二階建てバスの二階の最前席に陣取った。ここは特等席で、素晴らしく見晴らしがいい。しかし八十席ほどもある座席のうち、たった四席しかないのです、とても競争率が高いのだ。私はこの特等席の高い位置から見渡すことができる、イギリス南部の丘陵を楽しみながら、のんびりとロンドンに向かった。

コーチはロンドンの中でも、ノッティンゲルやマーブル・アーチなどの主要なバス停にとまりながら、最終的にヴィクトリア・レイル・ステーションに到着する。ノッティンゲルを通るとき、私

は二年前にこの骨董市を案内してもらった時のことを思いだした。

暴動からはすでに二週間ほど経っていた。どんな様子か気になっていたのだが、コーチの中から見る限り、ロンドン市内に暴動の影響は残っていないようだった。

私はヴィクトリア・レイル・ステーションでコーチを降りると、バッキンガムまで歩き、さらにトラガルファー広場からビッグベンに抜け、その脇からテムズ川に出ると、のんびりと川畔を歩いた。当初から訪れるつもりだったショップがあり、決めてあった買い物をしたあと、今度はピカデリー・サーカス周辺で本屋に寄ったり、ジャパンセンターで日本食を買ったりした。

ロンドンに来た目的の二つ目。お目当てのレストランに向かう。そこはレスター・スクエアの中華街にあるチャイニーズ・レストランなのだが、二年前に偶然見つけた店だ。

鹹魚（ハムユイ）という中国産の魚の塩干がある。魚を発酵させてから干したもので、とても塩辛く、匂いもきつい。これを細かく刻んで油で炒め、鶏肉と甘みの強い紫タマネギを入れた炒飯がとてもおいしい店だ。二年前に偶然入った店でたまたまこのメニューを見つけ、今回も必ず訪れたいと思っていた。この店は他にもニワトリの指を八角と醤油で煮た前菜や点心もおいしい。実際、美味しい中華料理はヨーロッパの中華街にあり、ロンドンはその中でも有名な。横浜の中華街など本場に屁でもない。

私はピカデリーサーカスからレスタースクエアに向かい、突如と

してアジアの匂いの漂い出した街角で、建ち並ぶ店先に並べられた食材を覗きながら目当てのレストランまで歩いた。

残念ながらこの日、店は閉まっていた。仕方がない。一泊してまた明日来ることにしよう。ただ、ここまで歩いてくる間にもう一軒気になる店を見つけた。小籠包の店だ。店先で職人が忙しく生地を伸ばし、肉餡を詰めている。試しにここに入ってみた。

ビールを飲みながら待つと、大きな蒸籠が運ばれてくる。それは上海を訪れたとき、台湾の名店鼎泰豊で食べた以来の本格的な小籠包だった。鼎泰豊は一九九三年のニューヨークタイムズで世界の十大レストランに選ばれた店だ。しかしこの店もまったく遜色のない小籠包を作っていた。

夕方、OECのヒトミから電話がかかってきた。女子大生たちも近くにいると言う。合流して夕食を近くで食べることにした。彼女たちは中華料理を食べたいと言った。私は昼も中華料理だったことは言わなかった。イギリスでは二・三回中華料理が続くことなど何でもない。イギリス料理が続くことに比べれば天国だ。

翌朝はフル・イングリッシュ・ブレイクファーストの朝食をとり、早々にホテルを出た。この日はまず大英博物館に足を運び、その後ピカデリー・サーカス近くにあるフォートナム・アンド・メーションで目的の買い物をした。それからがいよいよ中華街である。

昼時に目当ての店を再び訪れた。今日は開店している。店に入るとボーイが出てくる。

「何人ですか？」

「僕一人です」

「ああ、今ちよっと混んでるんですよ。申し訳ないけれど」

「どのくらい待つかな？」

「さあ、今日は休日だからかなり混んでるんです」

「わかった、あとからまた来るよ」

ロンドンに来るのは二年ぶりだ。この次にいつ来るかもわからない。こうなったら意地である。何が何でもこの店に入る。私は本屋に入ったり公園で休んだり、街をぶらつきながら二時間ほど時間を潰した。長かった。

時刻は午後三時。三度目の正直で店に向かう。

今度は入ることができた。ようやくである。ようやく目当ての炒飯が食べられる。

さて、これだけ苦労して入った店の、この時の味はどうだったか。私は前菜にアヒルの舌をたのみ、そのあと小籠包と蒸餃子、そして鹹魚入りのアヒルの炒飯をたのんだ。その味は悪くはなかったけれども、二年前のあの感動には及ばなかった。いつもそうだ。二度目というのは感動が薄れてしまう。一度目の感動が大きいと、二度目への期待が大きくなりすぎてしまうのだろうか。

ロンドンは大らかな街だ。一日歩いているとグツタリ疲れてしまう。オックスフォードは静かでこじんまりとしているので、ロンドンに比べると田舎町に慣れた体が拒否反応を起こすのだろうか。帰りの

コーチがオックスフォードに着いたとき、心からホッとしたものだ。

Essence of Education

学問と教養

私はこの日もヴィクトリアでリチャードと話していた。

「リチャード、もうじき僕は日本に帰らなければならない。その前に教育について話をしたい」

「そうか、日本に戻らなくてはいけないのか。アキオ、早くオックスフォードに戻ってくることを願っているよ。オーケー、教育の話だね。私も教育をする立場だから、これは私にとっても興味のあるところだ」

「まずイギリスの状況を聞きたい。イギリスの教育の世界で近年問題になっていることは何だ？」

「そっちな…」

リチャードはあごを撫でながら少し考えて言った。

「本質的なことはともかく、よく言われるのは子供の学問離れ。テレビの影響、テレビゲームの影響だ。とくにプレーステーションやエックスボックスなんかのね」

リチャードの口からプレーステーションやエックスボックスなどという言葉が出てきたので驚いた。

「そうか、それは日本でももちろん問題になっているよ。しかもそ

れは日本の製品だ。イギリスでも問題になっているのか。申し訳なく思う」

リチャードは笑いながら言った。

[I accept your apologies.]

リチャードは話術の名手だ。相手を退屈させないユーモアをいつも入れてくる。私は続けた。

「でもゲームをしていて勉強しないというのは、小学生や中学生たちの話だろ？ 日本では大学生が勉強しないんだ。驚くほど勉強しない。これは日本にとって、とても深刻な問題だと思う」

「そんなにひどいのか？」

「僕も人のことを言えるほど勉強していたわけではないが、最近の大学生は本当にどうしようもないと思う。オックスフォードで知り合った日本人大学生が数人いる。外国人が彼らに話しかけるときに僕も一緒にいることがあるんだが、彼らの受け答えは自分の無知をさらけ出しているようなものだ。話を聞いてみると、本当に無知だ。大学には遊びに行っていると本人が言うくらいだ。イギリス人の学生は勉強するだろ？」

「うん、普通はやるな」

「彼らは日本でもけっして悪い大学に行っているわけではない。むしろハイレベルで知られる部類の大学の学生なんだ。僕は彼らにいろいろ質問してみたんだが、本はほとんど読まないらしい」

リチャードが不思議そうに聞いた。

「それで彼らは毎日何をしているんだ？」

「恥ずかしい話だが、カラオケ、パーティー、ショッピング、アルバイト・・・彼らからはそんな話しか出てこない」

「・・・ふん・・・イギリスの学生もそういう面はあるよ。ただし遊ぶのは普通週末だ」

「週末に遊ぶことなんては何の問題もないよ。むしろバランスがとれているじゃないか。僕は日本の将来は本当にまずいと思っている。彼らは人間的には決して悪い人間じゃない。むしろ接しやすい。でも知識欲がないんだ。アカデミックなことに関心を持つ力が衰退している。だから自分の国のことを聞かれても何も答えられない」

「それはダメだね。自分の国の歴史を知ることが国民としての基盤となる資質だ。それはやはり大事なことだ」

「そうなんだ。例えばこの前、その女子大生は、ドイツ人やスペイン人たちに日本の宗教のことを聞かれていた。「日本の宗教は何なんだ？」って。彼女は「知らない、いや、日本に宗教はない」と答えていた。そのあとロシア人に散々バカにされていたよ。あいつは何にも知らないアホだったね。残念だが、僕もあんなんでよくここに来たものだと思つたよ。あれは国辱だ。日本人は海外に出れば出るほど国益を毀損しているという感じを僕は拭えない。日本政府は留学する者に試験を課すべきだ」

「そうだな、自国の歴史や文化は常識だ。その民族をのことを考える基礎でもある。とても重要なことだ」

平等・民主主義とは何か

「それからもう一つ聞いておきたい」

「何だ？」

「平等とか民主主義についてだ。日本人の中には平等や民主主義を病的に信奉する風潮がある」

「もう少し聞かせてくれ。アキオは例えばどういうことを言わんとしているんだ？」

「日本人のある哲学者は、民主主義とは全てのことを自分たちで決定していると国民に思わせるための手続きだと言った。僕はこの考えはかなり本質を思っていると思う」

「なるほど面白い。民主主義はたしかに歴史的に勝ち取った価値だ。しかしある意味歴史の反動で神格化されている。それを統治者は逆にうまく利用しているということだな」

「民主主義も平等も幻想だ。それを信じすぎることは危険だと思う。こんな話がある。平等を信奉する教師たちが、運動会の競走で順位がつくのはよくないと言いだした。負けたやつが傷つくと言うんだ。そこでレースをしたとき、ゴールする手前で先に走っていた者はあとから来るやつを待って、一列に横並びになって、みんなで一斉にゴールすることにした」

「うわっはっはっは！」

リチャードは唸るような大笑いをして言った。

「名案だな、結果の平等しか見ていない奴はどこにでもいる。しかし勝っていた生徒の平等はどこに行つたんだろうね？ レースの平

等性はどこに行っただらうね」

「負けたら心が傷つくなんて感傷的なことを言うのは偽善だ。人生は負けることだらけだし、人生は不平等なものだ」

「その通りだ。負けることで人間は学び、強くなっていく。負けることを乗り越える力をつけさせることが教師の仕事だ。その教師たちは生徒が成長する絶好の機会を潰した。馬鹿な奴らだ」

「どうも平等とは何かについて日本人はきちんと理解していないと思う」

「ああ。平等というのはみんな一緒ではないといけないということじゃない。平等というのはフェアだということだ。例えばフェアの結果、お金を均等に分けなくてはいけないこともある。しかしフェア精神に基づいてプレーした結果、お金の分け方が不均等になることもある。フェアの結果、順位がついたり、勝ち負けが決まることもある。その場合は、それを受け入れるのもフェアなんだ」

教育の目的

「ところで、欧米人は一般に自分の言いたいことはきちんと主張するね。でも日本人は自分の意見をあまり強く主張するのはひかえる傾向があると思う」

「いやアキオ、それはひどくステレオタイプな言い方だ」

「そうかな。たとえばアメリカ人は欲しいものがあつたらはつきり言う。なぜなら、はっきり言わないで手に入らなかつたら、言わなかつた本人が悪いという考え方をするからだ」

「アキオ、僕がステレオタイプと言ったのは、アメリカはともかくとして、ヨーロッパをひどくくりにすることはできないということだよ。中欧・西欧・東欧それに北欧で違うし、もつともつと小さなレベルで文化の違いは存在する。欧米人というのはあまりにも大きく言いすぎだ。もつと言えば人によって違うよ。西欧人にだって控えめな人はたくさんいる」

「わかつた、その通りだリチャード。僕がこの話をしたのは、グローバル化した時代において、互いの文化の違いを『正確に』把握することが、良好な関係を築くために不可欠だと言いたかつたからなんだ。二年前、僕はオックスフォードで一人の中年の日本人女性とたまたま知り合いになつた。彼女は中学教師だ。その時彼女が気になることを言った」

「ほう、何と言つたんだ？」

「彼女は日本人はダメだと言つたんだ。西欧人留学生はどんなに若くても授業中にどんどん発言をするし、自己主張をする。若い時から自分を確立している。ところが日本人は授業中になかなか発言できないし、言いたいことがあつても言えない。日本人は自己主張しないからダメだ、日本人はもつと自己主張すべきだというんだ。僕はその考え方は間違つていると彼女に言った」

「なるほど」

「そもそもヨーロッパと日本では教育のシステムが違う。ヨーロッパでは二十人学級は珍しくないが、日本では四十人以上の学級が普通だ。それに背負っている文化が違う。形だけ欧米の真似をした

ら、いろんな行き違いがおこって全てがおかしくなる」

「強く主張しないというのは、美しい精神文化だと思うよ。確かに意見を言わない日本人は考えていることが分からないと、多くのヨーロッパ人は思うかもしれない。でもそこはそうやって成立している文化なんだ。イギリス人にも似たような部分はある。僕は美しい気質だと思うよ」

「ありがたい。自国のことだから言いにくいだが、客観的に見て、日本人は多少のトラブルがあっても相手を許す文化、一步譲る文化の民族だ。常に相手の気持ちを汲んで人と接する、そうやって人間どうしの摩擦を避ける仕組みなんだ。そうした底流は今でも日本人の中に流れていると思う。でも近年、ズケズケ言うのが正しいと勘違いしたさっきの中年女性のような人間が増えてきた。摩擦が増えて、社会の中にストレスが生まれている。だからといって、彼らは西洋流の個人主義を理解しているわけでもない」

「互いに譲るといふ共通認識の中で無遠慮にズケズケと言うやつがいたら、言われた方が頭に来るのは当然だ」

「そうなんだ。そうやって摩擦が増えた。僕は自国の批判はしたくない。でも日本を誇れる国にするために言うなら、今の日本人は子供みたいに負けず嫌いな人間が増えた。もちろんすべての日本人ではないけれどね。だが僕は現代日本で問題になっているこうした様々なストレスの一因は、日本の精神文化の中にアメリカ式という異分子を無思慮に導入したことが関係していると思う」

「つうむ、それはありうる話だ。ところで、そもそも日本人に特徴

的な、『譲り合う精神風土』はどうして培われたんだ？」

「農村社会だと思う。昔の日本の農村の多くは山に囲まれていて、孤立していたとまではいえないけれど、かなり閉鎖的なコミュニティだった。そこに住んでいれば嫌でも毎日同じ村人たちと顔を合わせる。だからコミュニティの人間関係が濃いんだ。そういう共同体の中でもめ事が起こると面倒だ。濃厚接触をしながらも摩擦を避ける術として、自然と相手のすることに目くらまを立てるのではなく、許したり、見て見ぬふりをする習慣が培われたんだと思う」

「そういうことか。ヨーロッパにもそういう場所はたくさんある。もつとも彼らは、何かあったらブツブツ悪口を言いながらワインを飲んで忘れるようにしているみたいだがね」

「しかし今の日本人は小粒になってしまつて、そういう寛容さが希薄になった。残念だ。もちろん僕はアメリカの批判をしているわけではなく、内在論理が極端に異なる文化は溶け合わないということが言いたいんだ。分離してしまうような異質なものを、無理に根づかせようとしたらとんでもないことになるといういい例だと思う」

「ふむ、なるほど。まあ例えばアメリカ人にはアメリカ人なりの文化的・歴史的な背景があつて、それもまた一つの公理系だということだな。しかし日本人はそのアメリカの公理系を誤解したまま現象だけ輸入したということだね。いまアキオが言ったことの中で、『内在論理の異なる文化は溶け合わない』、『無理に根づかせようとした

らとんでもないことになる』、という二つは特に重要で、どちらも大きな命題だ。難しい問題だが、僕なりに少し指摘をしたい。これは結局、双方の文化を深くまで理解することでしか解決しない問題だ。だからこそ真摯にアカデミズムに向き合う姿勢が大事なんだ。結局は思考停止が問題なんだよ。アキオが言うように、内在論理の異なる文化は最後のところでは溶け合わないのも確かだ。だが互いの文化を真摯に理解することができれば、取り入れられることと取り入れられないことの峻別ができるようになる。ここがグローバルゼーションの要諦だよ」

「初めから溶け合わないと決めてかかって門前払いするべきではない、ということか」

「いや、そうじゃない。溶け合わないことは確かなんだ。でも異なる公理系の住人どうしが共存することも、もはや不可避だということだ。この矛盾をどう解くかだよ。要はどうやってうまくやるかだ。それを打開できるのは相手の公理系を深く知るといふ（知性の力）しかない。『僕も引けない、でも相手の思いも分かる』という気持ちになれることが大事だと思う。アキオ、ここに教育者の使命があるんじゃないのか？若者の『アカデミズムと正面から向き合う姿勢』を育むのは、教育者の大事な役割だろ？」

「リチャード、まったくその通りだと思う。大きなテーマだが、それはたしかに僕たちの仕事だ。でもリチャードの言うような境地までいくには、僕たちもかなりの勉強が必要になる」

「そうだよ。なぜならアカデミズムとの向き合い方は、それを実践

して見せることでしか教えられないことだからだ。勉強しろと口でいうのは簡単だ。でもそれでは何も教えたことにはならない。これは口先でどうこうできることじゃない。たしかに実践し続けることは大変なことだよ。だからそれができない教師たちは「将来のために勉強しろ」などと嘘を言うんだ。そういう手でしか勉強をさせることができないような教師に当たった学生こそ災難だ。連中自身、何のために学ぶのか分かってないんだよ」

「手厳しいね。でもその通りだ。リチャードの言うことはいちいち説得力があるよ。ところでリチャード、君の正直な意見を聞きたい。リチャードは教育の目的とは何だと思う？」

「それは教育そのものの目的ということか？」

「そうだ」

「アキオはフーコーは読んだか？」

「監獄の誕生しか読んでいない」

「よし、それでいい。僕の考えでは教育の目的とは「従順な市民を作ること」だ。それ以外にない」

「フーコーの体系に従えば、学校は社会に適応した人間を作るシステムで、監獄と同様の機能体だということだな」

「そういうことだ」

「それは僕にもよく分かるよ。えらくネガティブな捉え方だと思っうけれど」

「アキオはどう思っているんだ？」

「教師が一人一人の人生をフォローすることは重要だ。生徒たち

の可能性を広げ、良い方向へ導き、彼らの幸福をできるだけ最大化することは大事なことだと思う。でもそうした対個人のパスpekタイプだけではまだ半分だ。どのような資質をもった人間を社会に輩出するかという視点、つまり人材をもって社会の質の向上するという考えが欠けてはいけないと思う」

「そうだよ、それが我々の本当に考えるべきことなんだ。国家におもねるのではない。民族の歴史を読み解くことで、イギリスという祖国が、日本という郷土が長い時間軸の上でどんな声をあげているのかに耳を澄ますことだ。そのために何ができるかということだ。教育者はその声を聞いて人間を育て、人材を作らなくてはいけない」

「それは言いかえれば、教育はその国の文法に基づいているということじゃないか。僕には好ましい答えだよ」

「そうだ、アキオの研究そのものを全面的にフォローするだろう」
「うん。僕はそれを肯定的に受け取っているが、それを客観的に冷めた目で見ればまさにそういうことになる」

リチャードは煙草の煙を深く吐きながら言った。

「アキオ、誰にでも背負っているものがある。僕にとつてそれはキリスト教だ。それは長い歴史に育まれた物語だ。アキオにとつては武士道だろう。あるいは日本人の物語だろう。それは内側からしか理解できない。君は僕の世界を理解することはできないし、僕は君の世界を理解することはできない。互いの文化を理解するなんて簡単に言うべきではないし、頭で思っているだけではナンセンスだ。

しかしだからこそ想像しようとする姿勢が重要なんだ。相手のことは理解できない。でも相手の背後には私がついているのと同じように本人にさえどうすることもできない絶対的な世界がある。そういう想像力が重要なんだ」

リチャードは銀色のクセ毛を掻きあげながら言った。

「アキオ、だいぶ酔いが回ってきたよ。ついつい飲みすぎた。このグラスを最後のグラスにしようと思う」

「リチャード、君に会えてよかった。君の話はいつも興味深かったし、いつもポイントをつけて議論してくれた」

「こちらこそありがとう。僕は他の学者と議論するのが好きなんだ。いつものことだよ」

「今回オックスフォードに来て、最大の収穫はリチャードと会えたことだよ。研究以上に大きいことだった。本心でそう思っている」

「それは光栄だ。アキオ、オックスフォードに戻ってきてくれることを僕は望むよ。オックスフォード大学に來い。できるだけ早く戻ってこい」

「いや、この年齢でオックスフォード大学の学生になるのは難しいよ」

「何言っているんだ、学者として来いといっているんだ」

「いやいや、とんでもない。僕にとつてはハードルが高すぎる」

「語学だ。英語を上達させる。アキオの英語は私の日本語に比べればずっとずっと上手い。イギリスで生活するだけならそれほど不自由しないだろう。でも大学内の研究やデイベートの場で使うにはま

だ力不足だ。日本にもネイティブ・スピーカーはいるだろ？契約を結んで徹底的に語学をやるんだ」

「そうだな、何にせよ、英語力については考えてみるよ」

「ここでまた一緒に飲めることを楽しみにしている」

そういつて私たちは固い握手をした。

時計の針は午前一時を指していた。私は立ちあがって初めてしたたか酔っていることに気づいた。レンガ色の家屋が建ち並ぶウッドストック・ロードのオレンジ色の街灯に照らされながら、私は右に左によるめきながら三十分ほどの道のりを部屋まで歩いた。明日の今頃は私はもうイギリスにいない。そして今、私はオックスフォードにまだいるのだという、それだけのことを嬉しくもさみしくも思い、深呼吸を一つしてから、誰も歩いていない深夜の舗道を右足で何度も踏みしめた。